

和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第34集

秋月遺跡 第9次発掘調査概報

2002

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序 文

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置します。本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川は、肥沃な和歌山平野を形成し、この平野部を中心として様々な人々が生活を営み、数多くの遺跡が残されています。

今回、調査を行いました秋月遺跡は、紀伊国の一宮であります日前・国懸神宮の周辺に広がる古墳時代を中心とした遺跡で、県内では最も古い時期の前方後円墳が発見されたことで知られています。また、周辺には近畿で最初に発見され、国の史跡でもある鳴神貝塚や銅鐸が出土し、近年前期の多重環濠が発見された太田・黒田遺跡、全国でも屈指の群集墳である岩橋千塚古墳群など全国的にもよく知られている遺跡が多く存在する地域に位置します。

調査の結果、古墳時代の大型竪穴住居、鎌倉時代の大溝や井戸など多数の遺構、また弥生時代前期の土器や神宮寺に関係するとみられる平安時代の瓦など膨大な量の遺物が見つかりました。これらの成果から日前・国懸神宮の東側周辺には人々が連綿として生活していたことを明らかにすることができました。

ここに報告する調査成果が、広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにできれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成14年3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
理事長 喜 多 誠 一

例 言

1. 本書は、和歌山市が計画した和歌山市秋月346番地所在の市立日進中学校の校舎建設に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約800㎡を2001年9月25日から2002年3月29日までの期間で実施した。
3. 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	山口喜一郎	理事長	喜多誠一
文化財室長	榎本直樹	総務室長	高野眞次郎
文化財室班長	田中郁次	総務室班長	久保雅英
学芸員	益田雅司	主 事	山口美二（調査庶務担当）
		学芸員	井馬好英（発掘調査担当）

4. 本概報掲載の遺跡・遺構の写真撮影は井馬の他、学芸員北野隆亮・藤藪勝則が行い、遺物写真撮影は井馬の他、学芸員奥村 薫が行った。
5. 本書の執筆は井馬と奥村が分担し、編集は井馬が行った。なお、各執筆分担の文責は目次に示した。
6. 写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。
7. 瓦の名称・計測部位等については、和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第22集及び第24集の凡例に準拠した。
8. 概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1. 調査の契機と経過	(井馬好英)	1
2. 位置と環境	(")	2
3. 調査の方法と経過	(")	4
(1) 調査の方法		4
(2) 調査の概要		4
4. 遺構	(")	6
(1) 弥生時代の遺構		8
(2) 古墳時代の遺構		8
(3) 奈良時代の遺構		12
(4) 平安・鎌倉時代の遺構		12
(5) 室町時代の遺構		15
(6) 江戸時代の遺構		16
5. 遺物		18
(1) 弥生時代の土器	(井馬)	18
(2) 古墳時代の土器	(")	19
(3) 奈良・平安時代の土器	(奥村 薫)	27
(4) 鎌倉・室町時代の土器	(")	30
(5) 江戸時代の土器	(井馬)	42
(6) 瓦	(奥村)	43
(7) 土製品・瓦製品	(")	47
(8) 石器・石製品・石造物	(井馬)	48
(9) 金属製品	(奥村)	51
(10) 木製品	(井馬)	51
(11) 自然遺物	(")	52
6. まとめ	(井馬)	52
(1) 遺構の変遷について		52
(2) 秋月遺跡検出の竪穴住居について		54
報告書抄録		56

図版目次

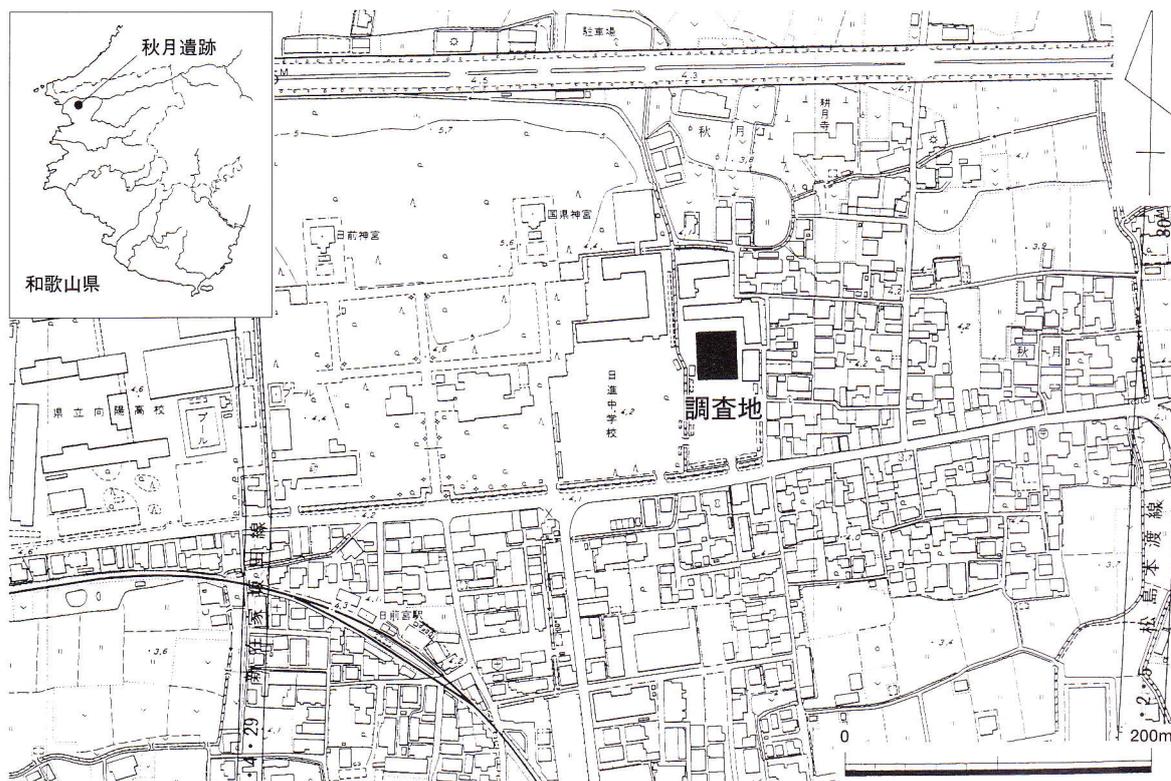
- 図版1 調査前の状況(北西から)、調査地近景(西から)
- 図版2 第1区全景(右が北)、第1区全景(北から)
- 図版3 第2区全景(右が北)、第2区全景(北から)
- 図版4 第2区P-526遺物出土状況(北西から)、第1区SE-4(西から)
- 図版5 第1・2区SB-1~3(上が北)、第1区SB-1(北から)
- 図版6 第1区SB-1土層堆積状況(東から)、第1区SB-1炉土層堆積状況(東から)
- 図版7 第1・2区SB-2(南東から)、第2区SB-3(南から)
- 図版8 第2区SE-6(東から)、第1区SK-69(北東から)
- 図版9 第1区SK-75(北から)、第1区SE-2(東から)
- 図版10 第1区SE-3(東から)、第1区SD-8・12(南から)
- 図版11 第1区SD-7・8土層堆積状況(北から)、第1区SD-12土層堆積状況(西から)
- 図版12 第1区SE-1(南西から)、第1区SE-1c(南から)
- 図版13 第1区SD-14遺物出土状況(西から)、第2区SK-118遺物出土状況(北から)
- 図版14 第1・2区SK-58遺物出土状況(北東から)、第1区SK-30(西から)
- 図版15 第2区SE-5(西から)、第2区SE-5断割状況(南から)
- 図版16 第1区SK-4(西から)、第1区SK-61(西から)
- 図版17 第2区噴砂検出状況(西から)、第1区北壁土層堆積状況(南から)
- 図版18 SK-19出土遺物、P-526出土遺物、SK-103他出土遺物
- 図版19 SE-4出土遺物、SB-2出土遺物、SB-1出土遺物
- 図版20 SB-2出土遺物、SB-1出土遺物、SE-6出土遺物、SK-89出土遺物、SK-91出土遺物
- 図版21 SK-69出土遺物
- 図版22 SK-69出土遺物
- 図版23 SK-54出土遺物、SK-75出土遺物、SK-51他出土遺物
- 図版24 SE-2出土遺物、SK-102出土遺物、SD-30出土遺物
- 図版25 SE-3出土遺物、SK-27出土遺物
- 図版26 SD-12出土遺物
- 図版27 SD-12出土遺物
- 図版28 SD-8出土遺物、SK-23出土遺物
- 図版29 SE-1出土遺物、SK-106出土遺物、SK-97出土遺物、SD-28出土遺物 他
- 図版30 SK-131他出土遺物、SE-5出土遺物、SK-15出土遺物、SK-61出土遺物
- 図版31 軒丸瓦、軒平瓦
- 図版32 丸瓦、平瓦、鬼瓦、雁振瓦、棟込瓦
- 図版33 土製品、瓦製品、石器、石製品
- 図版34 石製品、石造物、金属製品、木製品、自然遺物

1. 調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市が和歌山市秋月346番地に所在する和歌山市立日進中学校において旧校舎が老朽化のため新校舎を建設することになり、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である秋月遺跡（遺跡番号331）の範囲内であったため、和歌山市教育委員会（文化財室）が指導を行い、第9次調査として発掘調査を実施することとなった。

調査対象地は、秋月遺跡範囲の東端部にあたり、昭和62年に調査を行った第4次調査地と一部重複し、平成11年に調査を行った第8次調査地の北側隣接地にあたる（第1・3図）。この市立日進中学校に関する調査は、今回の調査で7度目となる。過去の調査では古墳時代の竪穴住居や井戸、奈良時代の柱穴や土坑が検出され、これらに伴う多量の遺物が出土している。また前回の第8次調査では、弥生時代前期の石器製作に関わるとみられる土坑や自然流路、古墳時代前期の土器廃棄土坑や後期の竪穴住居の他、奈良時代の井戸、鎌倉時代の溝や土坑、室町時代の土坑など多くの遺構を検出し、また神宮寺に関係するとみられる平安時代まで遡る瓦をはじめとした多量の遺物が出土した。

今回の調査は、和歌山市教育委員会（文化財室）の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同市教育委員会から委託を受けて行った。また現地における調査の期間は、平成13年9月25日から平成14年3月29日までの6ヶ月間を要し、第1区の空中写真撮影及び航空写真測量を平成13年12月5日に、また第2区の空中写真撮影及び航空写真測量を平成14年3月12日にそれぞれ行った。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。本市は和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に注ぐ紀ノ川によって形成された和歌山平野を中心に立地している。今回報告する秋月遺跡（1）は、和歌山平野の中央部、紀ノ川南岸の標高約4mの微高地上に立地している（第2図）。

秋月遺跡は、紀伊国の一宮として知られる日前・国懸神宮の周辺に広がる遺跡である。神宮の西側に隣接する和歌山県立向陽高校の敷地内から県内では最古級とされる古墳時代前期の前方後円墳が検出され、古墳時代の遺跡としてよく知られている。またこの周辺はいわゆる河南条里と称される紀ノ川南岸の条里地割が良好に残る地域であり、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く出土することも含めて注目される地域の一つとされている。

周辺の遺跡について概観すると、まず縄文時代では東方約1kmの岩橋山塊丘陵裾部に国の史跡に指定されている鳴神貝塚（9）が位置する。鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された貝塚で、土坑墓や甕棺が検出され、縄文時代中期から晩期の土器とともに弥生時代前期の土器も出土している。また縄文晩期の土坑墓から猿の橈骨で作った耳栓を供伴した若い女性の伸展葬人骨が発見され、上下の門歯を抜歯していたことなどから、この女性がシャーマンと考えられている。

弥生時代では北西側に隣接する太田・黒田遺跡（2）が知られており、当遺跡を含め周辺部は紀ノ川の沖積作用による陸化が最も早く進行した地域といえる。太田・黒田遺跡は中期を中心とした県内最大規模の集落跡であり、多量の弥生土器の他、銅鐸など注目される遺物が出土している。また昨年度の調査において、既に前期段階で二重の多重環濠で囲まれた環濠集落であったことが新たに確認された。さらに、遺跡西縁辺部の調査によって中期段階からの水田跡や水路などが検出され、直柄広鋤・一木平鋤などの木製農耕具が出土していることから、この周辺を中心に生産域が展開していたものとみられる。

古墳時代には弥生時代に続き平野部を中心に集落が形成されている。当遺跡の北東部に隣接する鳴神Ⅴ遺跡（6）や鳴神Ⅳ遺跡（5）、音浦遺跡（8）などで構成される鳴神遺跡群では、多数の堅穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出され、当遺跡周辺が古墳時代集落の中心部であったものと考えられる。また西側約1kmに位置する友田町遺跡（4）でも前期から後期にかけての堅穴住居や掘立柱建物などの遺構が検出され、滑石製の勾玉や剣形模造品などの祭祀関係遺物が一括出土している点で注目できる。古墳の築造は、前期に秋月遺跡において前方後円墳及び方墳群が築造され、その周辺部の鳴神Ⅴ遺跡などにおいても円墳及び方墳群が造られている。また前期末には花山丘陵上の花山古墳群（11）が造営され、中期後半から後期にかけて岩橋山塊の岩橋千塚古墳群（13）などで連綿と古墳の築造が続けられた。その一方、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡などにおいて中期から後期にかけての方墳が検出され、鳴神Ⅴ遺跡では土坑墓・箱式石棺墓も確認されていることから、平野部においても墓域が展開していたものとみられる。

歴史時代になると、鳴神Ⅴ遺跡において奈良時代から平安時代にかけての土馬、陶硯、緑釉・灰釉陶器、初期貿易陶磁器などの特記すべき遺物が出土し、官衙的な施設が存在していたものと考え

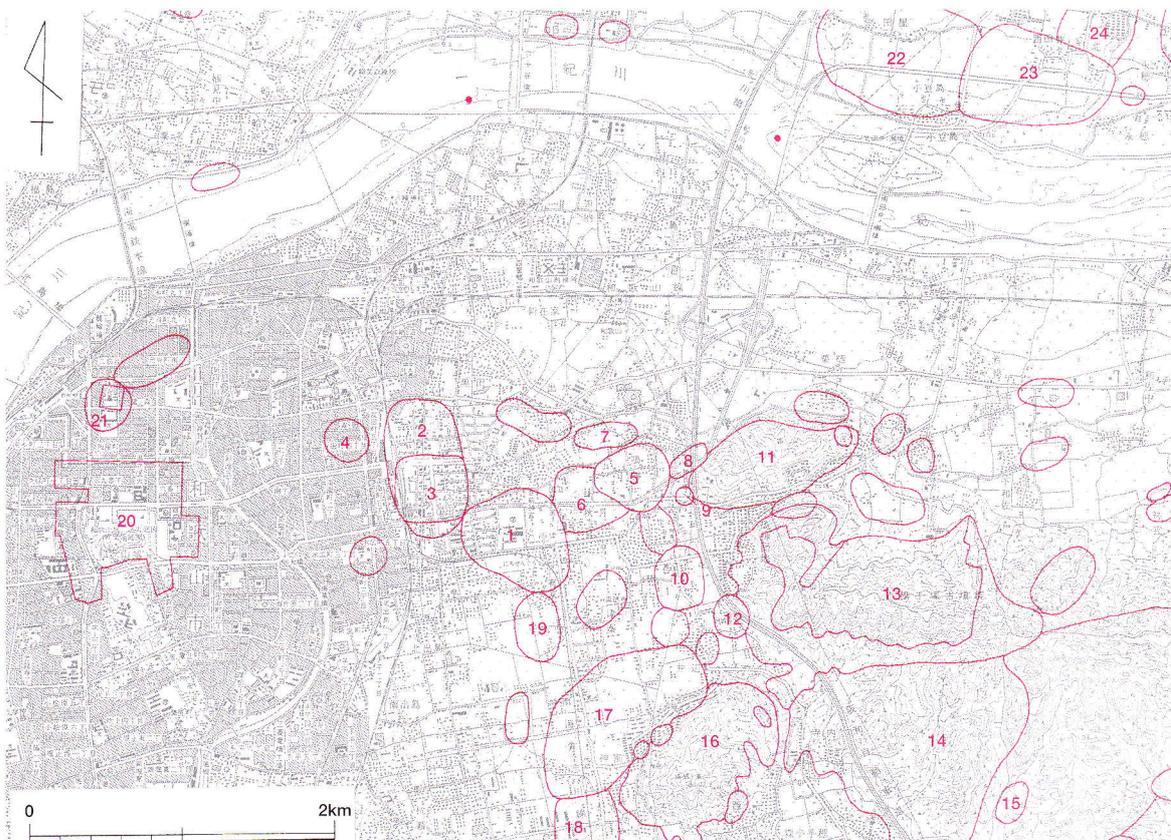
られている。太田・黒田遺跡では奈良時代の井戸が2基検出され、井戸底から斎串や和同開珎42枚、万年通寶4枚などが出土しており、井戸祭祀に関わるものとして注目できる。当遺跡においても、奈良時代から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸などが検出され、日前・国懸神宮に関わる大規模な集落跡が存在するものとみられる。

平安時代には、当調査地周辺に神宮寺が存在したものと考えられるが、これまでの調査では神宮寺に関係する多量の瓦類が出土するものの明確な遺構の検出には至っていない。

鎌倉時代には、鳴神V遺跡において溝、河道、石組井戸、土坑墓などが検出されている。当遺跡においても2000年に調査を行った第8次調査において東西12m、南北16m以上の大規模な土坑などを検出し、後期を中心とする遺物が多数出土した。

室町時代には、太田・黒田遺跡と重複する雑賀衆の太田城跡(3)が存在する。太田城は羽柴秀吉の紀州攻めの際の水攻めがよく知られるところであるが、その構造や規模は不明である。しかし、1968年に行われた当初の調査や1987年の第19次調査などにおいて、東西方向の幅10m、深さ3mを測る中世の大溝が検出され、太田城に関わりをもつ遺構として注目されている。

江戸時代の遺跡としては、史跡和歌山城とその城下町に相当する和歌山城跡(20)及び鷺ノ森遺跡(21)などがあり、特に鷺ノ森遺跡では「大水道」と呼ばれる大規模な下水道施設や礎石建物、鍛冶炉などの遺構や膨大な量の遺物が出土している。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	秋月遺跡	弥生～江戸	7	鳴神VI遺跡	弥生～江戸	13	岩橋千塚古墳群	古墳	19	津秦遺跡	弥生
2	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	8	音浦遺跡	古墳	14	寺内古墳群	古墳	20	和歌山城跡	江戸
3	太田城跡	安上・桃山	9	鳴神貝塚	縄文～弥生	15	吉礼砂羅谷窯跡	古墳～奈良	21	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
4	友田町遺跡	弥生～平安	10	鳴神II遺跡	弥生～平安	16	井辺前山古墳群	古墳	22	田屋遺跡	弥生～古墳
5	鳴神IV遺跡	弥生～江戸	11	花山古墳群	古墳	17	井辺遺跡	弥生	23	西田井遺跡	弥生～室町
6	鳴神V遺跡	弥生～鎌倉	12	大日山I遺跡	古墳～奈良	18	神前遺跡	弥生～江戸	24	北田井遺跡	弥生～古墳

第2図 秋月遺跡周辺の遺跡分布図

3. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査区は、基本的に工事計画範囲の南側、第8次調査において遺構の集中した微高地部推定地を中心に設定した。調査地は日進中学校の東運動場に位置するため、排土置き場の制約から東西を2分するラインを設定し、2期に分けて調査を行った。この第1期にあたる東側を第1区、第2期にあたる西側を第2区と定めた(第3図)。

調査の方法は、当地が盛土を施した運動場であったことから、上層に堆積した盛土と近代の整地土を重機によって掘削を行い、第3層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。遺物の取り上げについては、調査区内外に国土座標の整数値に合った杭を設置し、4mメッシュの地区を設け、その単位ごとに取り

上げを行った。堅穴住居や溝等の遺構掘削については、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け、写真撮影を行い、2層以上の堆積が確認できたものについては実測図等の記録

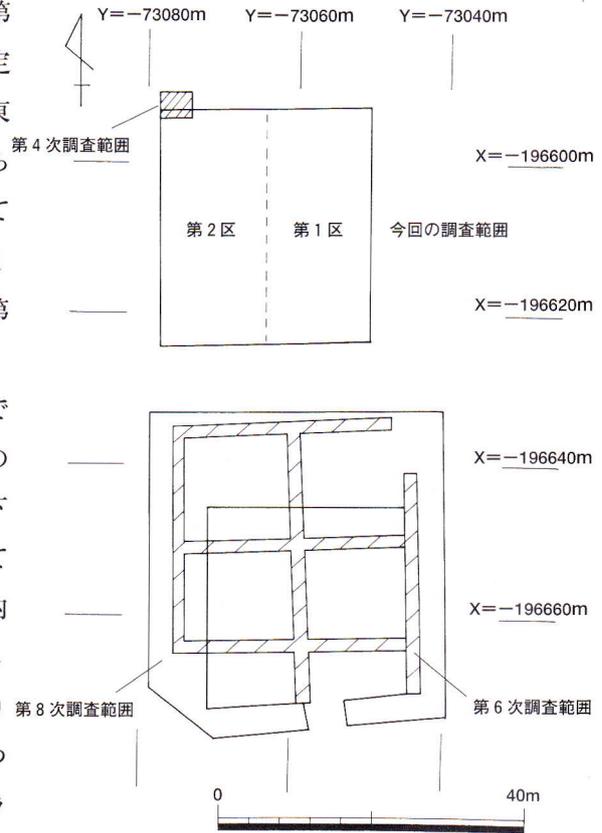
保存を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準に実測を行った。また遺構平面図はラジコン・ヘリコプターによる航空写真測量を行い、縮尺1/40で作成し、第1区と第2区を合成して遺構全体図とした。各地区の壁面土層断面図や堅穴住居などの主要な遺構の平面図及び土層堆積状況図については、1/20の縮尺を用い手実測で行い、重要な遺物出土状況図や特殊遺構については1/10の縮尺を用いた。また遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

(2) 調査の概要

調査地の基本層序は第4図に示した通りである。調査地の現況が運動場であるため、表土は厚さ10~20cmを測る整地土である。この表面は北東部から南西部にかけて緩やかに傾斜する。

表土及び整地土下の状況は、調査区中央部を南北に貫く鎌倉時代の溝(SD-12)の南肩部を境として大きく異なる。まず北側の微低地部では、近代以降の整地層(第1a~2層)が約70cmと厚く堆積し、その下層に明治時代の水田耕土である第3層を検出した。この第3層は標高3.7m前後を上面



第3図 調査地区割図

とし、ほぼ水平に堆積している。第4層は北側の微低地部（第4a層）と南側の微高地部（第4b層）では若干土色等に違いがあるものの、ともに10～20cmの厚みをもつ江戸時代の遺物包含層である。この第4層の下面が今回の調査においてすべての遺構を検出した遺構面である。この遺構面を形成する第5a層は、調査区全体において検出したもので、第6・8次調査時の第7層に相当する。第5a層は、20～60cmの厚みをもつ黄褐色系の細砂混シルト質層で微量の弥生時代前期の遺物を含む遺物包含層である。また北側微低地部の東側に位置する第1区では、第5層が2単位に分けられ、その下位層にあたる黄褐色の細砂を第5b層とした。

第5層下の状況は、第1区北東隅及び南東隅に設定した下層調査のための深掘トレンチと第2区北西隅に設定した噴砂の状況確認のための深掘トレンチにおいてそれぞれ確認したものであり、これらの壁面精査から第12層までの堆積を確認した。第6層は、北側の微低地部（第6a層）と南側の微高地部（第6b層）では若干土質等に違いがみられる。第6層から下は、5～10cm程度の厚みで細分できる細砂・礫・粘土の互層となり、弥生時代前期以前の氾濫原による自然堆積層と考えられた。

また噴砂は、第2区の北西部及び南西部においてそれぞれ検出した（図版17上）。これらの噴砂はともに第8層のオリブ褐色系の礫混粗砂が第5a層を貫いて噴き上げたものである（写真1）。その方向性はN-30～45° -Wのものとなし、N-90° -Wのものがあり、時期的には平安時代後期の土坑（SK-102）の底面で検出したことから、この噴砂を引き起こした地震は弥生時代前期以降、平安時代後期までの間に起こったものと考えられる。

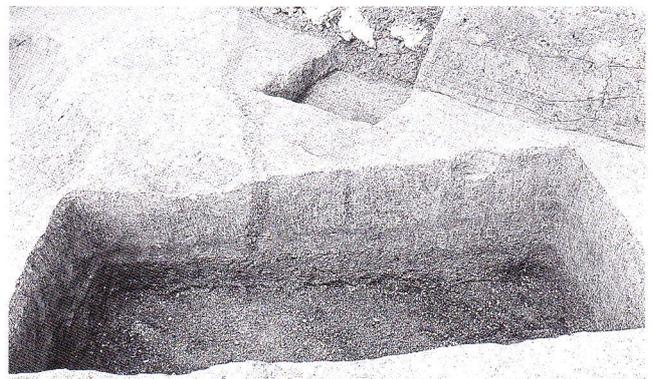
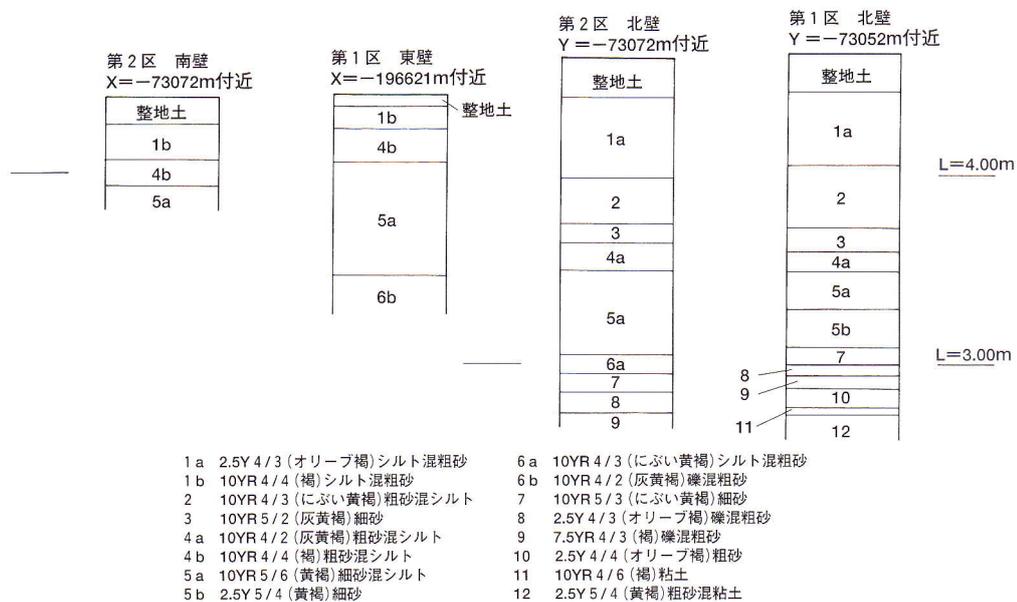


写真1 噴砂断割状況（南東から）



第4図 調査地土層柱状模式図

4. 遺構

遺構は、調査区のほぼ全体において弥生時代から江戸時代にかけての時期のものを多数検出した。検出した遺構は、第1区から第2区を通して調査区を東西に貫く鎌倉時代の大溝（SD-12）を境として南側の微高地部には古墳時代から鎌倉時代のもものが中心となり、また北側の微低地部では鎌倉時代から江戸時代のもものを中心として検出した（第5図、図版2・3）。

まず弥生時代の遺構では、第1区の北端部で検出したSK-19や第2区の南端部で検出したSK-109・P-526などがある。SK-19やP-526からは、前期に比定できる完形の広口壺が出土しており、壺棺の可能性が考えられる。

弥生時代から古墳時代の過渡期にあたる庄内式併行期の遺構は、調査区南半部を中心として竪穴住居3棟（SB-1～3）、井戸1基（SE-4）などがある。中でもSB-1は方形の大型竪穴住居で、鳴神遺跡群など周辺の集落を含めても最大規模のものとして重要である。

古墳時代の遺構は、前期の布留式併行期に比定できるものとして井戸1基（SE-6）、土坑1基（SK-89）を、中期のものとして溝1条（SD-16）や土坑1基（SK-91）、後期のものとして土坑1基（SK-69）などを検出した。これらの覆土内からは多量の土器が出土し、特にSE-6やSK-89・69は土器を用いた祭祀が行われていた可能性が考えられた。

奈良時代の遺構は、第1区南端において検出した土坑2基（SK-54・75）、第2区南半部において検出した溝1条（SD-32）や土坑（SK-100）などがある。中でもSK-75の覆土には多量の炭や焼土が含まれ、覆土内から須恵器の蓋杯や土師器の甕などが多量に出土した。

平安時代の遺構は第1区北半部で検出した井戸（SE-2）、第2区南半部で検出した土坑（SK-102・106）などがあるものの全体的にみて希薄である。しかし、多量に出土した瓦類が平安時代後期に比定できるものが多く、神宮寺関係遺物として注目できる。

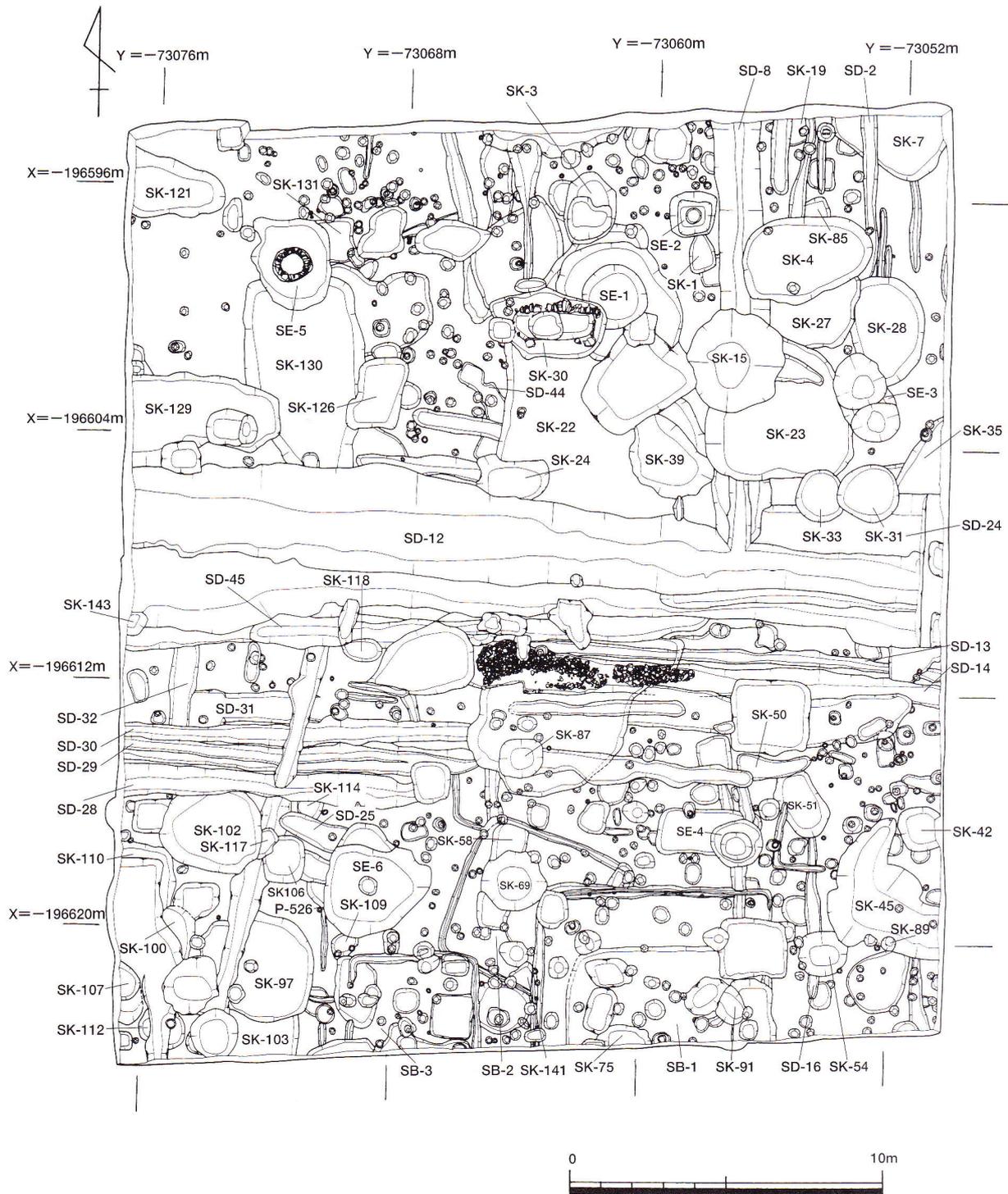
鎌倉時代の遺構は他の時期に比べ最も多く、調査区全体において数多く検出した。その中で特筆すべきものには、調査区中央部を東西に貫く大溝（SD-12）やSD-12に直交して取り付く溝（SD-8）、井戸2基（SE-1・3）などがある。井戸は、石組で2度の造り替えがみられたSE-1や素掘り状に掘削されたSE-3がある。また調査区南半の微高地部において検出した溝7条（SD-13・14・28～31・45）はSD-12に平行して掘削されたもので、関連性が考えられる。特に、SD-14は多量の瓦で埋没している特徴がある。土坑では瓦溜状のもの（SK-58・118）の他、調査区北半部の微低地部を中心として比較的大規模に掘削された土坑（SK-27・28・39・130）などを多数検出した。なお、SE-1、SD-8・12などは室町時代まで用いられていたものとみられる。

室町時代の遺構は、第1区の北半部において検出した土坑2基（SK-4・23）や結晶片岩の石組によるタメマス状の遺構（SK-30）、第2区北半部において検出した石組井戸（SE-5）などがある。SE-5の石組内には一石五輪塔が転用され使用されていた。また、先述の鎌倉時代のSD-12の最上層である第1a層にはこの時期の遺物が含まれている。

江戸時代の遺構は調査区全体において土坑（SK-3・15・24・31・33・45・126・121）などを中心として検出したが、特筆すべきものに土葬墓と考えられる土坑（SK-61）がある。また室町時代後期に構築された石組井戸（SE-5）の埋没時期は江戸時代中期と考えられる。

ピットは、ほぼ調査区全体において検出した。ピットの時期として、出土遺物から上記のすべての時期が混在するものと考えられる。

以下、主要とみられる遺構を時期の古いものから各時代ごとに説明する。



第5図 遺構全体平面図

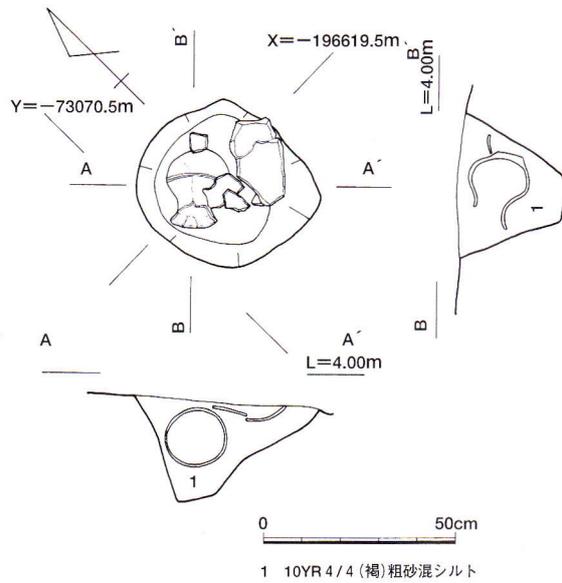
(1) 弥生時代の遺構

[P-526] (第6図、図版4上)

P-526は、第2区の南半部ほぼ中央部で検出したピットである。このピットの規模は、東西40cm、南北45cmの不正円形のもので、深さ25cmで播鉢状に落ち込む。ピット内部の中央には弥生時代前期の広口壺(第21図、3)が横位の状態で出土し、その上部には遠賀川系の甕(第21図、9)が同様に横位の状態で出土した。

[SK-19]

SK-19は、第1区の北端部で検出した不定形の土坑である。この土坑は東西の両端をSD-1・3によって削平を受けていることなどから残存状態が悪く、また深さは10cm程度である。この土坑から広口壺2点(第21図、1・2)がほぼ完形の状態で出土した。

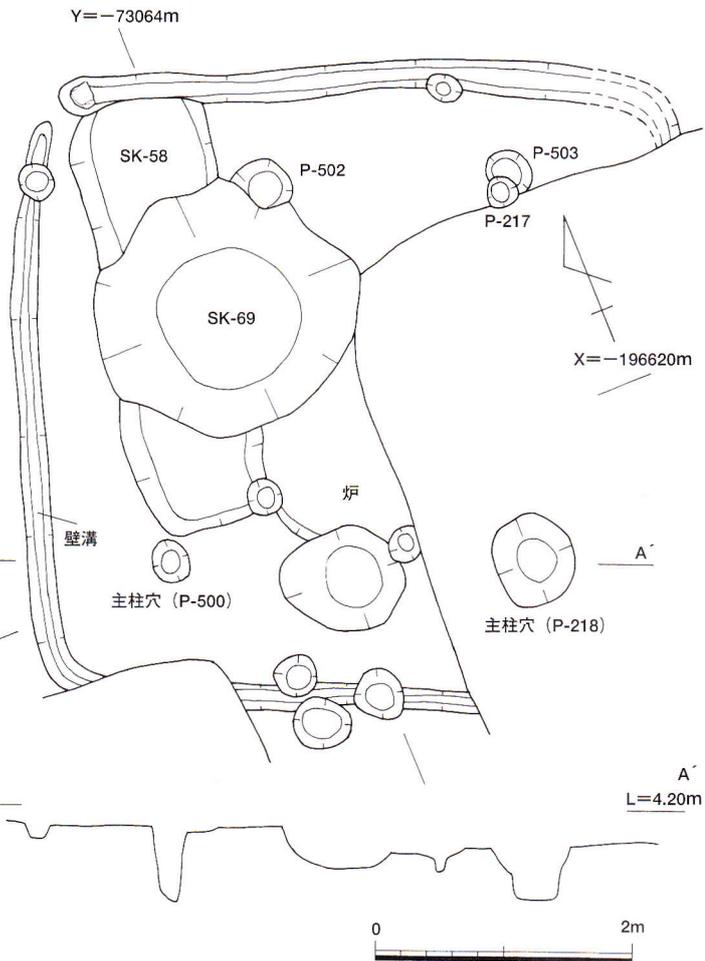


第6図 P-526遺構平面図及び土層断面図

(2) 古墳時代の遺構

[SB-2] (第7図、図版5上・7上)

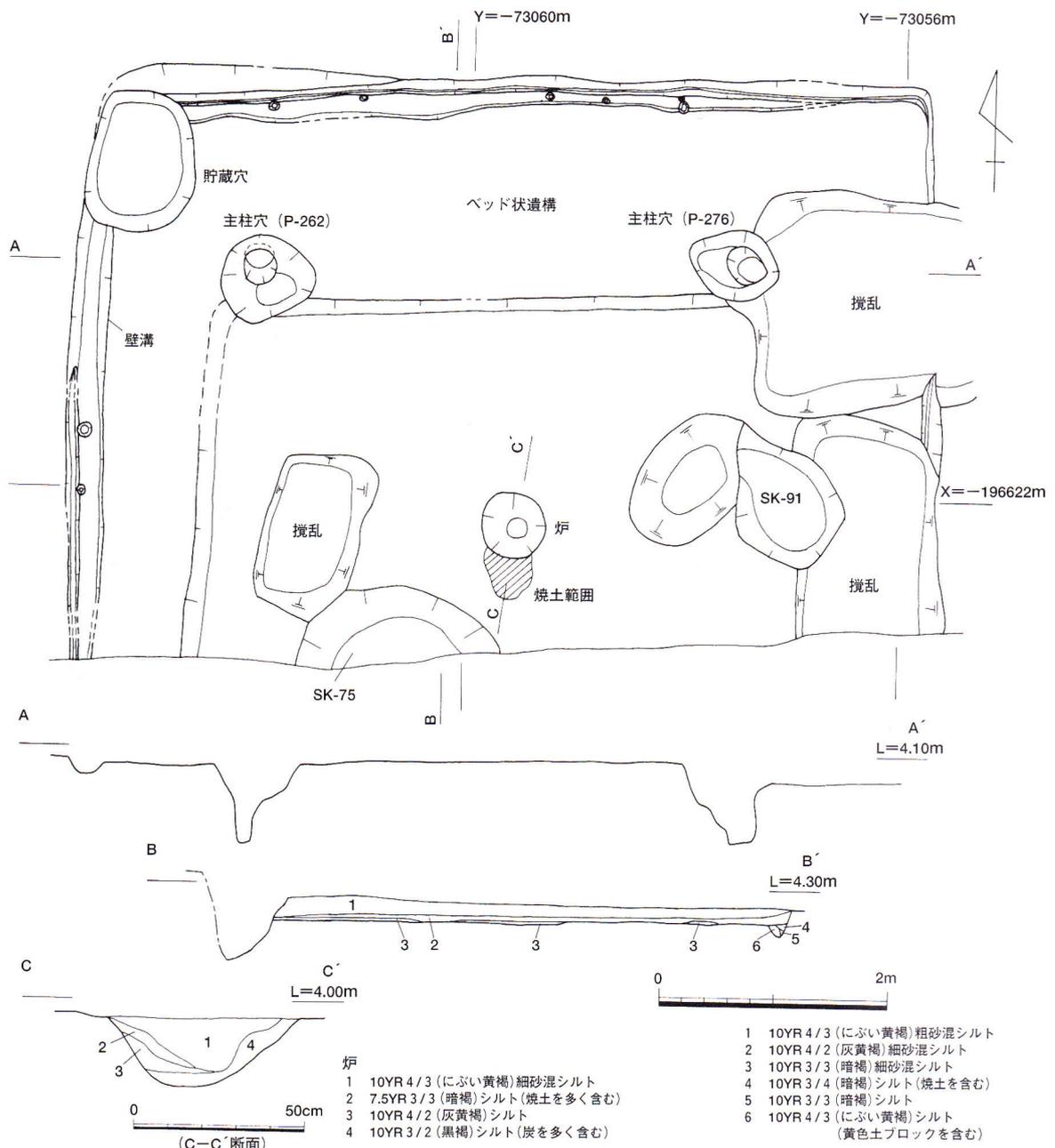
調査区南半部の第1区と第2区の区画ライン上で検出したもので、他の竪穴住居(SB-1・3)や古墳時代後期の土坑(SK-69)、鎌倉時代の瓦溜(SK-58)などによって大半が削平を受けている。この住居は東西5.0m、南北5.1mのやや隅円形状のプランをもつもので、深さは残存状態の良い西側で5cm程度である。周囲には幅10cm程度の壁溝が巡り、支柱穴の検出から4本柱の住居であったものと考えられる。また住居中央には炉の残欠と考えられる凹みを確認した。出土した土器からみて、庄内式併行期のものと考えられる。



第7図 SB-2遺構平面図及び断面図

[SB-1] (第8図、図版5・6)

SB-1は第1区の南端部で検出したもので、東西7.8m、南北5.2m以上を測る方形プランの大型住居である。この住居は、床面中央部の炉付近で約30cmの深さをもつ。古墳時代以降の遺構や攪乱等によって部分的に削平を受けているが、北辺に幅約2.0m、西辺に幅約1.2m、床面からの高さ5cm程度のいわゆるベッド状の高まりが設けられている。このベッド状遺構は検出した状況からみて、周囲に巡らされていたものと考えられる。主柱穴は、北壁に平行して掘削された2基 (P-262・276) であることから、4本柱の住居であったものと考えられる。貯蔵穴は北西隅において東西0.9m、南北1.2m、床面からの深さ20cmを測るものを1基検出した。炉は住居のほぼ中央部とみられる地点において直径55cm、深さ20cmの円形のものを出し、炉南側の床面が熱によって赤変していたことから焚き口が南側であったものと推定できる。周囲の壁際に掘削された壁溝は幅25cm前後、床面から



第8図 SB-1 遺構平面図及び土層断面図

の深さ15cm程度のもので、土層及び平面観察から壁際に板状の部材を埋設した痕跡が確認でき、さらにその部材を杭によって固定していたとみられる直径5cm前後のピットが壁溝内に8基検出できた。この住居は出土した遺物から庄内式併行期のもので、先述のSB-2よりやや新しい時期のものと考えられる。また西側に平行して検出したSB-3もこの住居とほぼ同時期と考えられる。

[SB-3] (第9図、図版5上・7下)

SB-3は第2区の南端部で検出したもので、東西4.2m、南北3.0m以上を測る方形プランの竪穴住居であり、10cm程度の深さをもつ。この住居も他の遺構や攪乱等によって部分的に削平を受けている。主柱穴は北壁に平行して掘削された2基(P-491・494)と調査区南壁直下に検出したP-490が考えら

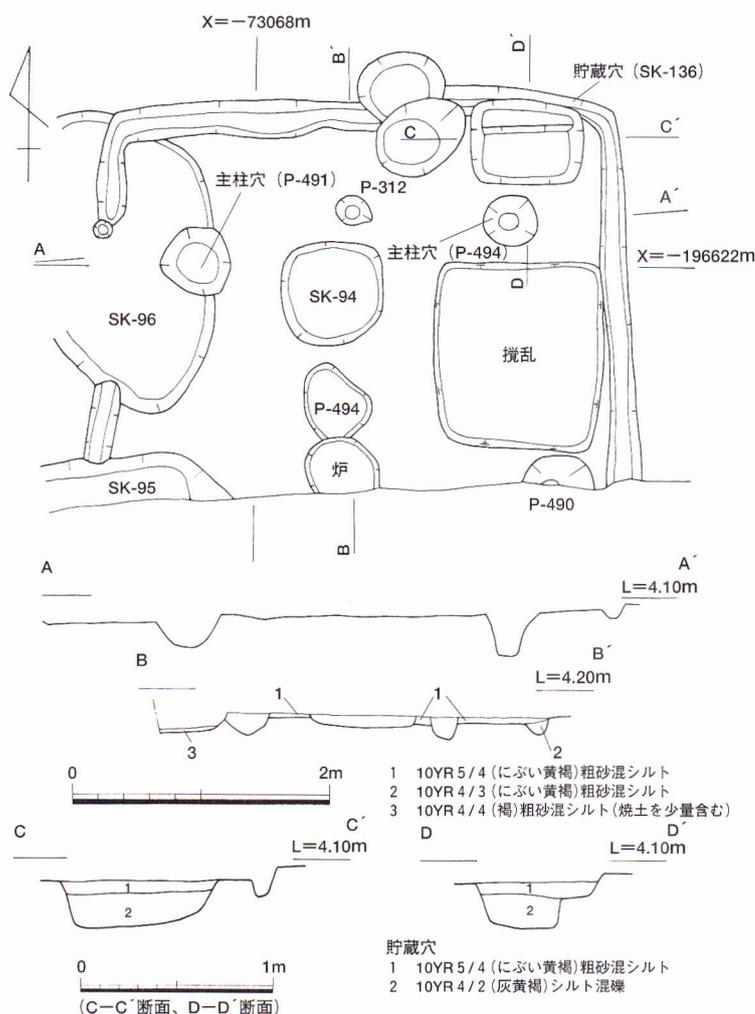
れ、4本柱の住居であったものとみられる。貯蔵穴は北東隅において検出した東西90cm、南北70cm、深さ25cmの方形のもので、北壁にそって一段高くなる構造をもつ。炉は住居の中央から南側に位置し、直径60cm、深さ15cmの円形のものである。周囲の壁際に掘削された壁溝は幅20~30cm、床面からの深さ10cm程度である。この住居とSB-1は幅2mの間隔をもって平行に造られていることなどから、併存していた可能性が考えられる。

[SE-4] (図版4下)

SE-4は、第1区南半部のSB-1北側で検出した素掘りの井戸である。東西1.5m、南北1.6mの円形プランで検出し、底面の深さは検出面から1.16mを測り、底面の標高は約3.0mである。検出面から50~60cmの深さで直径約1.0mの円形プランとなり、円形に落ち込む部分には段が設けられている。この遺構覆土の上部堆積には庄内式併行期の土器がまとまって出土しており、井戸廃棄時に土器を用いた祭祀が行われたものと考えられる。

[SE-6] (第10図、図版8上)

SE-6は、第2区南半部のSB-3北側で検出した井戸である。この遺構は、東西3.4m、南北3.7mの不整円形プランでホリカタを検出し、遺構中央部に薄く堆積した最上層(第10図、第1層)を掘削した時点で直径60cmの内部を検出した。この最上層には鎌倉時代の瓦器を含むことから、遺構上

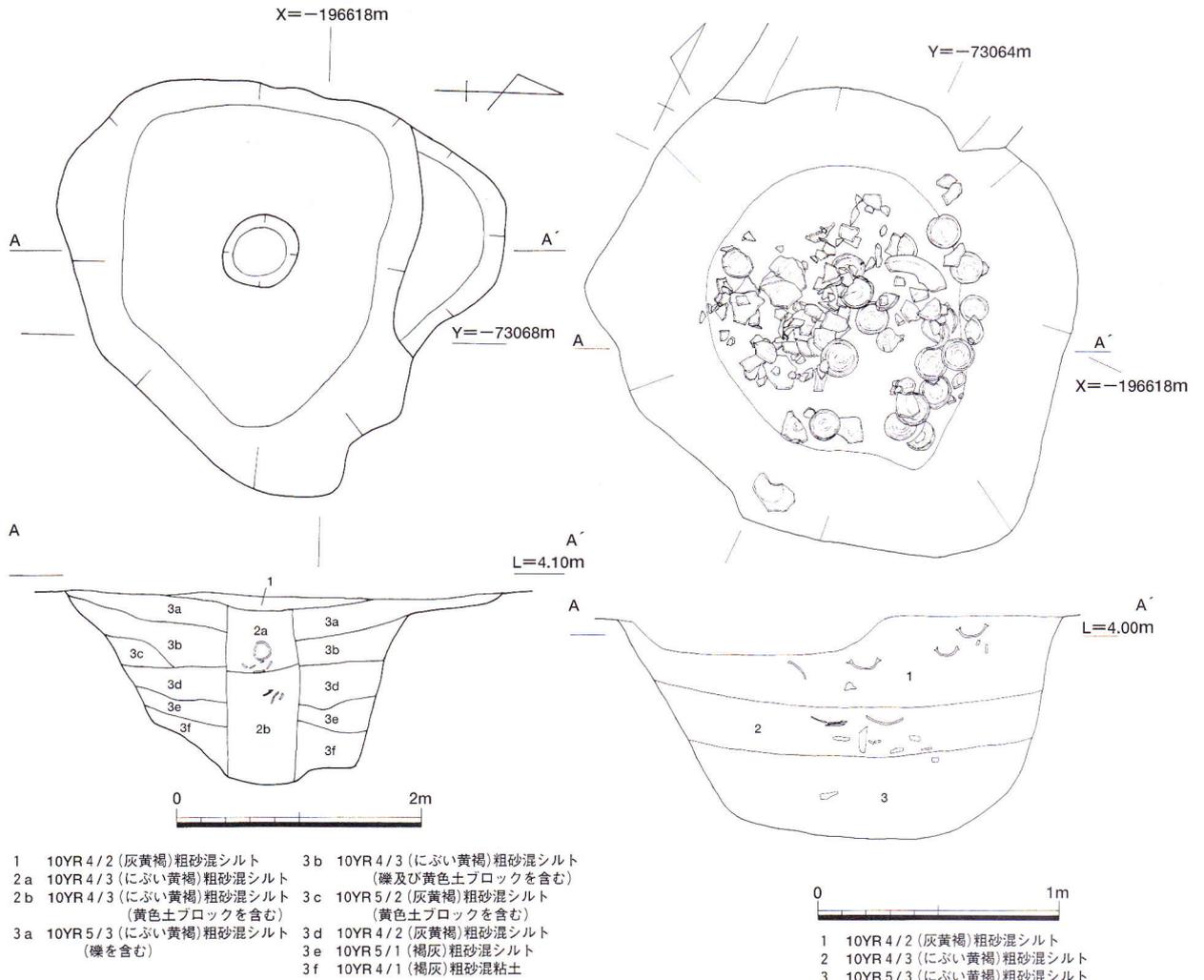


第9図 SB-3遺構平面図及び土層断面図

部の凹みの堆積と判断した。内部はほぼ垂直に落ち込み、最深部で1.5mを測り、底面の標高は約2.4mである。遺構ホリカタは、大きく播鉢状に掘削されたもので、覆土は6単位（第10図、第3a～3f層）に細分できる。また内部の上位堆積である第2a層には布留式併行期の完形の土師器小型鉢3点をはじめ小型丸底壺、小型器台や甕がまとまって出土しており、SE-4と同様井戸廃棄時に行われた祭祀に関係するものとして注目できる。

[SK-69] (第11図、図版8下)

SK-69は、調査区南半部の第1区と第2区の区画ライン上で検出したもので、上部を鎌倉時代の瓦溜(SK-58)によって削平を受けている。この土坑の規模は、東西1.9m、南北1.9mのやや隅円方形のプランであり、深さは最深部で95cmを測る。覆土は3単位に分けられ、上位にあたる第1・2層から須恵器・土師器が多量に出土した。須恵器では杯身が完形品14点と圧倒的に多く、杯身に比べ杯蓋が3点と少ない。高杯は完形品1点を含め4点、甕は完形品2点を含め4点を数える。土師器では、杯が完形品3点を含めて4点、高杯2点、壺1点、甕4点以上のほか、製塩土器が一定量出土した。特に、須恵器の杯身が口縁部を上に向けた正位置を保った状態のものが多数を占めた。そして、これらを取り除いた第3層上面において馬の頭骨が出土した。これらの状況から、この土坑は廃絶時に馬の頭骨や土器を用いた祭祀が行われたものと考えられた。



第10図 SE-6 遺構平面図及び土層断面図

第11図 SK-69 遺構平面図及び土層断面図

(3) 奈良時代の遺構

[SK-75] (図版9上)

SK-75は、第1区南端部の調査区南壁直下において検出した土坑である。この土坑は東西1.8m、南北0.6m以上の円形プランとみられるもので、検出面からの深さが50cmを測る。覆土には多量の炭や焼土が含まれ、覆土内から須恵器の杯蓋や土師器の甕などが多量に出土した。

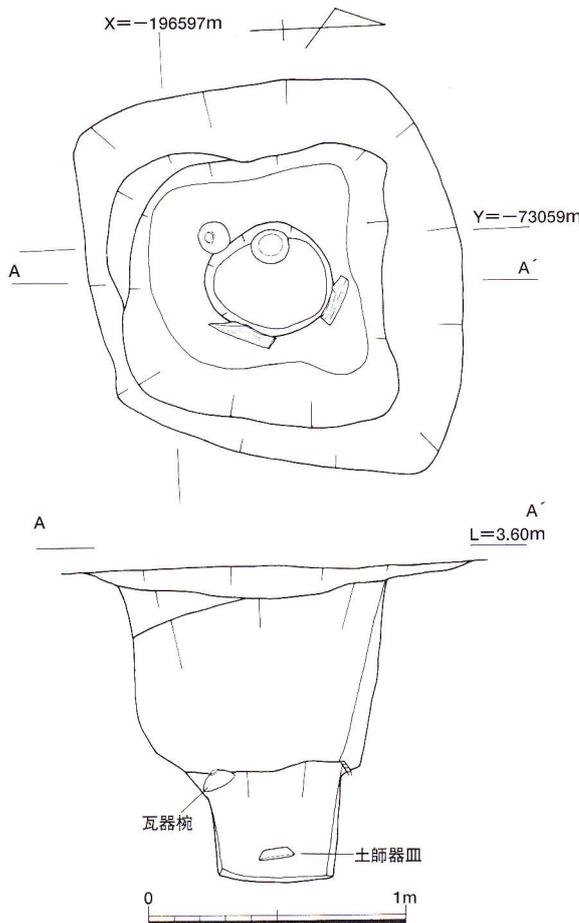
(4) 平安・鎌倉時代の遺構

[SE-2] (第12図、図版9下)

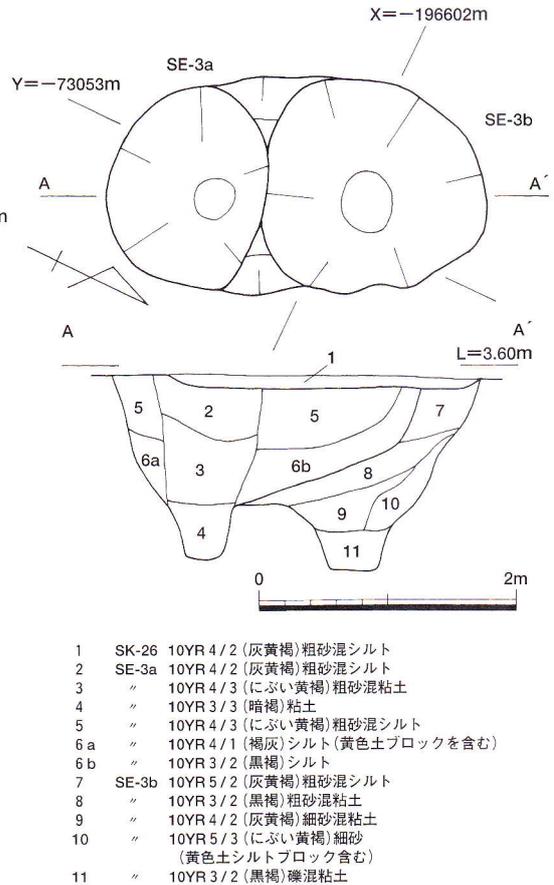
SE-2は第1区の北半部で検出した素掘りの井戸である。この井戸は一辺1.5mの隅円方形のプランとして検出したもので、底面の深さは検出面から1.3mを測り、底面の標高は約2.3mである。検出面から85cmの深さで直径50cmの円形プランとなり、円形に落ち込む部分には段が設けられ、その部分に結晶片岩の板石が2枚立て並べた状態で検出できた。またその段部からは完形の瓦器椀(第33図、106)、底面近くからは土師器皿(第33図、103)がそれぞれ出土した。これらの遺物から平安時代後期のものと考えられる。

[SE-3] (第13図、図版10上)

SE-3は第1区の北半部東端で検出した素掘りの井戸であり、近接して造り替えた2基を検出した。2基のうち南側に位置する新しい時期のSE-3aは、直径80cmの円形を呈する内部とその周



第12図 SE-2 遺構平面図及び立面図



- | | | |
|----|-------|-----------------------------------|
| 1 | SK-26 | 10YR 4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト |
| 2 | SE-3a | 10YR 4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト |
| 3 | " | 10YR 4/3 (にぶい黄褐)粗砂混粘土 |
| 4 | " | 10YR 3/3 (暗褐)粘土 |
| 5 | " | 10YR 4/3 (にぶい黄褐)粗砂混シルト |
| 6a | " | 10YR 4/1 (褐灰)シルト (黄色土ブロックを含む) |
| 6b | " | 10YR 3/2 (黒褐)シルト |
| 7 | SE-3b | 10YR 5/2 (灰黄褐)粗砂混シルト |
| 8 | " | 10YR 3/2 (黒褐)粗砂混粘土 |
| 9 | " | 10YR 4/2 (灰黄褐)細砂混粘土 |
| 10 | " | 10YR 5/3 (にぶい黄褐)細砂 (黄色土シルトブロック含む) |
| 11 | " | 10YR 3/2 (黒褐)礫混粘土 |

第13図 SE-3 遺構平面図及び土層断面図

圃に東西1.6m、南北2.4mのホリカタを検出した。底面の深さは検出面から1.5mを測り、底面の標高は約2.1mである。また北側に位置する古段階のSE-3bは、直径約1.6mの円形プランのもので、底面がSE-3aよりも10cm程度深く、底面の標高が約2.0mである。ともに覆土上位はシルト質であるのに対し、下位層ほど粘質となる。この遺構は、鎌倉時代前期のものと考えられる。

[SE-1] (第16図、図版12)

SE-1は第1区の北半部で検出した石組井戸である。この井戸は2度の造り替えがみられ、新しい順にSE-1b・1a・1cとした。最も新しいSE-1bは底面に底板を取り外した直径30cmの木桶を設置し、その上に結晶片岩の割石を用い小口積みによって構築している。石組部分の内径は、底面付近が50cm程度であるのに対し、上端部付近は85cm前後と上部に向かって広がる傾向にある。石組の石材は大半が結晶片岩を用いているが、結晶片岩以外に少量の砂岩と宝相華唐草文軒平瓦(第46図、272)などが組み込まれていた。また中央部の土層観察から井戸廃棄時に竹材を垂直に立てて埋設した井戸祭祀の痕跡が確認できた。次に古いSE-1aはSE-1bの南側に接して検出したもので、底面にはくり貫きの木枠を用い、その上部を結晶片岩の割石で小口積みしている。木枠内部からは曲物(第53図、322)と網代の一部が出土した。またSE-1aと重なる形で検出したSE-1cはSE-1aと同じく底面にくり貫きの木枠を用いたものである。

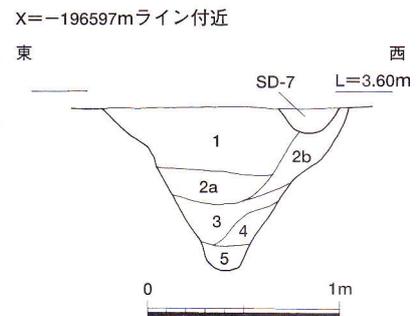
[SD-8・12] (第14・15図、図版10下・11)

SD-12は、調査区のほぼ中央部を東西に貫く大溝であり、幅4~5m、南側微高地部の検出面からの深さ1.3m前後のもので、第1・2区を通して延長26m分を検出した。覆土は数単位に細分できるが、大きくは上下の2単位に分けられる。また下位層にあたる第15図、第2a~c層からは、多量の瓦器碗や土師器皿類がほぼ完形の状態で出土し、その状況からみて南側の微高地部から投棄されたものと考えられた。

SD-8は、第1区の北端ほぼ中央部から南進してSD-12に取り付く溝である。規模は幅1.6m、北側微低地部の検出面からの深さが0.9m前後で断面形が「V」字形のものである。その流路方向は底面の比高差からみて南から北と考えられる。

[SD-14] (図版13上)

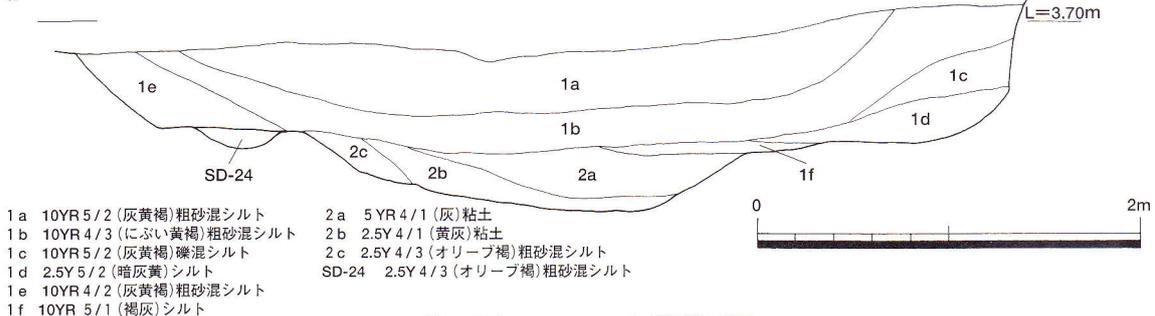
SD-14は調査区のほぼ中央部、SD-12の南肩部の微高地を東西にのびる溝で、第2区の途中から西側は他の遺構などに



- 1 10YR 4/3 (にぶい黄褐)粗砂混シルト
- 2a 10YR 4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト
- 2b 10YR 4/2 (灰黄褐)粗砂混粘土
- 3 10YR 3/2 (黒褐)粗砂混粘土
- 4 2.5Y 5/4 (黄褐)細砂
- 5 2.5Y 5/1 (黄灰)粘土
- SD-7 10YR 5/4 (にぶい黄褐)粗砂混シルト

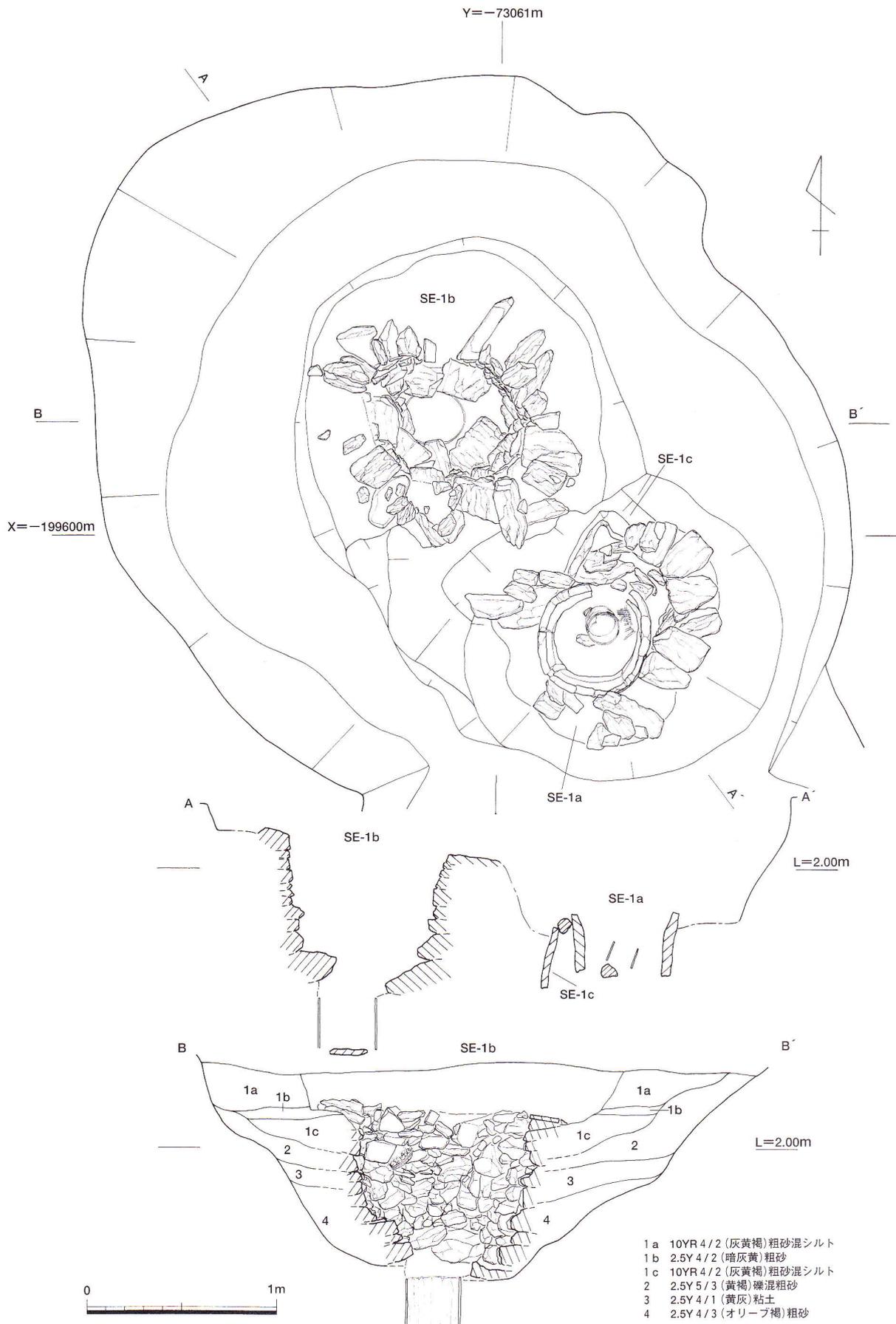
第14図 SD-8土層断面図

Y=-73051mライン付近
北



- 1a 10YR 5/2 (灰黄褐)粗砂混シルト
- 1b 10YR 4/3 (にぶい黄褐)粗砂混シルト
- 1c 10YR 5/2 (灰黄褐)礫混シルト
- 1d 2.5Y 5/2 (暗灰黄)シルト
- 1e 10YR 4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト
- 1f 10YR 5/1 (褐灰)シルト
- 2a 5YR 4/1 (灰)粘土
- 2b 2.5Y 4/1 (黄灰)粘土
- 2c 2.5Y 4/3 (オリーブ褐)粗砂混シルト
- SD-24 2.5Y 4/3 (オリーブ褐)粗砂混シルト

第15図 SD-12土層断面図

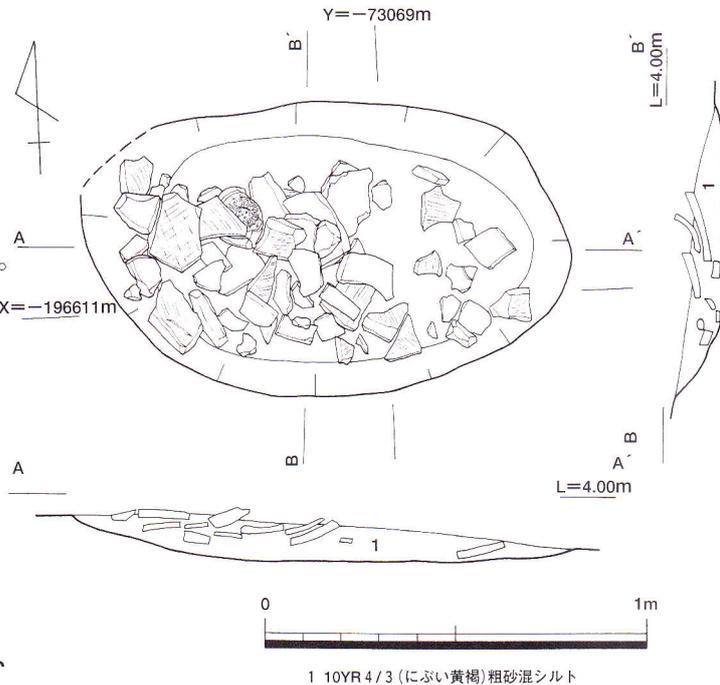


第16図 SE-1 遺構平面図及び土層断面図

よって削平を受けている。溝の規模は幅1.3m前後、深さ20cm程度のものである。溝内部は多量の瓦によって埋まり、その重なりからみて埋没した方向性は北から南、そして東から西であることが判断できた。

[SK-118] (第17図、図版13下)

SK-118は第2区中央部の微高地部で検出したもので、東西1.3m、南北0.8mの長楕円形の土坑であり、検出面からの深さは10cm程度と浅い。覆土内には多量の瓦が含まれ、蓮華文軒丸瓦(第46図、265)も出土した。この遺構は、位置関係から先述のX=-196611m SD-14の延長部にあたる可能性も考えられる。



第17図 SK-118遺構平面図及び土層断面図

[SK-58] (図版14上)

SK-58は調査区南半部の第1区と第2区の区画ライン上で検出したもので、東西1.1m、南北3.5mの隅円長形状のプランをもつ土坑であり、検出面からの深さは30cm前後である。遺構覆土の大半は瓦で、遺物収納コンテナ43箱分が出土した。

(5) 室町時代の遺構

[SE-5] (第18図、図版15)

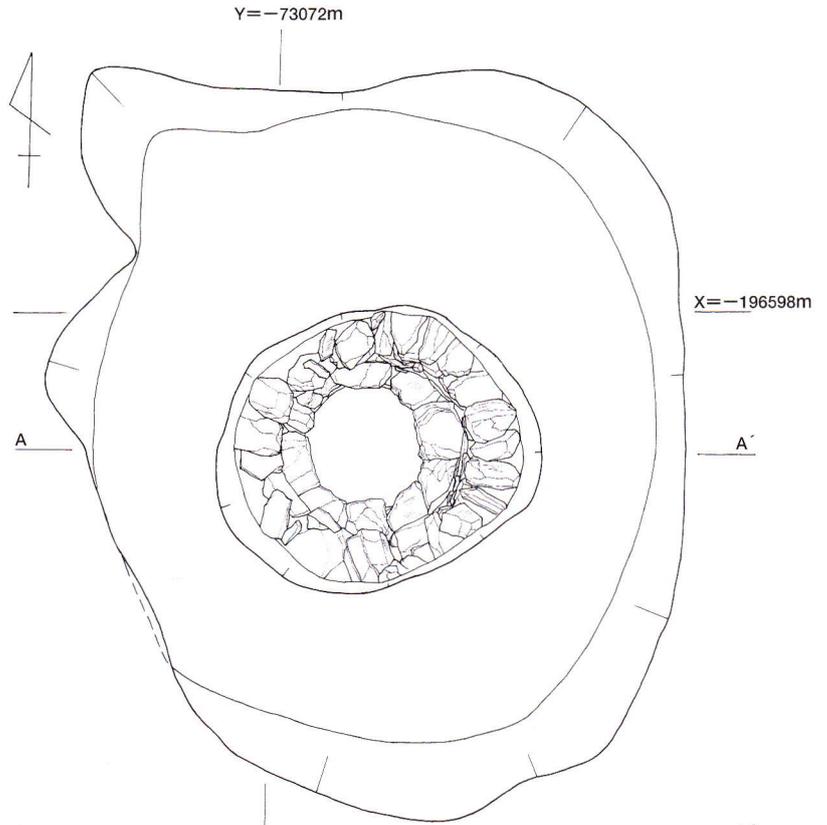
SE-5は第2区北半部において検出した石組井戸である。直径約2.5mのホリカタを円形プランとして検出し、深さ約60cmのところまで石組を確認した。この井戸の構築方法としては、まず底面に底板を取り外した直径55cm、深さ55cmの木桶を設置し、その上端部を結晶片岩の割石で固定した後、結晶片岩でほぼ垂直に小口積みしたものである。底面の標高は約1.2mであり、検出時でも湧き水が常時あった。石組内に砂岩を用いた一石五輪塔(第51図、313)やホリカタから出土した遺物には室町時代の備前焼等があり、江戸時代の遺物を含まないことから、構築時期は室町時代後期と考えられる。また埋没時期は江戸時代中期とみられる。

[SK-30] (第19図、図版14下)

SK-30は調査区北半部の第1区と第2区の区画ライン上で検出したもので、結晶片岩を小口積みし、方形区画に造り上げたタメマス状の遺構である。北側の石組は比較的石材が遺存しているが、他の面は抜き取られたものとみられ、ほとんど残っていない。石組内部の規模は東西2.4m、南北0.8mで、ホリカタを含めた範囲は東西3.1m、南北2.2mである。この覆土内から、瓦質土器羽釜(第43図、248)や中国製青磁碗(第44図、258)などが出土した。

[SK-4] (図版16上)

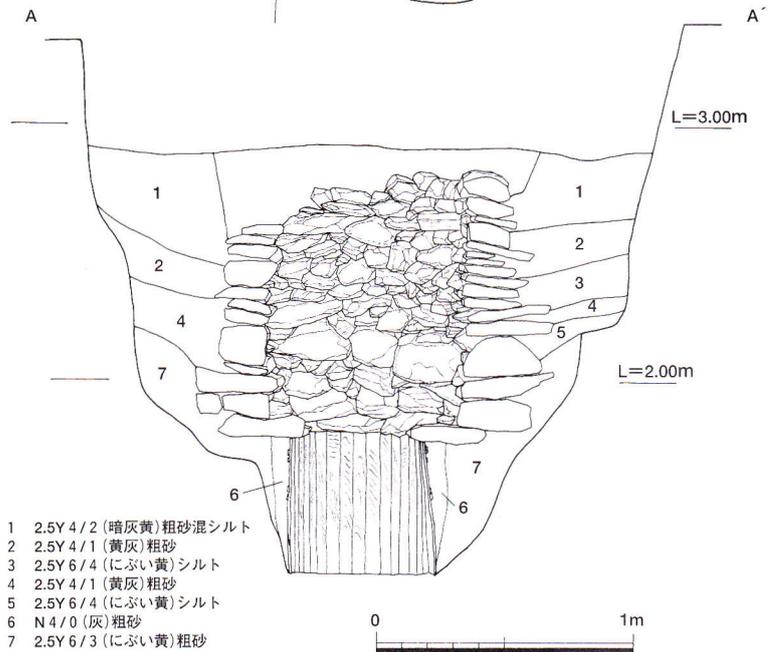
SK-4は第1区北半部において検出した土坑である。この土坑は東西4.2m、南北2.8mの不定形のもので、緩やかに落ち込む最深部で深さ30cmを測る。覆土は全体的に黄褐色系のシルト質層であるが、3単位に細分できる。この中間層には5~10cm大の礫が多く含まれている。



(6) 江戸時代の遺構

[SK-61] (第20図、図版16下)

SK-61は第1区南半部の竪穴住居(SB-1)上面で検出した土坑である。東西1.0m、南北1.2mの隅円形状のプランで、深さ20cmの底面はほぼ水平になっている。覆土は4単位に分けられ、上位に堆積した第1・2層には焼土が多く含まれている特徴がある。土坑内の北東部には備前焼徳利(第45図、264)が口縁部を斜め上方に傾けた状態で出土した。この徳利が副葬品とみられることから、この遺構は土葬墓の可能性が考えられる。

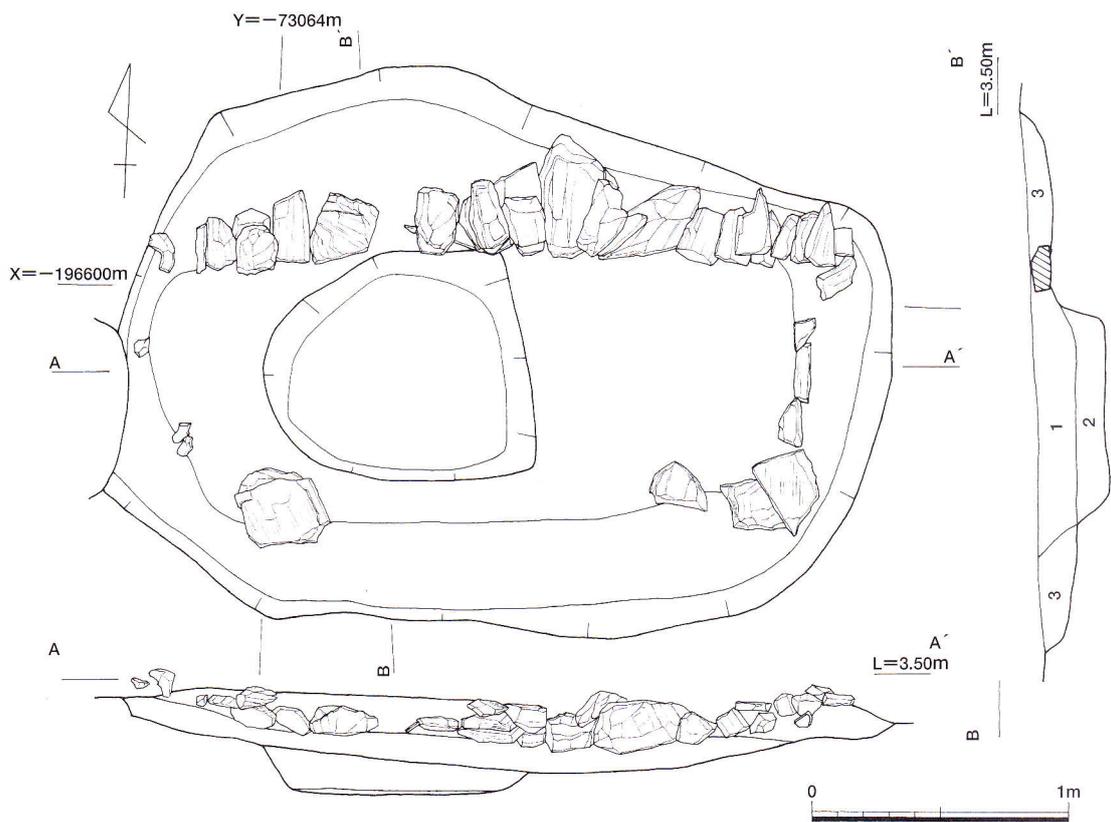


- 1 2.5Y 4/2 (暗灰黄)粗砂混シルト
- 2 2.5Y 4/1 (黄灰)粗砂
- 3 2.5Y 6/4 (にぶい黄)シルト
- 4 2.5Y 4/1 (黄灰)粗砂
- 5 2.5Y 6/4 (にぶい黄)シルト
- 6 N 4/0 (灰)粗砂
- 7 2.5Y 6/3 (にぶい黄)粗砂

第18図 SE-5 遺構平面図及び土層断面図

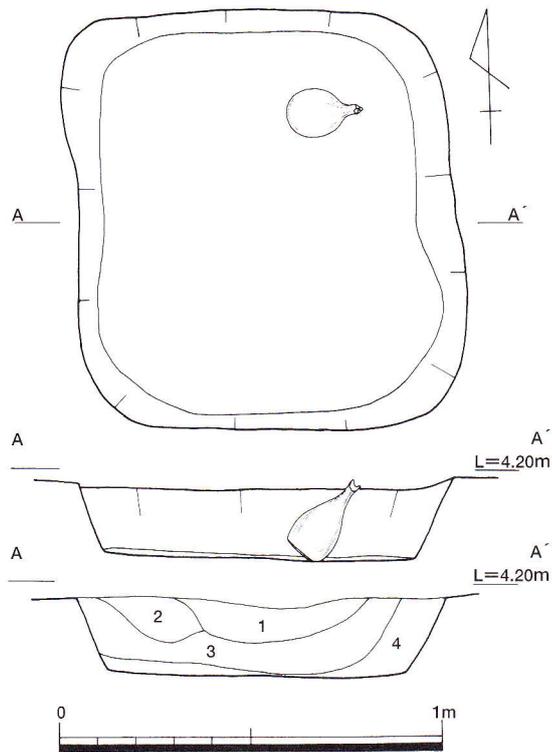
[SK-15]

第1区北半部で検出した直径3.3m、深さ60cmの不正円形の土坑で、擂鉢状に落ち込む形状をもつ。覆土は3単位に分けられ、全体的に灰褐色系の色調をもつ。上位層がシルト質であるのに対し、下位層が粘土質である。



- 1 10YR 4/4 (褐)粗砂混シルト
- 2 10YR 4/3 (にぶい黄褐)シルト
- 3 10YR 4/2 (灰黄褐)シルト混粗砂

第19図 SK-30遺構平面図及び土層断面図



- 1 10YR 4/2 (灰黄褐)粗砂混シルト(焼土・黄色土ブロックを含む)
- 2 10YR 3/3 (暗褐)粗砂混シルト(焼土を多く含む)
- 3 10YR 5/2 (灰黄褐)粗砂混シルト
- 4 10YR 3/4 (にぶい黄褐)シルト混粗砂

第20図 SK-61遺構平面図及び土層断面図

5. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺構の覆土を中心として弥生時代前期から江戸時代に至る時期のものが大量に検出した。遺物量は遺物収納コンテナ約400箱を数える。

まず弥生時代の遺物では、前期の一括資料として第1区で検出した土坑(SK-19)やピット(P-526)などのほか、他の遺構の混入遺物として取り上げたものがある。弥生時代から古墳時代の過渡期にあたる庄内式併行期の遺物では、第1・2区の南半部で検出した井戸(SE-4)や堅穴住居(SB-1・2)に良好な資料がある。

古墳時代のものでは、前期の資料として第2区南半部で検出した井戸(SE-6)や第1区南東部で検出した土坑(SK-89)が、中期のものとして第1区南半部で検出した土坑(SK-91)や溝(SD-16)、後期のものとして土坑(SK-69)に一括遺物がある。

奈良時代のものでは、一括資料として第1区で検出した土坑(SK-54・75)に土師器や須恵器があり、それ以降平安時代にかけての遺物は、第2区南半部で検出した土坑(SK-103・106)に土師器や黒色土器がある。

平安時代後期以降室町時代にかけての遺物は、井戸(SE-1~3)、溝(SD-8・12)や多数の土坑などから多量の土器・陶磁器が出土した。また瓦が多量に出土しており、当該期に存在したとされる「神宮寺」との関係が注目できる。

室町時代後期のものでは、第2区北半部で検出した井戸(SE-5)があり、井戸内部から出土したものに井戸埋没時期を示す江戸時代中期の陶磁器が出土した。このほか、江戸時代のものでは、前期に比定できる土葬墓(SK-61)の副葬品と考えられる備前焼徳利などがある。

本書では、これらの遺物を大きく各時代に分類してふれ、その中で遺構一括出土資料を中心として掲載した。また瓦や土製品、石器・石製品・石造物、金属製品、木製品、自然遺物などは、個別に記述した。

(1) 弥生時代の土器 (第21図1~9、図版18)

1~5は広口壺である。1は口径9.6cm、底径7.0cm、器高14.2cmの法量で体部の形状が算盤玉状に広がる小型のもので、体部中位に断面形が三角形の貼付突帯を1条巡らしている。この土器の外面は、タテ方向のハケを施した後、部分的にヨコ方向のハケ調整を行い、全体的にナデ消している。2・3は体部中位に最大径をもつ中型のもので、肩部と体部上位にそれぞれ細線のヘラ描沈線文が施されている。これらの外面調整は、不明瞭であるもののヨコ方向のヘラミガキが観察でき、頸部周辺にはこのヘラミガキに先行するタテハケが確認できる。また体部中位には黒褐色の黒斑がみられる。4・5はヘラ描沈線文による加飾が行われた頸部上位の破片である。これらの外面調整はタテハケを施した後、ナデ消しを行っている。内面もヨコナデによって仕上げているが、4には先行するヨコハケが明瞭に残る。6は壺肩部の破片である。内外面ともナデによって調整した後、多条のクシ描直線文を密に施し、ヘラ描直線文によって区画するものである。7・8は壺の底部である。7は外面にタテ方向のヘラミガキ調整が行われ、下端部に先行するタテハケが確認できる。8は外面にタテ及びナメ方向のハケ調整を密に施しているもので、ナデ調整による外底面には先行する

ヘラケズリ痕が確認できる。また内面は、ヨコナデの後ヘラミガキ調整が行われている。

9は口径19.4cm、底径7.4cm、器高21.3cmの法量をもつ遠賀川系の甕である。外面と口縁内端面には粗いハケ調整を施し、内面には板状工具によるナデ調整が行われている。

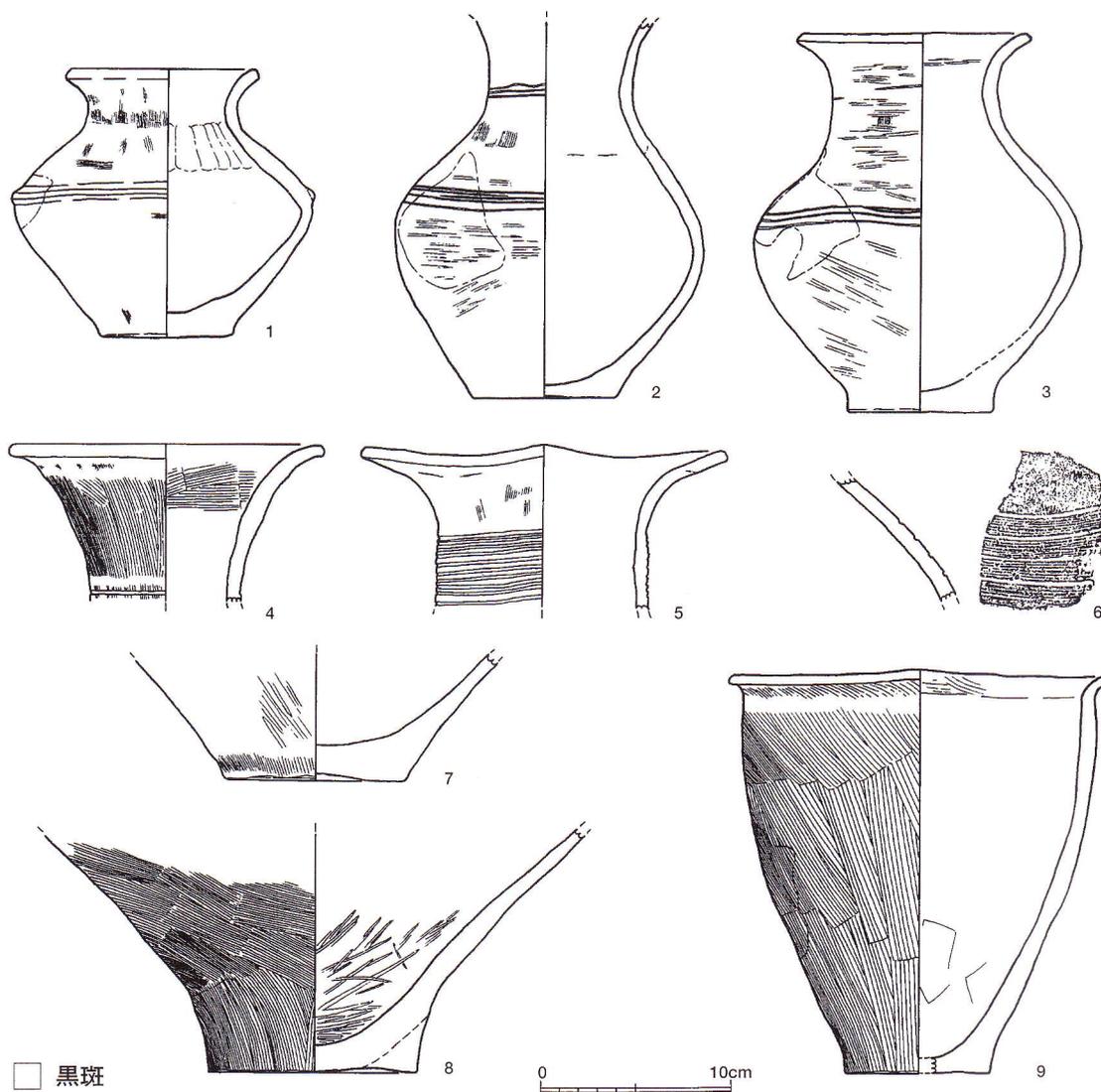
これらの胎土はすべて1～3mm大の砂粒を多く含むもので、砂粒の中には結晶片岩・石英・赤色軟質粒などがあり、在地系土器の特徴をもつ。また時期的には紀伊第I様式の新段階に併行するものと考えられる。

以上の出土位置は、1・2がSK-19、3・9がP-526、4がSK-103、5がSK-54、6がSK-112、7がSK-85、8がSK-109である。この中で、4・5については、それぞれ時期の異なる遺構に含まれた混入遺物である。

(2) 古墳時代の土器

[SE-4出土土器] (第22図10～23、図版19)

10は複合口縁壺の頸部上位の破片である。頸部から大きく屈曲して段を成し、外反して開くもので、内外面とも剥離が著しく不明瞭であるものの口縁部外面にヨコナデに先行するタタキ痕が観察



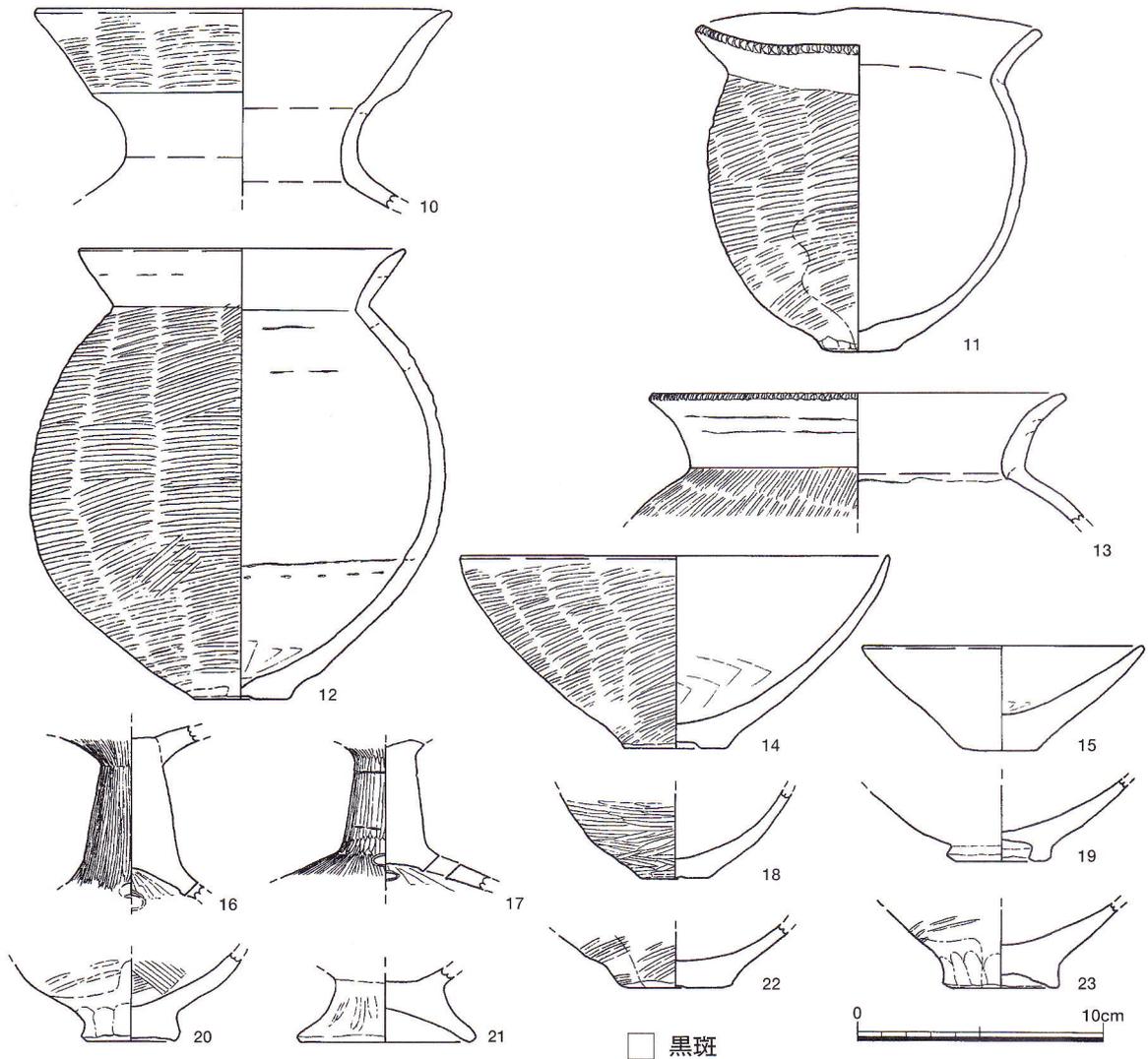
第21図 遺物実測図1

できる。

11~13は甕である。11は球形の体部から大きく外反してのびる口縁部をもつもので、その外端面には刻み目が施されている。また口縁部の歪みが著しく底部は小さい。12はやや長胴の体部から直にのびる口縁部をもつもので、底部は平底で安定している。13は口径16.8cmで、大きく外反する口縁部をもつものであり、11と同じく口縁外端面に刻み目が施されている。3個体とも体部外面にはタタキ痕をそのまま残し、11・12の外面体部下半に煤が付着している。また体部中位で分割成形し、接合して甕に仕上げている状況が確認できるもの(11)や内面下半部にヘラ先状の圧痕が文様状に観察できるもの(12)がある。

14・15は鉢である。14は甕の下半部をそのまま鉢に代用した形状のもので、外面にはタタキ痕を明瞭に残すが、部分的にナデ消している。15は壺の下半部をそのまま鉢に代用した形状のもので、肉厚な器壁をもつ。全体的にナデ調整を行っているが、内底面に蜘蛛の巣状ハケメが確認できる。

16・17は高杯の脚柱部である。ともに中実のもので、大きく開く脚部には外面から穿たれた径1.0cmの円孔が4ヶ所確認できる。また外面にはタテ方向の丁寧なヘラミガキ調整が行われ、さらに17



第22図 遺物実測図 2

にはヘラ先を使用した沈線が刻まれている。

18～23は底部である。底面の形状には平底状のもの（18・20・22）と上げ底状のもの（19・21・23）があり、19のように高台状になる特徴をもつものもある。18～20は壺の底部とみられるもので、18・20の外面にはヘラミガキ調整が、19の外面にはナデ調整が行われている。また内面は、18・19にはナデ調整が、20にはハケ調整が施されている。21は大きく外側に張り出して接地するタイプのもので、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整が確認できる。22・23は甕の底部とみられるもので、ともに外面に施されたタタキ痕をナデ消している状況が観察できる。

以上の土器は、胎土観察からすべて在地系のものであり、出土層位は遺構最上層の第1層である。時期的には庄内式併行期中葉段階に比定できるものと考えられる。

[SB-2 出土土器] (第23図24・25、図版19・20)

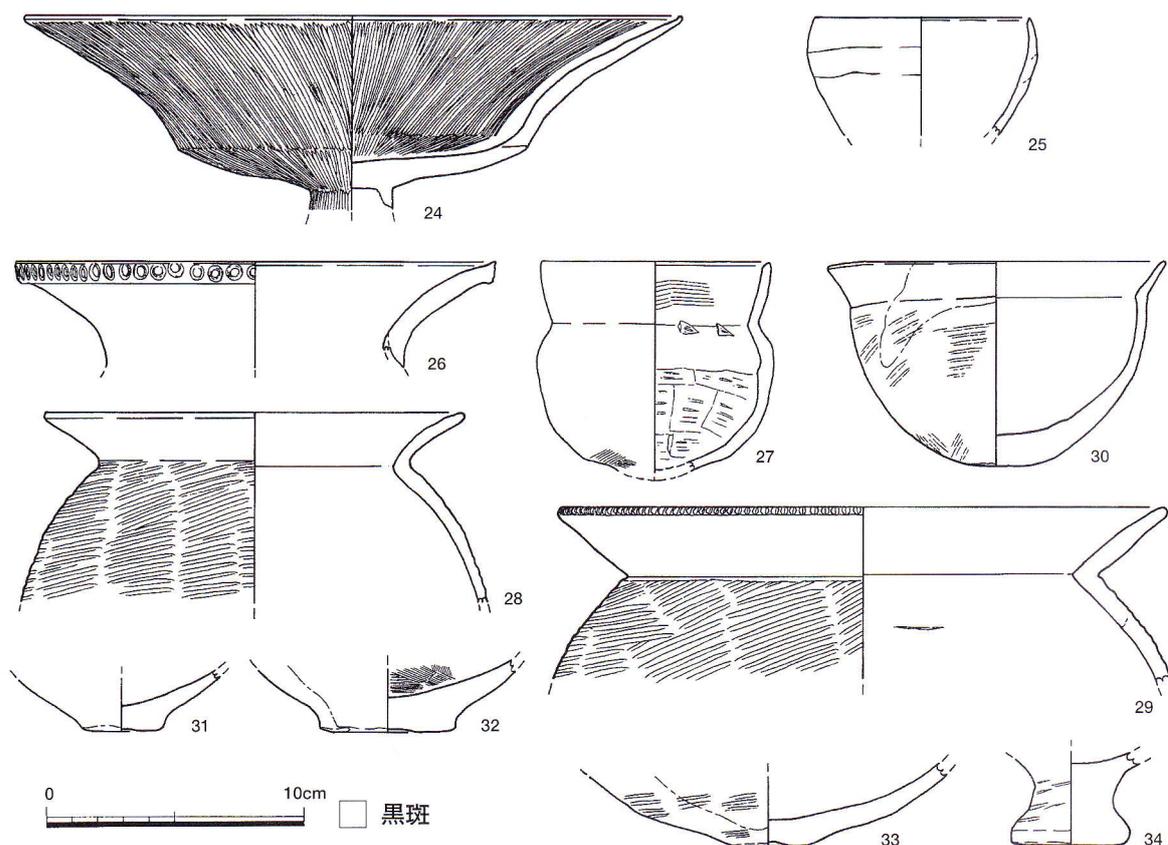
24は有稜高杯の杯部である。大きく外反してのびる口縁端部が上方にやや突出するもので、内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施されている。この土器は古墳時代後期の土坑（SK-69）の壁面に突き刺さった状態で出土したもので、出土状況からSB-2の遺物と判断した。

25は、口径8.4cmを測る小型の鉢である。口縁部はやや内湾するタイプのもので、全面にナデ調整が行われている。

以上の2点も在地系のもので、庄内式併行期中葉段階のものと考えられる。

[SB-1 出土土器] (第23図26～34、図版19・20)

26・27は壺である。26は広口壺の口縁部である。口縁端部を上下に肥厚させて外端面を作り出し、



第23図 遺物実測図 3

竹管文で加飾している。27は口縁部がやや内湾する小型の壺である。この土器の外面は底面周辺にハケ調整を行っている他は、ナデ調整である。また内面には口縁部周辺にヨコ方向のハケ調整、体部下半にヨコ方向のヘラケズリを行っている。

28・29は甕である。ともに外面にタタキ痕をそのまま残す甕で、口縁部から内面にかけてナデ調整され、29の外端面には刻み目が施されている。

30は口径13.0cm、器高8.1cmの法量をもつ鉢である。全体的に剥離のため調整が不明瞭であるが、外面観察ではタタキ痕をナデ消している状況が確認できる。

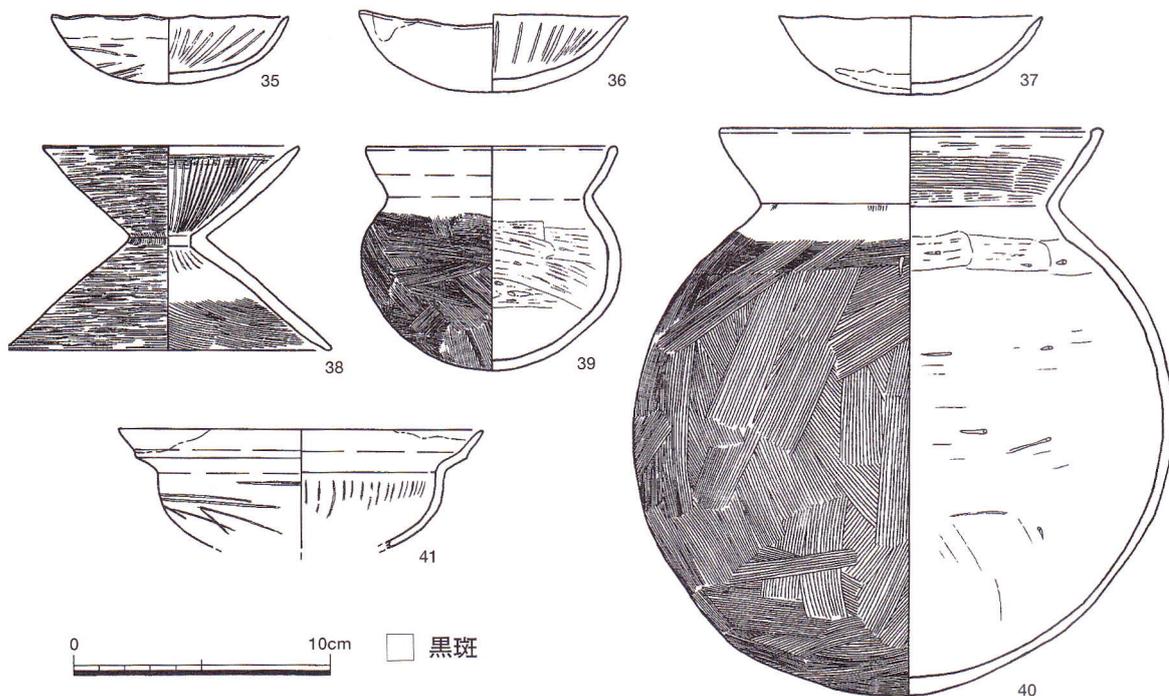
31～34は底部である。31・32は壺の底部とみられる。ともに外面には丁寧なナデ調整が施されているが、31には先行するタタキ痕がわずかに確認できる。また内面は、31にはナデ調整が、32にはハケ調整が用いられている。33は甕の底部とみられるもので、外面にはタタキ痕を部分的にナデ消す調整が行われている。34は底径4.4cmを測るもので、脚柱状に高く立ち上がるタイプのものである。この土器の外面調整も、タタキ痕をナデ消している状況が確認できる。

これらの出土層位は、26・29～33が第1層、27・28・34が第2層である。また時期的には、庄内式併行期の中葉から後葉段階のものと考えられる。

[SE-6 出土土器] (第24図35～41、図版20)

35～37は丸底の小型鉢である。これらは、口径10.0cm前後、器高3.0cm前後と法量にまとまりがあり、全体にナデ調整が行われているものである。35・36の内面には放射状の暗文が施され、35には外面下半部にヘラミガキが行われている。また35は暗褐色の色調であるのに対し、36・37は淡赤褐色に発色し、36の口縁部と37の底部には黒褐色の黒斑がみられる。

38は口径9.8cm、脚部径12.6cm、器高8.0cmの法量をもつ小型器台である。極めて丁寧な作りのもので、外面にはヨコ方向のヘラミガキが行われ、内面にはヨコ方向のヘラミガキの後、放射状の暗文によって加飾している。また脚部内面にはヨコ方向のハケ調整が行われている。



第24図 遺物実測図 4

39は口径9.6cm、器高8.8cmの法量をもつ小型丸底壺である。ヨコナデによるやや内湾する口縁部を形成するもので、体部外面には不定方向のハケ調整が、内面上位にはヘラケズリ、下半にはナデ調整が施されている。

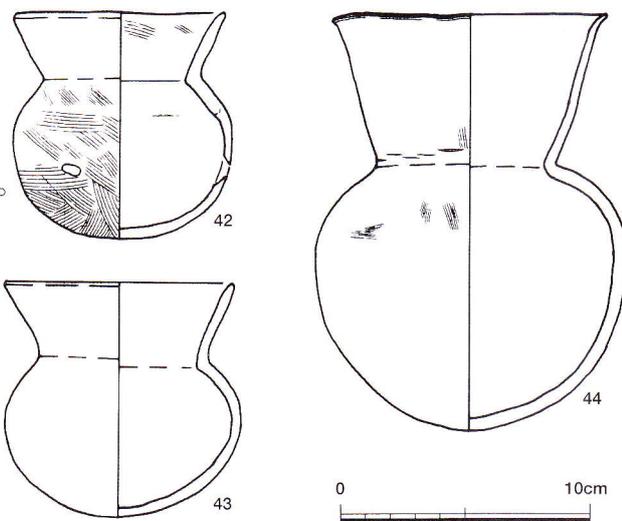
40は口径14.6cm、器高22.4cmの法量をもつ甕である。口縁部は内面にヨコハケを行った後、ヨコナデによってやや内湾させ、端部を内側に突出させている。体部外面は、タテ方向を基本とするハケ調整が密に施され、内面にはヨコ方向を基本とするヘラケズリが行われている。また内底面には指オサエが観察できる。

41は口縁部を強いヨコナデによって屈曲させた有段口縁の鉢である。体部は内外面ともナデ調整を行った後、外面には部分的にヨコ方向のヘラミガキが、内面には放射状とみられる暗文が施されている。

これらは、すべて結晶片岩等の砂粒を含む在地系のもので、その出土位置は、35～40が井戸内部上位層の第2a層、41が井戸内部下位層の第2b層である。また時期的には、布留式併行期の古段階のものと考えられる。

[SK-89出土土器] (第25図42～44、図版20)

42～44は壺である。42・43は小型丸底壺である。ともに口径8.5cm前後、器高9.5cm前後のもので、口縁部が直にのびるタイプである。42は体部外面と口縁部内面にそれぞれハケ調整が観察できる。しかし、43は剥離が著しく調整が不明瞭である。また42には焼成後、外面から穿たれた穿孔が1ヶ所確認できる。44は口径10.8cm、器高16.8cmの法量をもつ直口壺である。やや内湾気味にのびる口縁部が端部に至り外反するもので、体部は球体を呈する。調整は全体がナデ調整で、外面には先行するハケ調整がわずかに認められる。



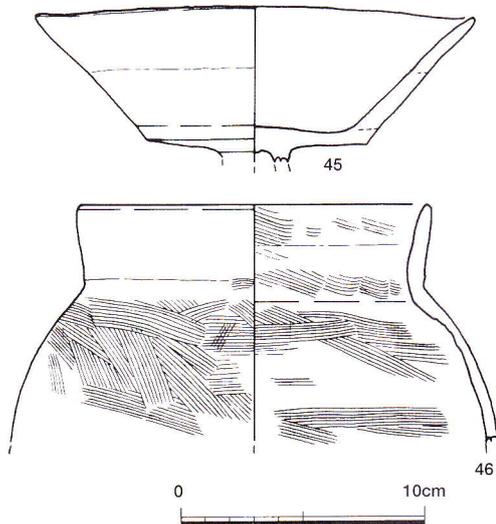
第25図 遺物実測図 5

以上の土器も在地系のもので、布留式併行期に比定できるものと考えられる。

[SK-91出土土器] (第26図45・46、図版20)

45は口径17.8cmを測る有稜の高杯杯部である。口縁部が大きく外反してのびるもので、残存部全体にナデ調整が観察できる。

46は口縁部がほぼ直立する口径14.2cmの甕である。体部外面にはナメ方向、内面にはヨコ方向のハケ調整が施され、内面については、部分的にナデ消しが行われている。



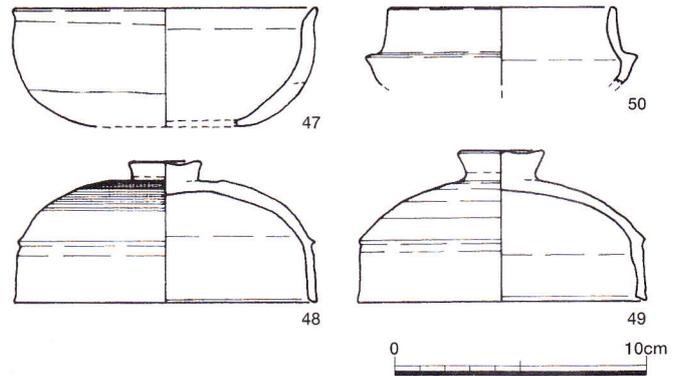
第26図 遺物実測図 6

この2点は古墳時代中期の範疇のものと考えられる。

[SD-16出土土器] (第27図47~50)

47は土師器の杯である。やや肉厚の器壁をもつもので、口縁部がヨコナデによって外反する。

48~50は須恵器である。48・49は口径11.5cm前後の有蓋高杯の蓋で、天井部中央に扁平なつまみが付くものである。肩部に明瞭な稜をもち、シャープな作りのものである。48の天井部には1/2程度に回転カキメ調整が行われ、また49の回転



第27図 遺物実測図7

ヘラケズリは2/3程度である。50は杯部の破片で、口径8.6cmと小振りのものである。やや内傾気味に立ち上がる口縁部は上端部に面をもつ。

以上の土器は、須恵器の形状からTK-47形式におさまるものとみられ、6世紀初頭頃のものと考えられる。

[SK-69出土土器] (第28・29図51~84、図版21・22)

51~62は土師器である。

51~53は成形時の粘土紐巻き上げ痕跡を残す杯である。51・52は口径13.3cm、器高4.0cm前後のもので、全体にナデ調整が行われたものである。51は肉厚の器壁をもち、やや外反気味の口縁部をもつが、52は内湾するタイプのものである。53は口径18.2cm、器高6.1cmの法量をもつ大型のもので、内面にはヨコ方向のハケ調整が観察できる。この個体には外面に黒褐色の黒斑がみられる。

54・55は高杯である。54は杯部下半に回転ヘラケズリを用いた須恵器技法のもので、脚部もシャープに作られている。55は中実の脚柱部からラッパ状に大きく開き接地するものである。内外面ともナデ調整が行われているが、外面の2ヶ所にヘラ状の工具痕が残る。

56は口径9.8cm、器高17.9cmの法量をもつ直口壺である。外反気味に長くのびる口縁部を有するもので、体部にはやや歪みがある。この土器の外面には、ハケ調整を密に施した後、頸部以下の一部にヘラミガキが行われている。また内面には口縁部周辺にヨコ方向のハケ調整が行われ、それ以下をナデ調整によっている。

57~59は甕である。57は口径14.2cmを測り、体部の張りが少なく頸部の境が不明瞭なもので、外反する口縁部が中位で肥厚するタイプである。58・59は口径23cm前後と比較的大きなものである。58は57に比べやや屈曲する頸部を形成するもので、口縁部は全体的に肥厚している。59は口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、他の2点に比べシャープに作られている。調整は、ともに外面をタテ方向のハケ調整、内面上位から口縁部にかけてヨコ方向のハケ調整、口縁部周辺を強いヨコナデによって仕上げている。また57・58の外面には黒褐色の黒斑が広範囲にみられる。

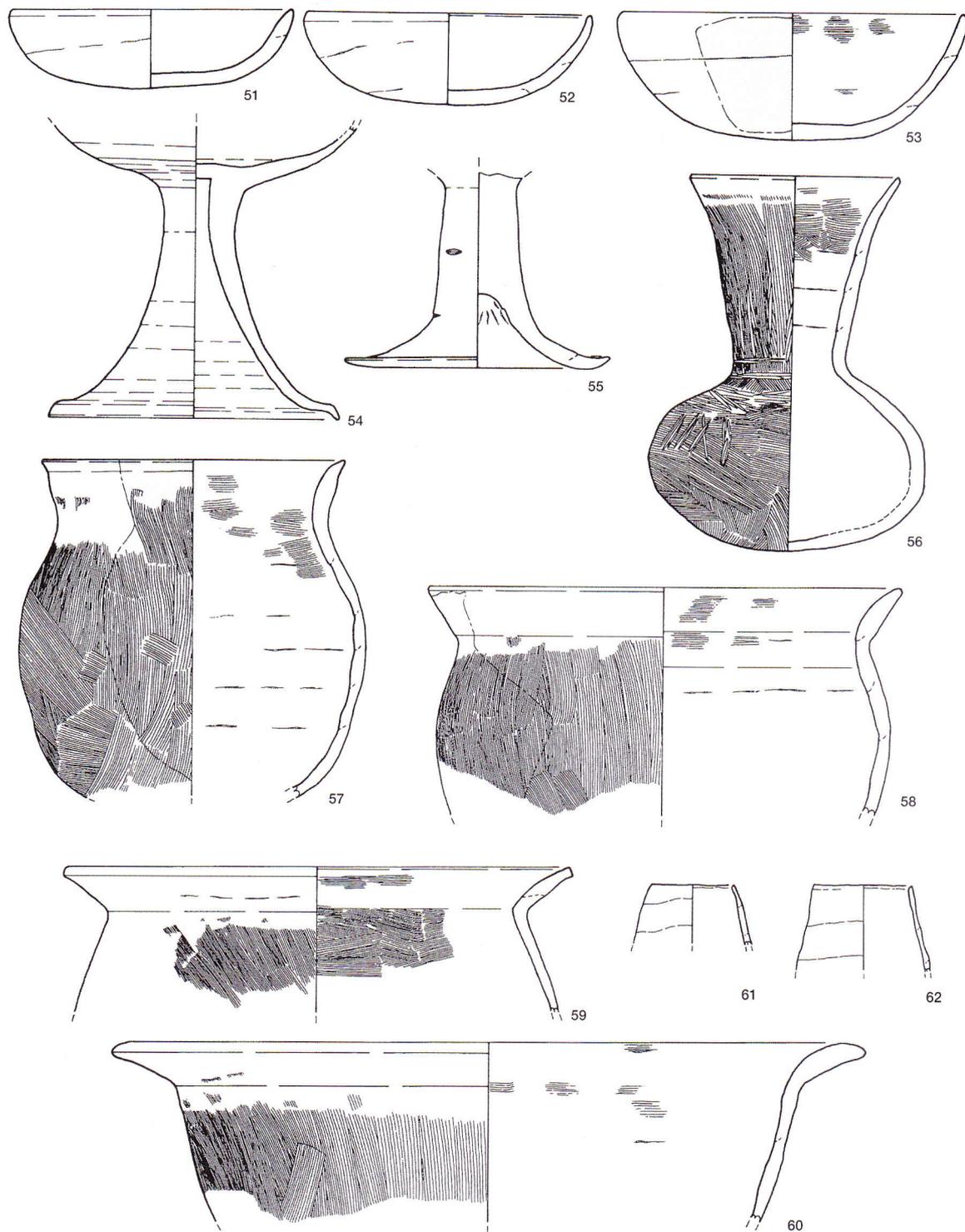
60は口径34.0cmを測る大型の鉢である。口縁部が肥厚しながら大きく開くもので、上端部に面をもつ。この土器の調整は、前者の甕と類似する。

以上の土器は、すべて1~3mm大の結晶片岩、石英、赤色軟質粒などの砂粒を含む在地系のものである。また焼成は良好で、赤褐色に発色するものが多い。

61・62は丸底を有するとみられる製塩土器である。ともに口縁部の破片で、口縁内端部に面をもつ。外面には掌紋とともに成形時の粘土紐巻き上げ痕が、内面にはヨコナデ調整が確認できる。これらの胎土には微細な砂粒をわずかに含む。

63～84は須恵器である。

63～65は杯蓋である。法量は、63・64が口径12.4cmと同じで、65は口径14.0cmと比較的大きい。63



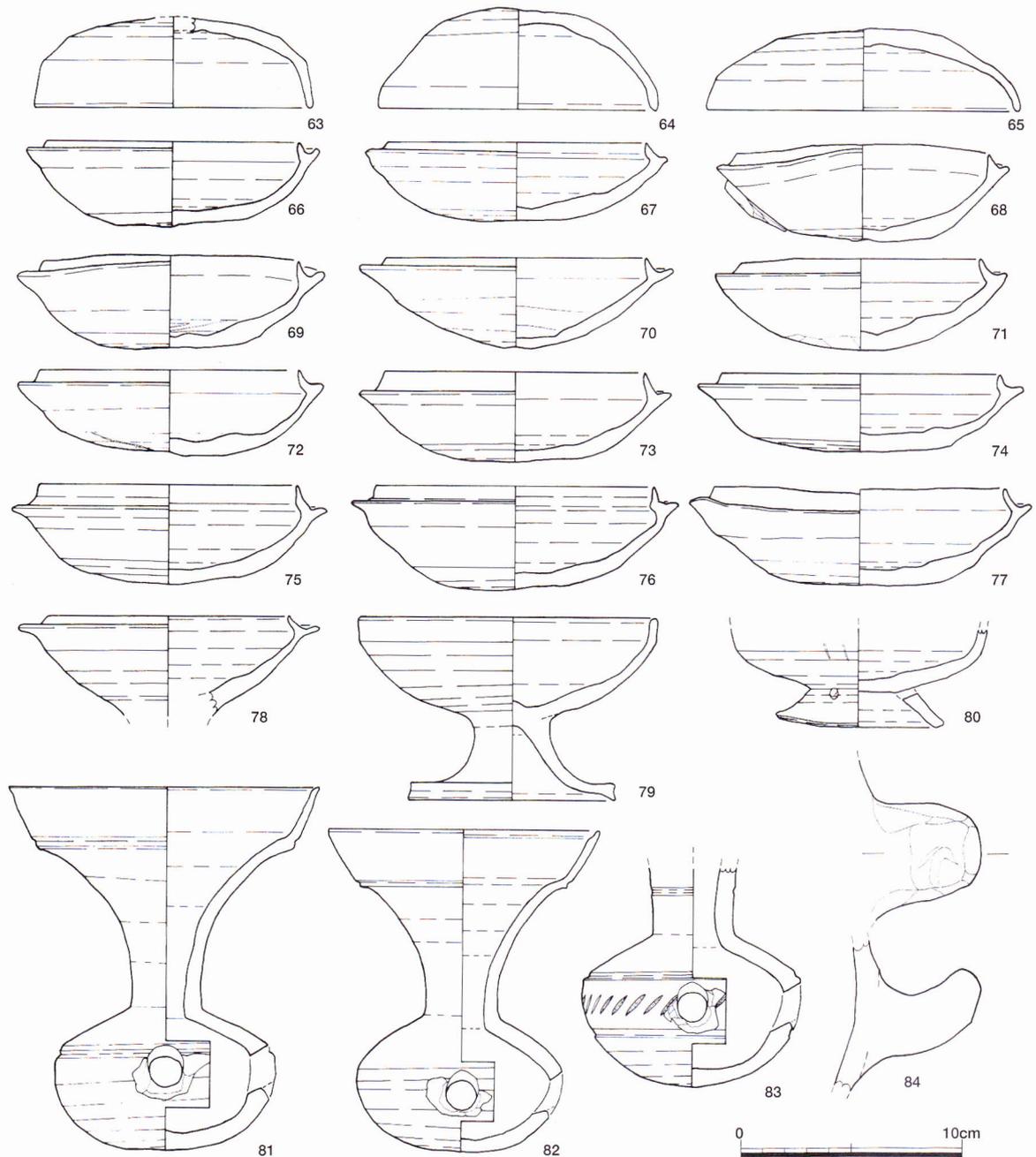
□ 黒斑

第28図 遺物実測図 8

0 10cm

は肩部に緩やかな稜をもつもので、やや外開きにのびる口縁部は丸くおさまられている。64・65はなだらかな天井部を形成し、口縁部がやや内湾するタイプである。焼成は63・64が良好で暗灰色から灰色に発色しているのに対して、65は軟質で淡灰色を呈している。また64の天井部には黒色粒が熔けて斑状になっている。

66～77は杯身であり、他のものに比べ個体数が最も多いものである。これらの法量では、口径11.4～11.7cm、器高3.6～4.5cmの範疇におさまるものが大半である。それ以外のものでは、口径12.5cmを超えるものが3点（74・76・77）あり、76・77の2点は器高4.5cm前後であるのに対し、74は器高3.5cmと最も低い。また71は口径10.8cm、器高4.2cmで口径が最も小さい。口縁部の形状では内傾する短い口縁部を形成するものが多くをしめるが、内傾する口縁部が段をもち直立して立ち上がるもの



第29図 遺物実測図 9

(75・76)がある。調整は底部を除き内外面をすべてヨコナデ調整するもので、底部周辺の1/2～1/3を回転ヘラケズリによっている。この中で特殊な調整をもつものは、底部周辺のヘラケズリをヨコ方向に行っているもの(71)や乾燥の後、内底面にヘラケズリを行うもの(69・70)がある。また焼成時に自然釉が付着し、3.0×4.4cm大の陶片が釉着したもの(68)や焼歪みが著しいもの(68・69・77)がある。この他、72には外底面に1条のヘラ記号が施されている。焼成は全体的に良好で、暗灰色から灰色を呈するものが多く、内面のみ暗赤褐色に発色するものが1点(73)ある。また胎土は2～3mm大の石英や黒色粒をわずかに含むものが大半であるが、4～5mm大の比較的粗い胎土をもつ74・75には結晶片岩が含まれ、在地系のもと考えられる。

78・79は高杯である。78は有蓋高杯の杯部で、口縁部の形状は前者の杯身に類似する。体部外面の回転ヘラケズリの範囲は比較的広い。79は口径13.3cm、脚部径9.3cm、器高8.5cmの法量をもつ無蓋の高杯である。杯部は杯蓋を反転させた形状のもので、外面には回転ヘラケズリが広範囲に行われている。脚部はラッパ状に大きく開き、下方に突出して接地するタイプのもので、ヨコナデ調整が行われている。この土器は、淡赤灰色の色調をもつ。

80は台付の壺とみられる。体部下半の回転ヘラケズリ以外をヨコナデ調整するもので、やや歪みをもつ脚部には外面から径4mm大の円孔が3ヶ所穿たれている。また体部には2条のヘラ記号がタテ方向に確認できる。

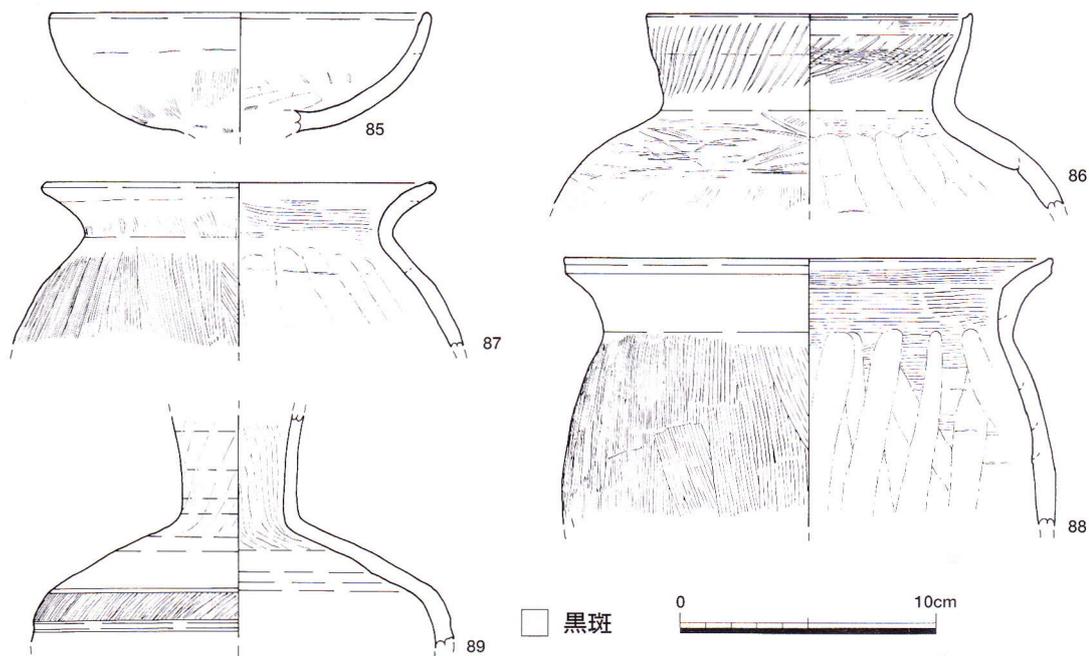
81～83は甗である。81は口径14.0cm、器高16.5cm、82は口径12.2cm、器高14.6cmの法量をもつもので、体部最大径は3点とも9.5cm前後におさまる。81・82はともに大きく外反して開く口縁部が段を成して立ち上がるもので、上端部に面をもつ。これらの段部には凹線が1条巡り、81には体部上位に、83には頸部上位と体部に2条の凹線が巡る。また83は凹線間にクシ先を用いた刺突文を施して加飾している。3点とも外面体部下半を回転ヘラケズリし、それ以外をヨコナデ調整するもので、体部中位には径1.2～1.5cm大の円孔が外面から穿たれ、81の体部内には穿孔時の陶片がそのまま残存している。また円孔周辺の外面には使用時に破損した部分が明瞭に観察できる。82の外面の一部には二次焼成を受けたためか、褐色に変色した部分が認められる。

84は手づくね成形の把手の破片であり、体部との接合は貼付によるものである。全体を指オサエとナデによって調整されているが、側端部下方には板状の圧痕が1ヶ所確認できる。

(3) 奈良・平安時代の土器

[SK-54出土土器] (第30図85～89、図版23)

85～88は土師器である。85は口径14.6cm、残存高4.8cmの高杯の杯部で、外面はタテ方向のハケ、内面上半部はハケ、内底面はナデ調整である。86は口径12.6cmの壺である。外面の調整は、口縁部がヨコナデの後暗文が施され、肩部はタテハケ後ナデ、ヘラミガキ、体部はタテハケ後ナデである。内面の調整は、口縁部がヨコハケ後ヨコナデ、ヘラミガキ、頸部はヨコハケ後ヨコナデ、体部は指頭圧痕である。また外面の一部に黒斑がみられる。87・88は甗である。87は口径15.1cm、88は口径19.0cmで、調整は外面がタテハケ、内面については口縁部がヨコハケ、体部はタテ方向の指ナデ調整である。これらの胎土は密であるが、1～2mm未満の赤色軟質粒や結晶片岩の砂粒を含むことから、在地系のもと考えられる。



第30図 遺物実測図10

89は須恵器台付壺である。外面体部上半には刻み目、その上下に凹線が施されている。また、体部には自然釉がみられる。

以上のSK-54出土土器は、奈良時代前期のものと考えられる。

[SK-75出土土器] (第31図90~94、図版23)

90~93は土師器である。90・91は甕である。90は口径、器高ともに16.0cmを測り、外面には粗いハケ調整が施され、一部には黒斑がみられる。91は口径20.8cm、器高18.4cmで、外面体部はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ調整である。92は口径31.6cm、残存高28.0cmの壺である。外面はタテハケ、内面は、口縁部がヨコハケ後ナデ消し、体部はタテハケ後ナデ消し調整である。また体部には黒斑がみられる。93はカマドの炊き口の底部である。炊き口部は接合面で剥離し、剥離面にはナデ及びタテハケ、口縁部はヘラ切り調整が施されるものである。これらの胎土観察から、在地系のものと考えられる。

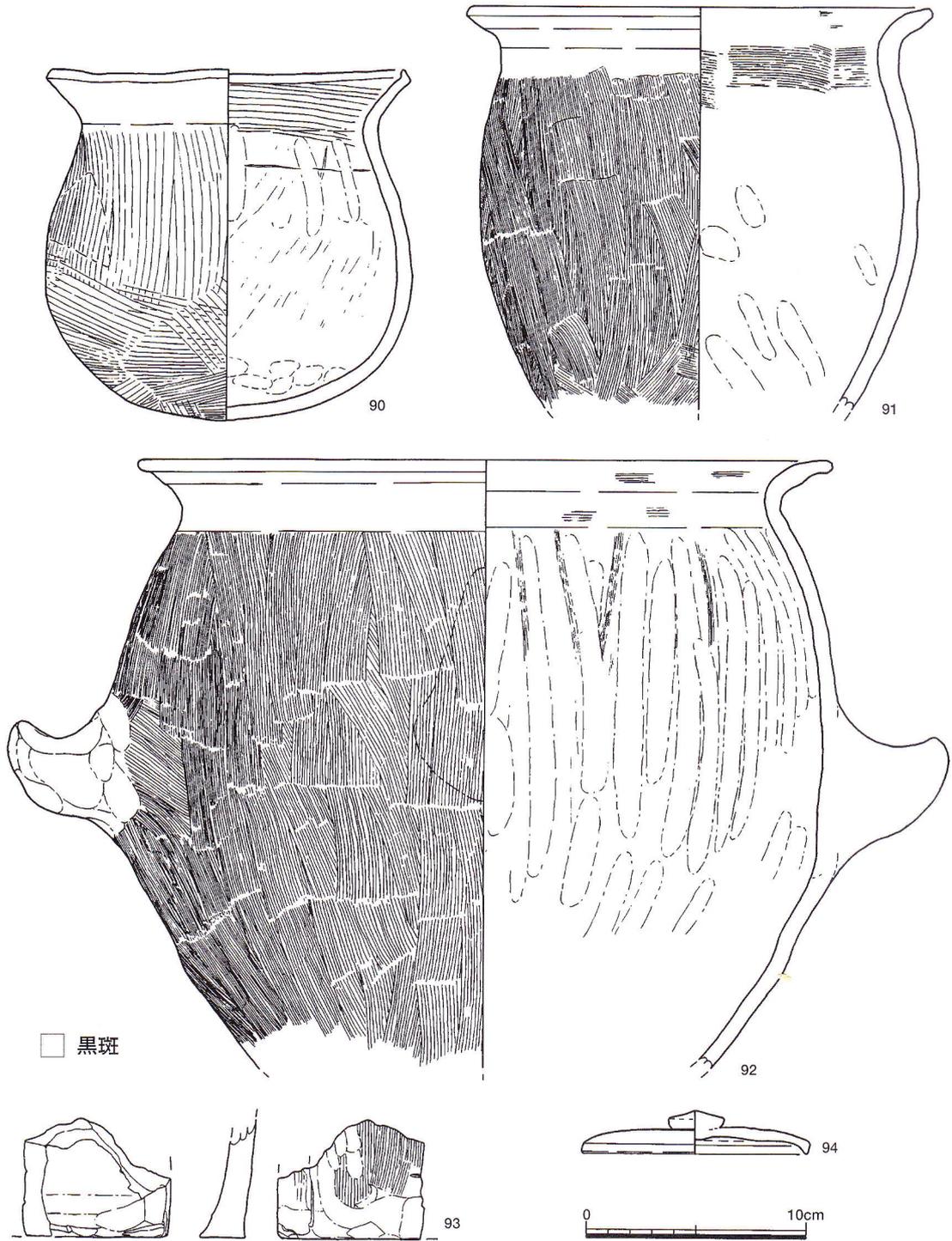
94は宝珠つまみのある須恵器蓋である。口径10.2cm、器高2.0cm、つまみ径2.5cm、高さ9mmである。外面には白濁色の自然釉がみられる。

以上のSK-75出土土器は、奈良時代前期のものと考えられる。

[SK-51他出土土器] (第32図95~102、図版23)

95は宝珠つまみのある須恵器杯蓋で、口径9.9cm、器高2.8cm、つまみ径1.6cm、高さ1.2cmを測る。天井部には自然釉が付着し、ロクロ成形は右回転である。

96~100は土師器である。96は口径23.2cmの蓋で、外面の調整はヨコナデと天井部に一定方向のケズリ、内面には暗文が施されるものである。97~100は皿である。97は口径24.0cm、残存高3.0cmを測り、外面はヨコナデ、内面は暗文が施されるものである。色調は暗褐色を呈し、煤の付着がみられる。98~100の体部はヨコナデ、底部は指オサエ調整である。98は口径19.6cm、器高3.0cm、99は口径19.3cm、器高2.2cm、100は口径14.8cm、器高2.7cmである。99・100の口縁端部内面には細い沈線が施

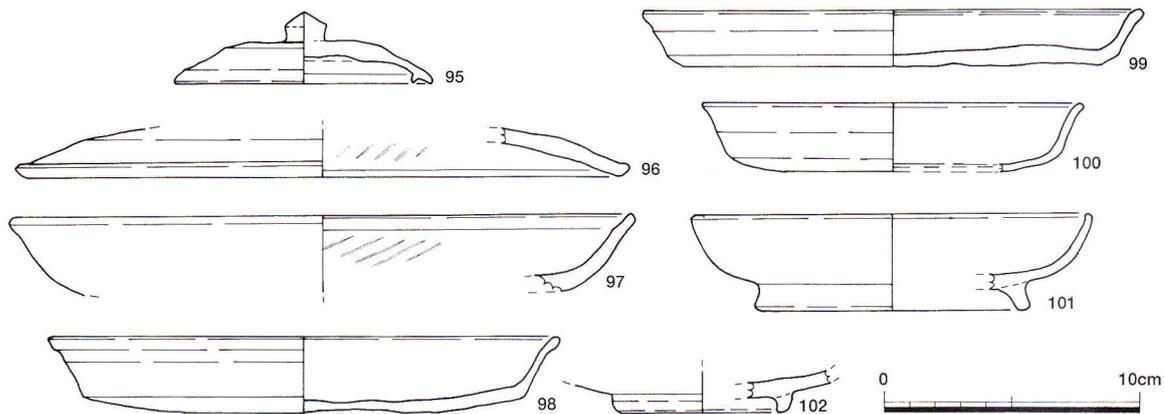


第31図 遺物実測図11

されている。これらの色調は赤褐色及び淡赤褐色を呈し、胎土は密であるが、1mm未満の白色粒などの砂粒を含むものである。

101・102は黒色土器で、内面にはヘラミガキが施されている。101は内面が黒色に燻されたA類の杯で、口径15.4cm、器高3.7cm、高台径10.6cmである。胎土には1mm未満の白色粒の砂粒を含むものである。102は内外面が黒色に燻された高台径6.3cmを測るB類の椀である。胎土は密であるが、1mm未満の白色粒・結晶片岩の砂粒を含むものである。

以上の土器は、95は奈良時代前期、96・97は奈良時代後期、98～102は平安時代前期のものと考え



第32図 遺物実測図12

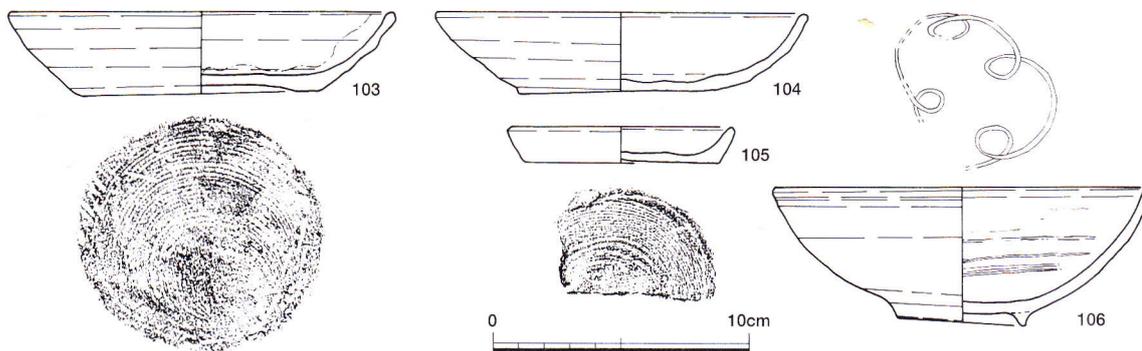
られる。出土位置は95がSK-51、96・98はSD-32、97はSK-103、99・100はSK-100、101はSD-12、102はSK-106である。

[SE-2 出土土器] (第33図103~106、図版24)

103~105は土師器皿で、底部回転糸切りのものである。103の外面は、ヨコナデによって稜がみられる。法量は、口径14.9cm、器高3.2cm、底径9.2cmである。内外面の口縁から体部の約1/3の範囲にタール状の付着物がみられることから灯明皿に用いられたものと考えられる。104は103同様のもので、口径14.4cm、器高3.2cm、底径7.6cmを測る。105は、口径9.6cm、器高1.4cm、底径7.6cmを測る小皿である。これらの色調は淡黄褐色を呈し、胎土は密であるが1mm未満の赤色粒や石英をわずかに含むものである。

106の瓦器碗は口径14.5cm、器高5.5cm、高台径4.9cmである。体部外面下半は指オサエ、内面には暗文がみられ、内底面には4回転以上の連結輪状文が施されている。

以上のSE-2 出土土器は、平安時代後期のものと考えられる。



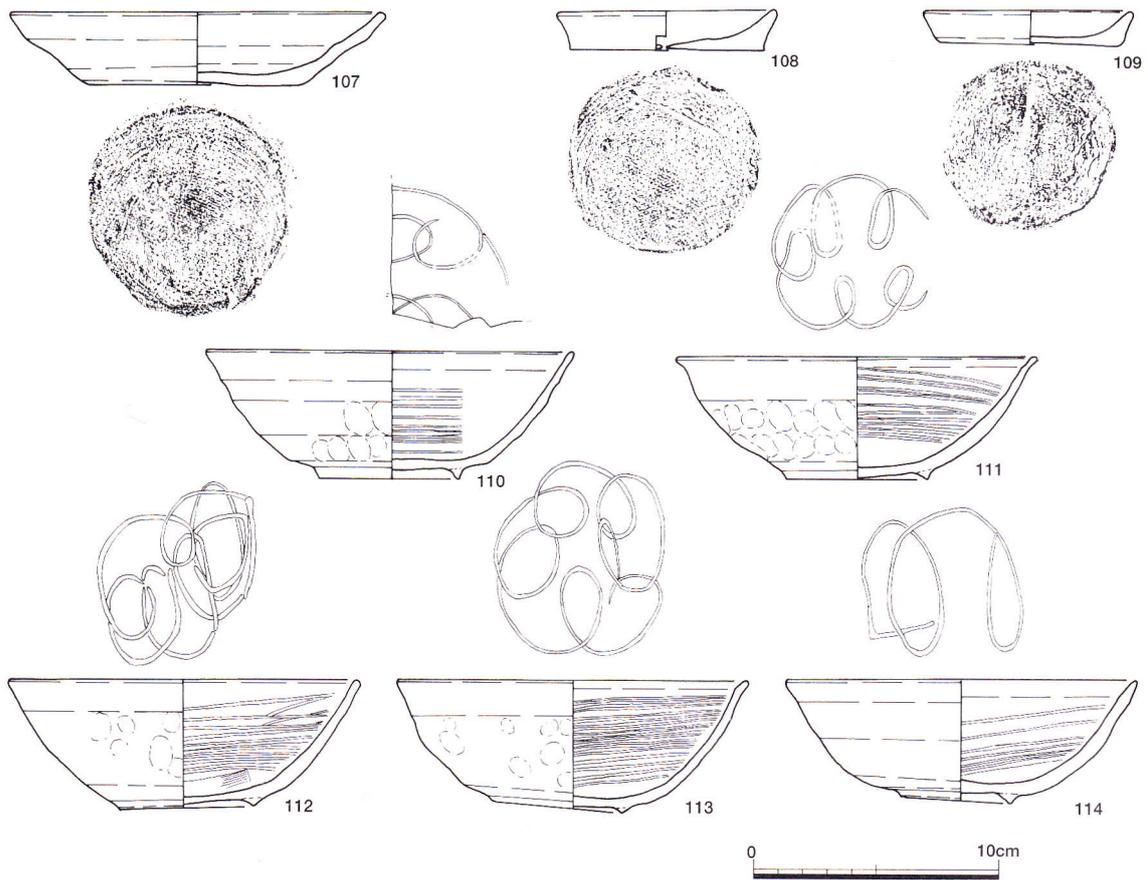
第33図 遺物実測図13

(4) 鎌倉・室町時代の土器

[SK-102出土土器] (第34図107~114、図版24)

107~109は土師器皿で、底部回転糸切りのものである。107は口径15.1cm、器高3.1cm、底径8.4cmである。108・109は口径8.5cm前後の小皿で、口縁部を外反させるものである。108は底面中央部に径1.5mmの外面からの穿孔がみられる。

110~114は瓦器碗である。体部外面下半の調整は、指オサエ、内面は暗文がみられ、内底面は3



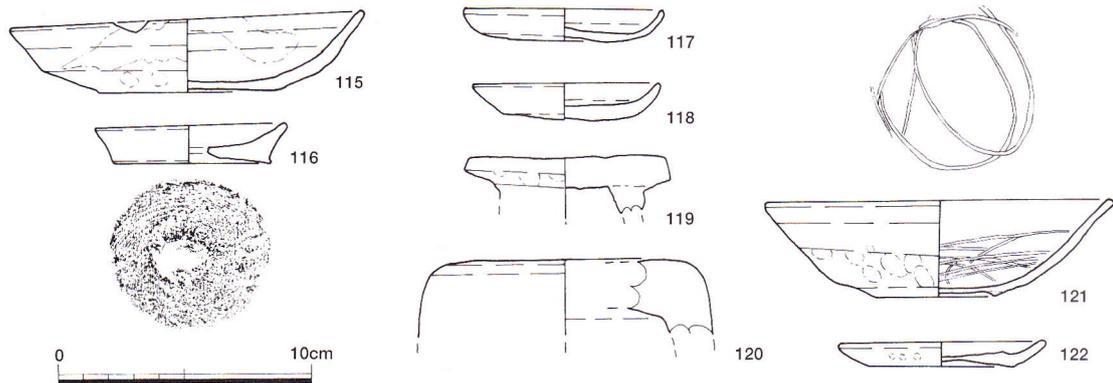
第34図 遺物実測図14

～6回転の連結輪状文が施されている。110と111は口径14.5cm前後で、112～114は口径14.1cm前後のもので、いずれも器高5.1～5.4cm、高台径5.5cm前後を測る。口径が大きなもの器高が低い傾向があり、114は高台径が4.7cmと最も小さなものである。

以上のSK-102出土土器は、鎌倉時代初頭のものと考えられる。

[SD-30出土土器] (第35図115～122、図版24)

115～120は土師器である。115～118は皿で、115は口径13.8cm、器高3.2cm、底径6.8cmである。口縁端部の1ヶ所を打ち欠いていること、その周囲に煤が付着していることから灯明皿に用いられたと考えられる。116～118は小皿で、底部が回転糸切りのもの(116)と指オサエのもの(117・118)が



第35図 遺物実測図15

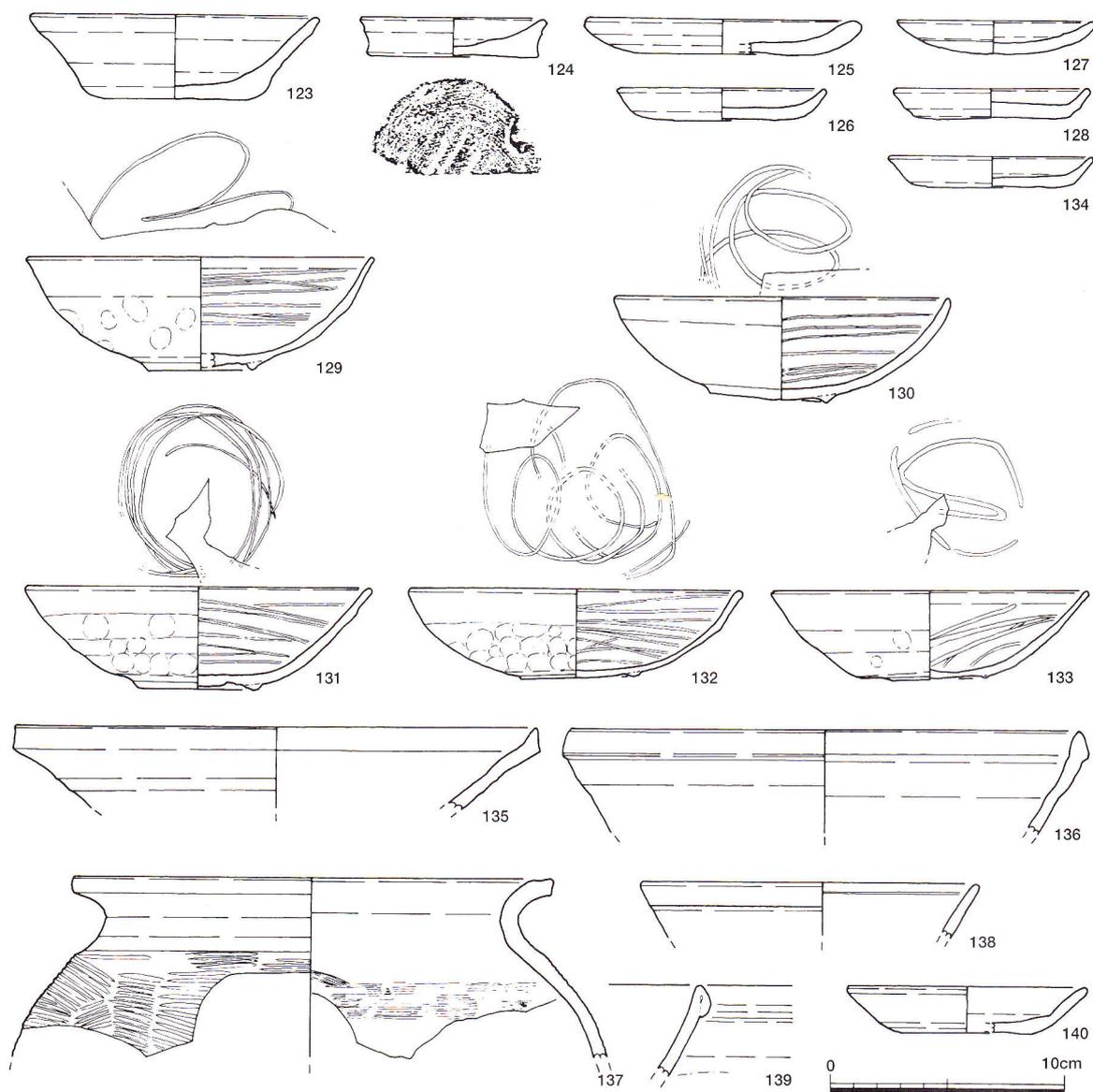
ある。116は口縁部を外反させるもので、内面には煤が付着している。口径7.5cm、器高1.7cm、底径6.1cmを測り、底面中央部には径2.2cmの穿孔がみられる。119・120は器台である。119は台部径8.0cmで、指オサエとナデ調整が施されるものである。120の上面には、繊維状の圧痕がみられる。

121は瓦器椀である。口径13.8cm、器高3.9cm、高台径4.9cmを測り、外面下半は指オサエ痕を明瞭に残し、内面は暗文が施され、内底面には2回転以上の連結輪状文がみられる。122は瓦器皿で、口径8.2cm、器高1.1cm、高台径5.8cmを測るもので、暗文はみられない。

以上のSD-30出土土器は、鎌倉時代前期のものと考えられる。

[SE-3 出土土器] (第36図123~140、図版25)

123~128は土師器皿で、123・124は底部回転糸切りのものである。123は口径12.2cm、器高3.6cmを測り、内外面にタール状の付着物がみられることから灯明皿に使用されたと考えられる。124の小皿は、口縁部を外反させるものである。口径7.7cm、器高1.7cmである。125は底部が丸みをもつもので、口径11.4cm、器高1.5cmを測り、口縁端部が肥厚し、色調は淡黄褐色を呈するものである。126~



第36図 遺物実測図16

128は小皿である。法量は、口径8.5cm前後、器高は1.4cm前後にまとまりをもつものである。

129～133は瓦器碗で、外面体部下半は指オサエ、内側面はヨコ方向の暗文がみられ、内底面は2～5回転の連結輪状文が施されたものである。これらの口径は133を除き14.5cm前後であるが、133は13.4cmと小さなものである。また器高は132・133を除き4.4cm前後を測るが、132・133は3.9cmと低いものである。高台径は129を除き5.0cm前後であるが、129は4.4cmと小さなものである。132の高台部は崩れ、3/4周までと全周しないものである。133の内面暗文は、口縁部から底部まで一連のものである。

134の瓦器皿は、口径8.6cm、器高1.4cmを測り、内面には暗文が施されないものである。

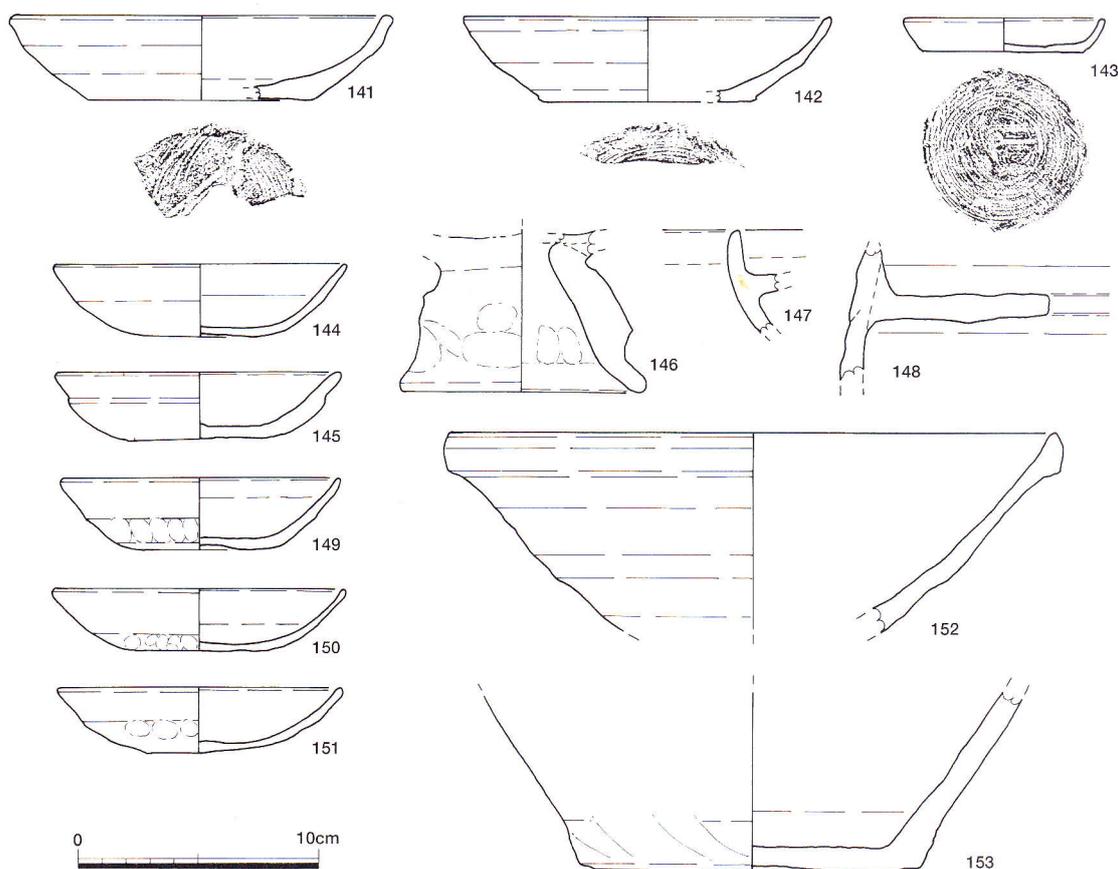
135～137は東播系須恵器である。135・136はこね鉢の口縁部で、135の外面端部には自然釉がみられる。137は甕で、外面には平行タタキ、内面にはハケ調整が施されるものである。

138～140は中国製磁器である。138は口径14.4cmの青磁碗の口縁部で、内外面には沈線がみられる。139・140は白磁である。139は玉縁碗の口縁部である。140は口径10.1cm、器高2.0cm、底径5.5cmの皿で、体部下半から底部は露胎である。

以上のSE-3出土土器は、鎌倉時代前期のものと考えられる。

[SK-27出土土器] (第37図141～153、図版25)

141～148は土師器である。141～145は皿である。141～143は底部回転糸切りで、口縁部が内湾するものである。141・142は口径15.3cm前後、器高3.5cmで、143は口径8.2cm、器高1.5cmである。142の



第37図 遺物実測図17

内面の一部に煤がみられることから、灯明皿の可能性はある。144は口径12.0cm、器高3.1cm、145は口径11.6cm、器高2.9cmで、ナデにより外面に段が付くものである。146は脚台付皿の脚部である。手づくね成形で、指オサエ痕を明瞭に残すものであり、脚台径10.0cm、脚台高6.2cmを測る。147・148はカマドの底部分である。それぞれの色調は、141が赤褐色、142～144が淡黄褐色、145・146が淡赤褐色、147が淡褐色を呈するものである。胎土は、141が赤色と白色の縞状の粘土、他のものは密であるが、1mm未満の白色粒を含むものである。また147は胎土観察から在地系のものと考えられる。

149～151は瓦器碗で、体部外面下半は指オサエ成形がみられ、内外面に暗文がみられないものである。法量は、口径11.7cm前後、器高2.8cm前後とまとまりをもつものである。

152の東播系須恵器こね鉢は、口縁部外面が黒灰色に発色し、口径25.2cm、残存高8.3cmを測るものである。

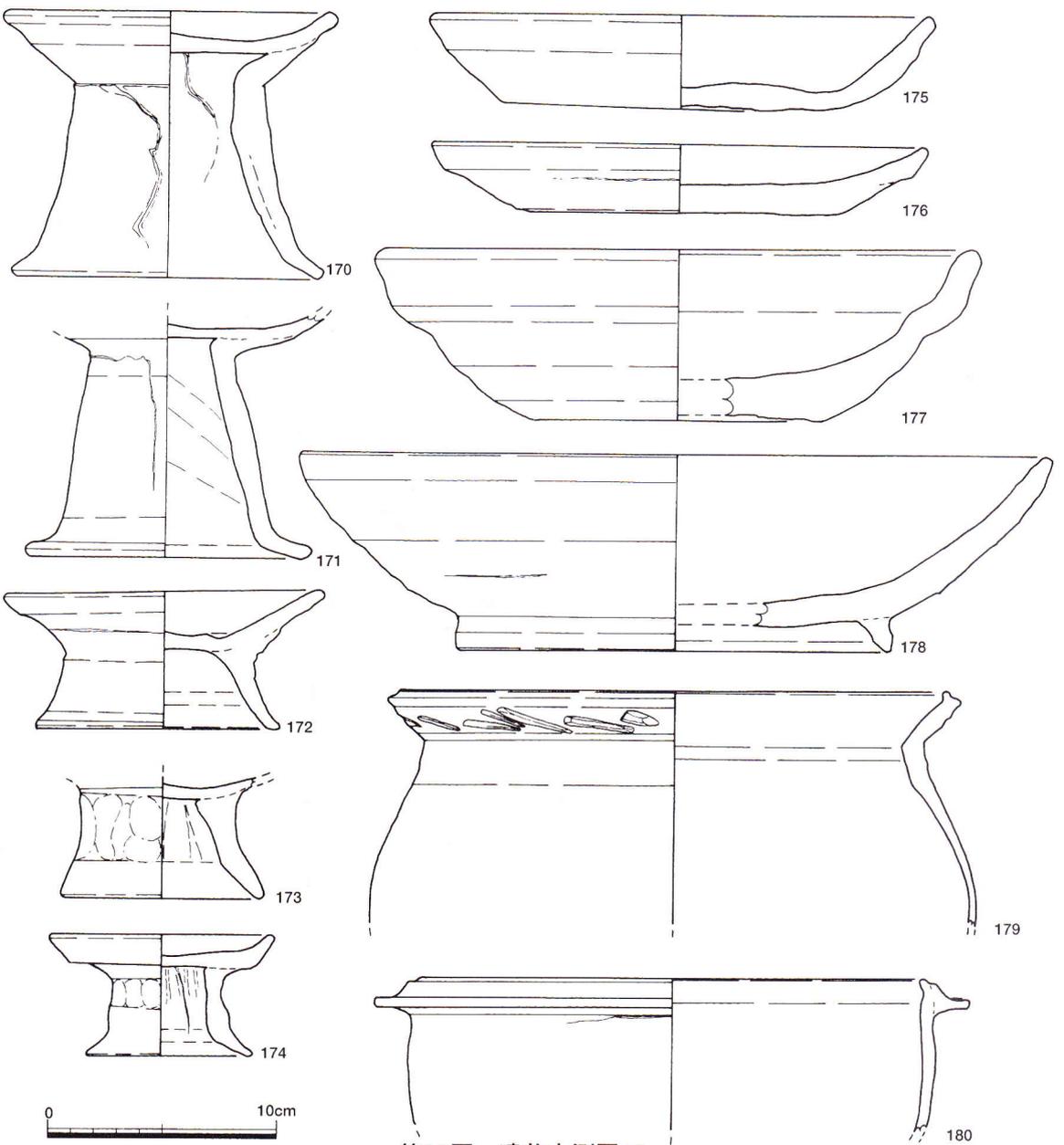
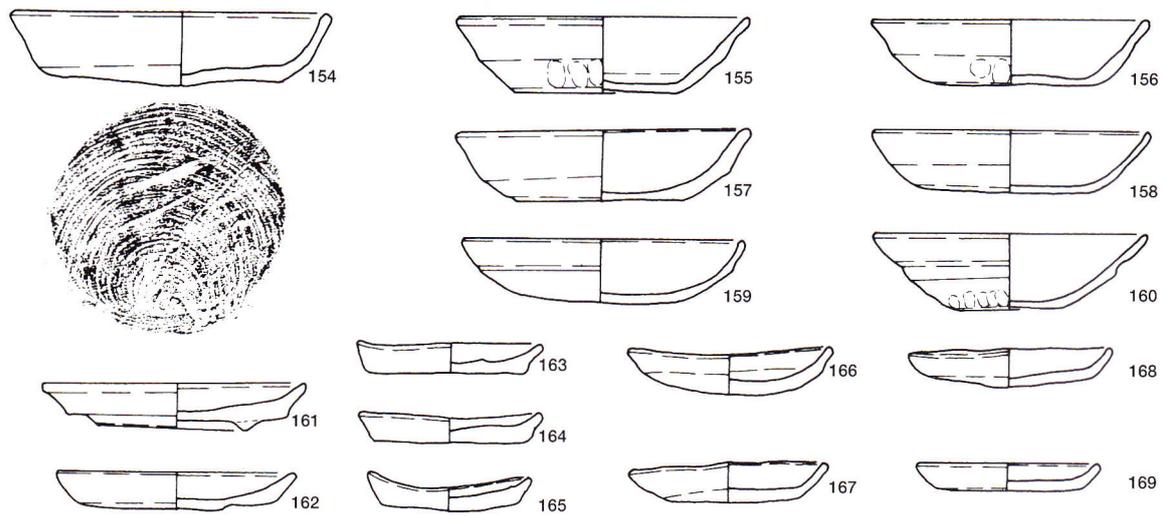
153は常滑焼甕の底部である。底径14.2cmで、外面は指オサエ後ナデ、内面は板状工具によるナデ、底部は未調整で煤が付着している。

以上のSK-27出土土器は、鎌倉時代後期のものと考えられる。

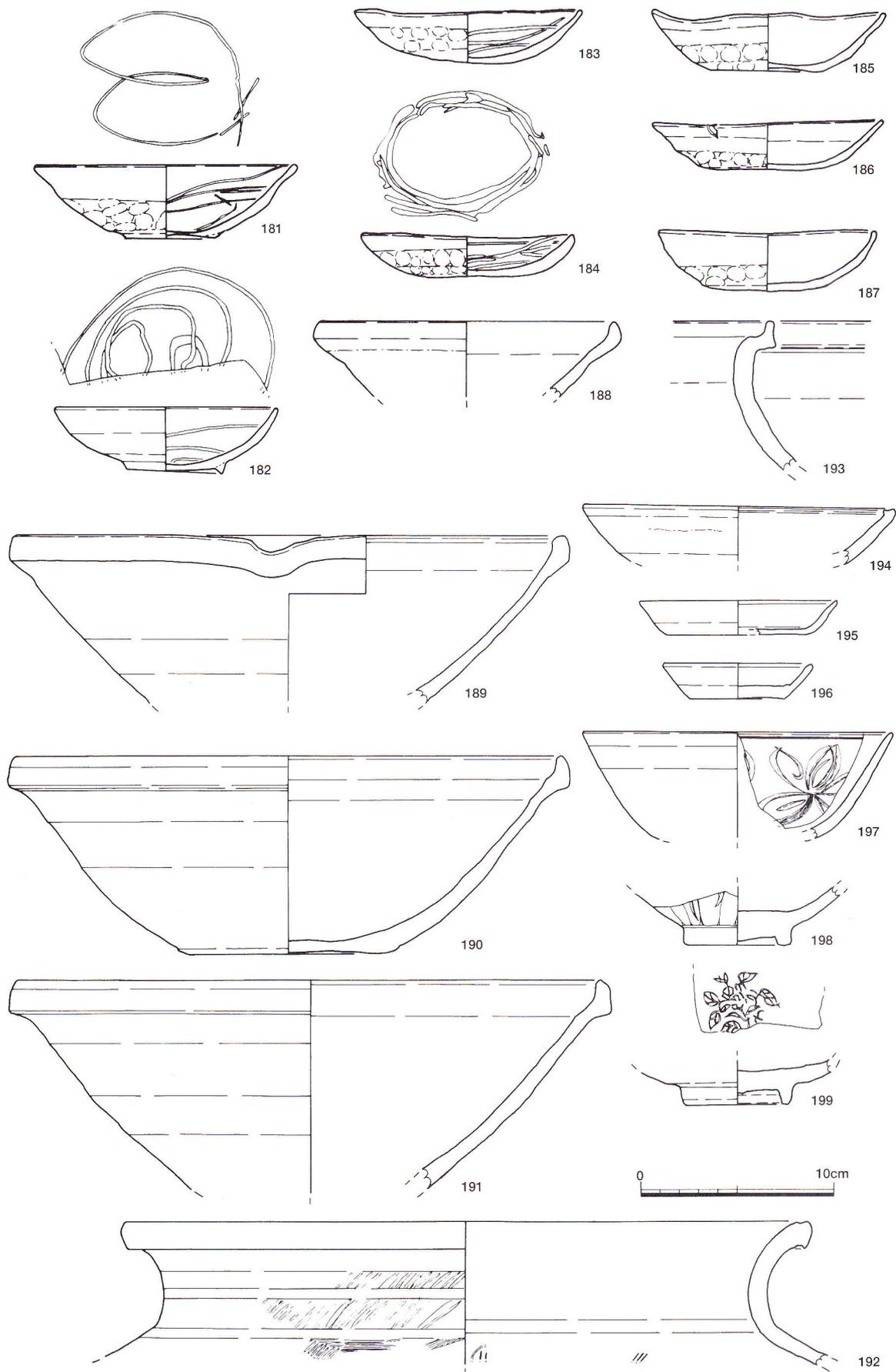
[SD-12出土土器] (第38・39図154～199、図版26・27)

154～180は土師器である。154～169は皿であり、154～160は大皿、161・162は中皿、163～169は小皿である。154～160は口径11.0cm前後、器高は2.8cm前後を測る。154は底部回転糸切りである。155～157の底部は平底であり、158～160は丸底の傾向を有するものである。160は強いヨコナデ成形により外面が段となる。161は口径10.4cm、器高2.0cmで、径5.9cmの高台を有するもので、底面に一部回転糸切り痕を残す。162は口径9.4cm、器高1.5cmである。163～165は底部端に稜がみられ、口縁部が外反するもので、口径6.7cm前後、器高1.3cm前後を測る。166～169は底部端に稜がみられないものである。166は口径8.0cm、器高1.9cm、167は口径7.7cm、器高1.7cm、168は口径8.0cm、器高1.6cm、169は口径7.1cm、器高1.2cmを測る。170～174は脚台付皿である。170は口径14.0cm、器高11.7cm、脚台径13.2cm、脚台高9.9cm、171は脚台径11.8cm、脚台高9.6cmで、これらの脚部内面には成形時の粘土紐巻き上げ痕を顕著に残すものである。172は口径13.6cm、器高6.1cm、脚台径10.4cm、173は脚台径8.5cm、脚台高4.4cmを測る。174は口径9.6cm、器高5.3cm、脚台径7.0cmで、皿部が161と類似するものである。175～178は厚手の盤である。175は口径21.4cm、器高4.3cm、176は口径21.4cm、器高3.0cm、177の外面は強いヨコナデによって段状を呈し、口径25.6cm、器高7.5cmを測る。178は口径32.4cm、器高8.6cmで、径18.6cmの高台を有するものである。以上の色調は、154が淡黄褐色、158・159・168・172が赤褐色、160・169が明黄灰色、166が淡黄灰色、175が淡黄褐色、他は淡赤褐色を呈するものである。また胎土は密であるが、1mm未満の赤色粒、石英を含むものである。167・168・176・178は胎土観察から在地系のものと考えられる。179・180は釜である。179は口縁外面に一部刻み目状の圧痕がみられる。180は鏝をもつもので、口径21.8cm、鏝径26.0cmである。それぞれ、外面に煤の付着がみられる。

181～187は瓦器碗である。181～184は内面に暗文が施されたもの、185～187は暗文のないものである。また181・182は高台をもつもの、183～187はもたないものである。181は口径13.4cm、器高3.8cm、高台径4.6cm、内底面には2回転の連結輪状暗文が施される。口縁端部の1ヶ所に2次焼成がみられ、灯明皿に用いられた可能性がある。182は口径11.4cm、器高3.5cm、高台径4.8cmで、内底面には2回転以上の連結輪状暗文が施される。183は口径11.6cm、器高1.8cm、底径4.8cmで、内底面には4



第38図 遺物実測図18



第39图 遺物実測図19

～5回転の渦巻状暗文、端部内面には沈線が施される。184は口径10.9cm、器高2.3cm、底径7.6cmで、内底面には3～4回転の渦巻状暗文が施される。185は口径12.0cm、器高3.1cm、底径5.8cmで、全体に銀化が著しく、口縁端部は歪みが著しい。186は口径11.8cm、器高2.8cm、底径6.6cmで、口縁端部に補修痕がみられる。187は口径11.1cm、器高3.2cm、底径6.4cmである。また186・187には、重ね焼きの痕跡もみられる。

188～192は東播系須恵器である。188は口径15.1cmの鉢、189～191はこね鉢である。189は口径28.0cmで、自然釉がみられる。190は口径28.3cm、器高10.3cm、底径10.0cmで、底部は回転糸切りである。191は口径30.0cmである。192は口径35.5cmの甕で、口縁部内面には沈線が施され、体部内面には当て具痕がみられる。

193は常滑焼甕の口縁部で、外面には自然釉がみられる。

194は口径16.0cmの瀬戸・美濃系灰釉折縁皿である。

195～199は中国製磁器である。195・196はいわゆる口禿げの白磁皿で、底部はヘラケズリ成形である。195は口径10.2cm、器高1.8cm、底径7.2cm、196は口径7.6cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測る。197～199は青磁碗である。197は内面に片切彫りの蓮華文を彫刻するもので、口径16.0cmである。198は鎬蓮弁文碗で、高台径4.8cmを測る高台畳付部が平滑であることから、砥石に転用された可能性がある。199は内底面に印花文がスタンプされたもので、高台径5.3cmを測る。

以上のSD-12出土土器は、鎌倉時代後期のものと考えられる。

[SD-8出土土器] (第40図200～215、図版28)

200～205は土師器である。200は口縁部が外反する小皿で、口径6.9cm、器高1.6cmである。201は口径30.8cm、器高6.0cm、底径19.6cmの盤で、内面に煤の付着がみられることから灯明皿として用いられた可能性がある。202～205は釜である。202・203は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部をつまみ上げるものである。204・205は短い鍔の付くもので、口縁部は内湾するものである。

206～208は瓦質土器である。206は口径28.6cmの播鉢で、外面体部はヘラケズリ後ナデ、内面はハケ調整、播目は1単位7本である。207は口径23.4cmの甕で、外面体部にはタタキ、内面にはナデ調整が施される。208は口径35.6cmの火鉢である。外面には型押しによる文様後ヘラミガキが施されるものであるが、磨滅が著しい。

209～211は常滑焼である。209・210は壺で、210は口径20.2cmを測り、口縁端部には自然釉がみられる。211は口径29.8cmの甕である。

212・213は備前焼播鉢で、212の口径は30.0cm、213の底径は13.0cmで、播目は1単位8本である。また、213の内面は平滑になっており、使用頻度が高かったことが窺える。

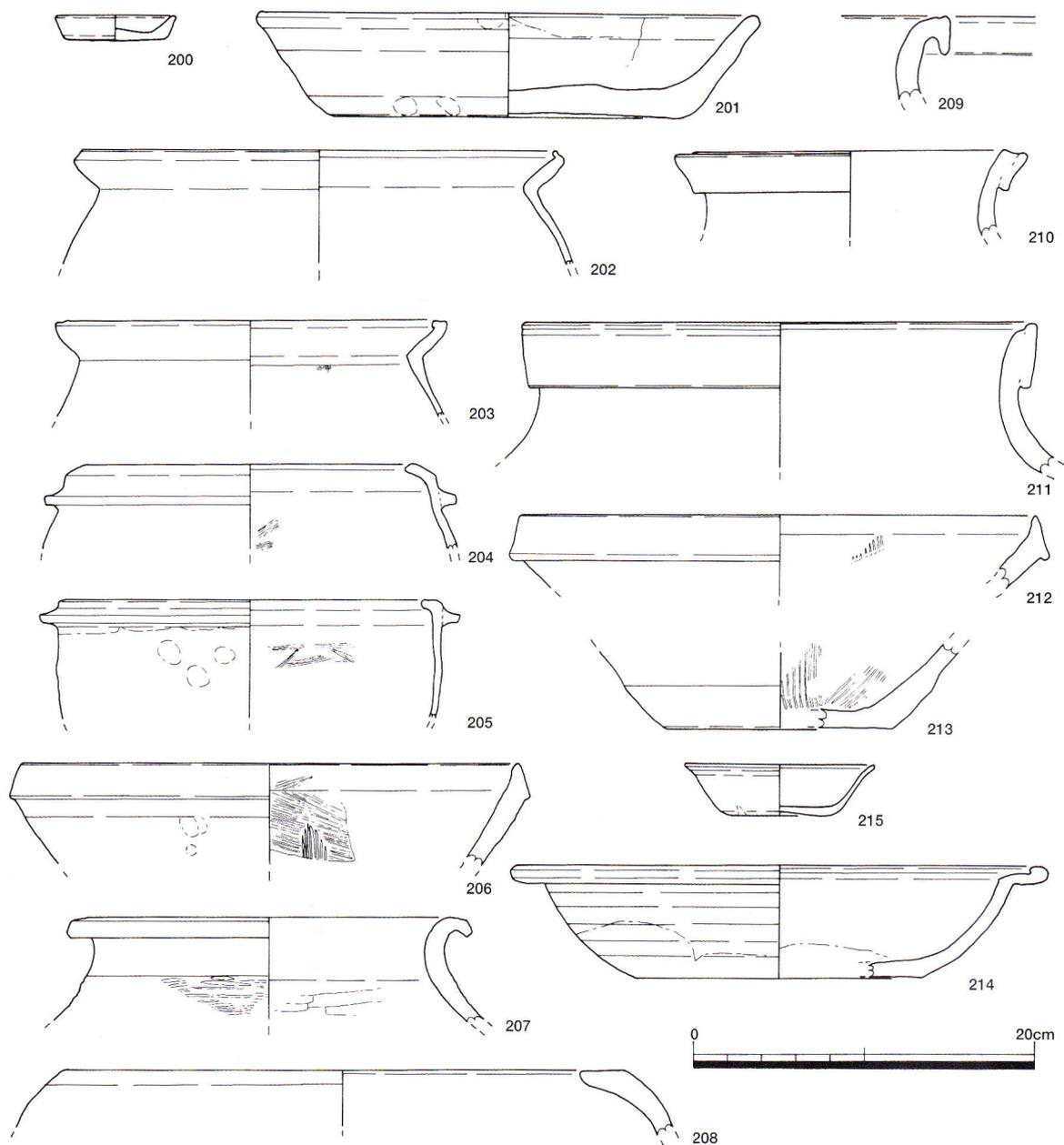
214は瀬戸・美濃系の折縁深皿であり、口径29.4cm、器高6.5cm、底径16.5cmである。内外面共に体部下半は露胎である。

215は中国製白磁の杯で、口縁端部の釉を削り取るいわゆる口禿げのものである。口径11.0cm、器高3.0cm、底径5.8cmである。

以上のSD-8出土土器は、室町時代のものと考えられる。

[SK-23出土土器] (第41図216～220、図版28)

216は口径19.5cmの土師器塙である。外面は平行タタキ、内面は板状工具によるナデ調整がみられ



第40図 遺物実測図20

る。

217・218は瓦質土器の播鉢である。口径は、217が37.6cm、218は24.7cmで、1単位当りの播目は、217が9本以上、218は12本施されるものである。

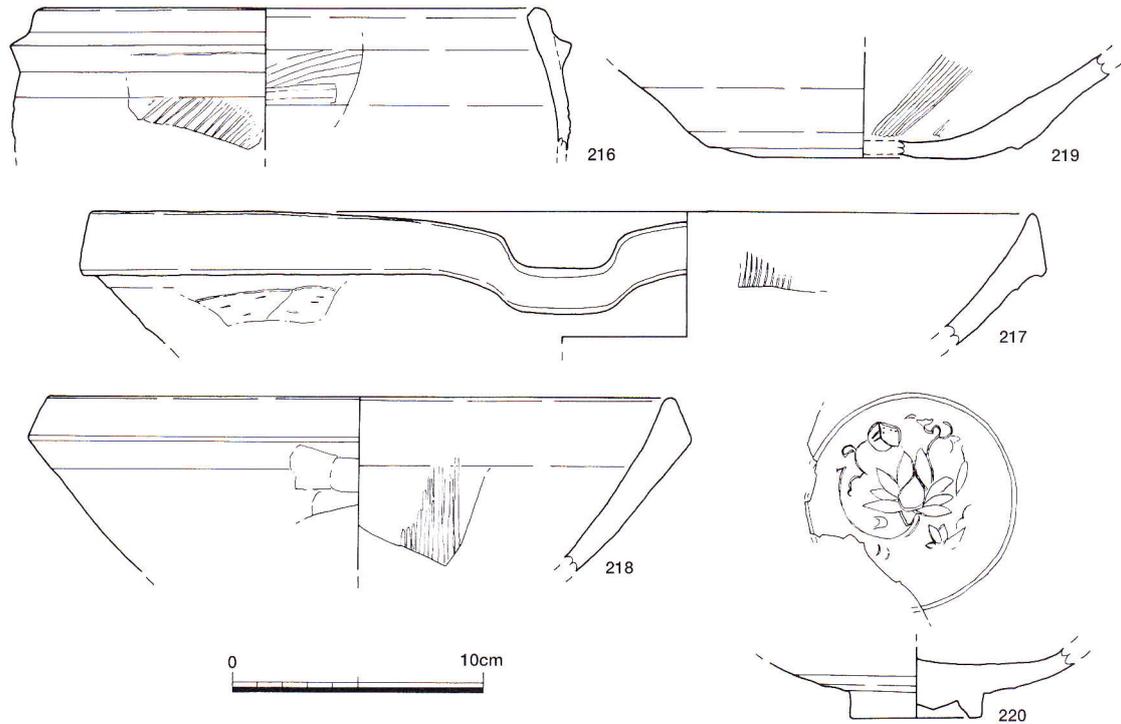
219は備前焼播鉢の底部で、外底面は未調整で底径12.4cm、1単位8本の播目が施される。

220は高台径5.3cmの中国製青磁碗で、施釉部分には粗い貫入がみられ、内底面には2重の圈線内にスタンプによる花文が施されている。

以上のSK-23出土土器は、室町時代のものと考えられる。

[SE-1出土土器] (第42図221~229、図版29)

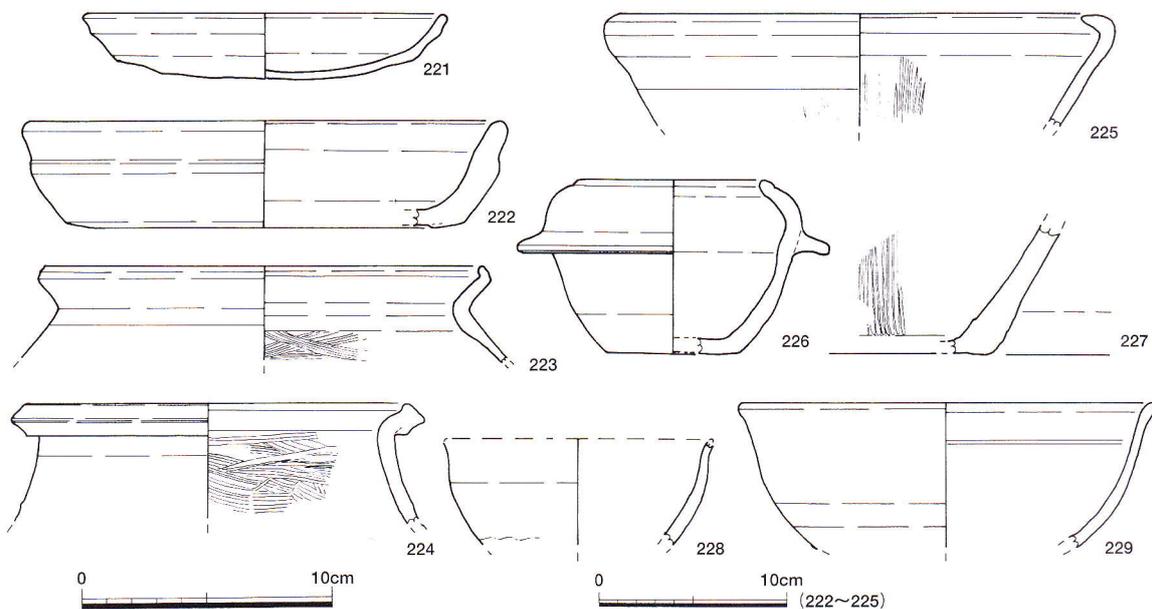
221~225は土師器である。221は皿で、ヨコナデにより外面が緩やかな段状を呈するものである。



第41図 遺物実測図21

口径14.3cm、器高2.6cmを測る。222は盤で、口径25.3cm、器高5.8cm、底径21.4cmを測る。223・224は釜である。223は口縁部が「く」の字状を呈するものであり、口縁端部は内湾し、体部内面にはハケ調整が施されている。また224の口縁部は折り返され、厚みをもたせている。225は口径25.4cmの播鉢である。内面の播目は1単位7本とみられ、外面は下方から上方へのタテ方向のケズリ調整である。また色調は褐色を呈し、胎土は密であるが1mm未満の石英を含む。

226は瓦質土器羽釜のミニチュアである。口径7.0cm、器高7.0cm、底径5.4cm、鏝径12.5cmを測り、左回転のロクロ成形で、体部外面下半はヘラケズリである。底部に煤が付着していることから、実



第42図 遺物実測図22

用品とみられる。色調は黒灰色であるが、胎土は赤褐色を呈す。

227は備前焼播鉢の底部で、播目は1単位7本である。

228は瀬戸・美濃系天目茶碗である。口径は10.8cmで、色調は褐色、露胎部は暗赤褐色を呈する。

229は中国製青磁碗である。口径は16.3cmで、口縁部内面には沈線による圈線が施され、緑灰色を呈するものである。

以上のSE-1出土土器は、室町時代のもと考えられる。

[SK-106他出土土器] (第43・44図230~259、図版29・30)

230~242は土師器である。230~240は皿で、230~235は底部回転糸切りである。口径は14.2cmのもの(230・231)と8.0cm前後のもの(232~235)に分類することができる。235は内面の一部に煤がみられることから、灯明皿に用いられたと考えられる。236~238は底部が丸みをもつもので、口縁部については236がやや直立気味に立ち上がるが、他は外反するものである。口径は、236~238が12.5cm前後、239は9.4cm、240は7.2cmを測る。これらの色調は赤褐色を呈し、胎土は密である。238と240の胎土は白色と赤色の練り込み状の粘土である。241は高台径11.8cmの盤底部である。242は釜で、口縁部が「く」の字状を呈し、端部を丸くおさめるものである。

243~246は瓦器碗である。243は口径14.2cm、器高5.4cm、高台径5.6cmを測り、内底面には2回転の連結輪状暗文が施される。244は暗文が粗く施されたもので、口径14.1cm、器高5.0cm、高台径4.3cmを測る。245・246は口径13.7cm、器高4.5cm、高台径4.4cmである。245の内底面には右回りに6回転の連結輪状暗文、246の暗文の単位は、摩滅のため不明である。247は瓦器皿で、暗文をもたないものである。口径8.0cm、器高1.9cm、底径4.9cmを測る。

248は瓦質土器羽釜である。色調は黒褐色を呈し、胎土は密であるが1mm未満の石英、結晶片岩を含むことから在地系のもと考えられる。

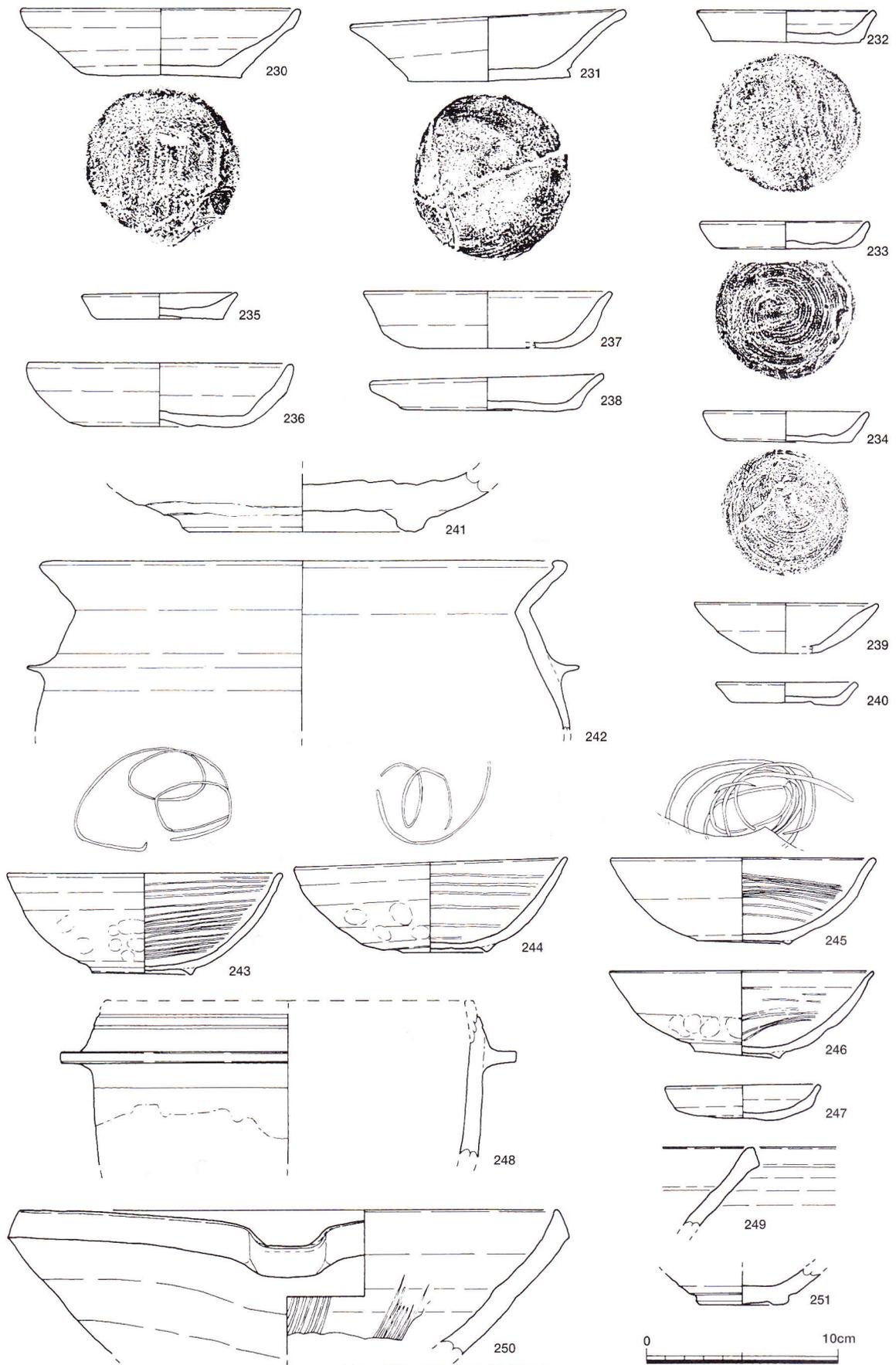
249は東播系須恵器こね鉢である。

250は口径27.9cmの備前焼播鉢である。播目は1単位7本である。内面全体に自然釉が付着し、外面に重ね焼きの痕跡がみられる。このことから、焼成時に窯詰め最上部に位置していたものとみられる。

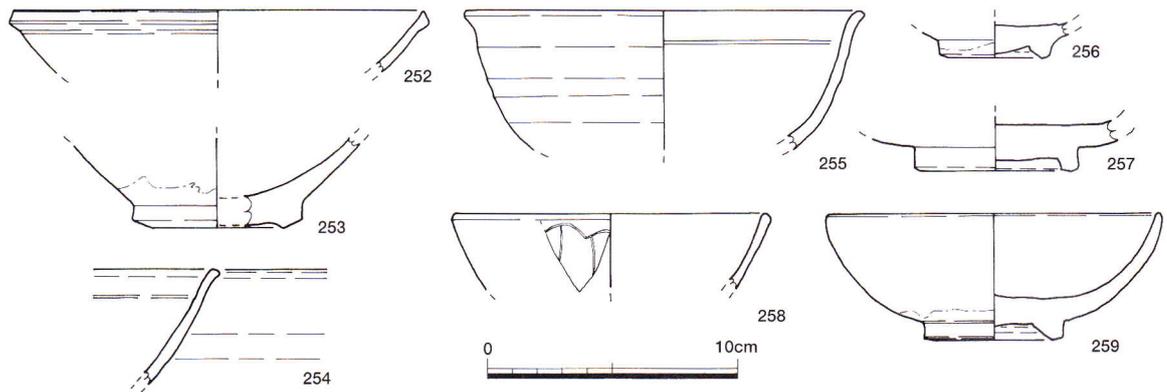
251は瀬戸・美濃系の灰釉平碗である。高台径4.6cmを測り、高台畳付部分に回転糸切り痕がみられる。

252~259は中国製磁器である。252・253は白磁碗である。252は口径16.3cmを測る玉縁口縁のものである。253は高台径6.8cmを測り、高台端部は平滑になっているため、砥石として再利用された可能性がある。254~259は青磁碗である。254は内面体部上半に沈線が一条入り、口縁端部が外反するものである。255は口径15.5cmを測り、口縁端部が外反するものである。256は高台径4.5cmを測り、高台部分を露胎とするものである。257は高台径6.0cmを測り、底部が厚いものである。また高台部は平滑になっているため、砥石として再利用された可能性がある。258は口径12.4cmを測り、外面に線刻の蓮弁文を施すものである。259は口径13.1cm、器高5.1cm、高台径5.6cmを測るもので、高台部を露胎とするものである。

出土位置は230・232がSK-106、231・241・242・246はSK-97、233・234はSD-45、235・244・249・253はSD-28、236はSK-110、237はSK-25、238・240はSK-39、239・257はSK-28、243



第43図 遺物実測図23



第44図 遺物実測図24

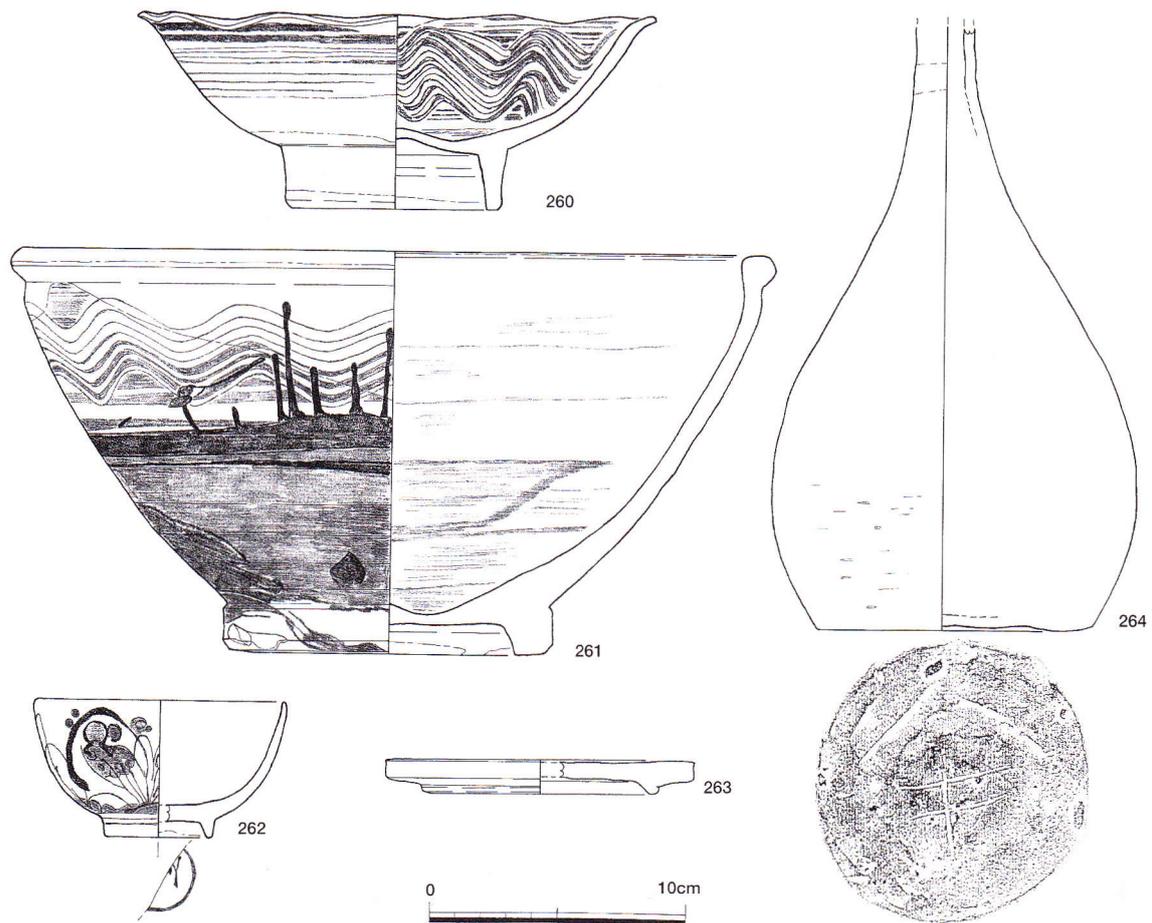
はSK-103、245はSK-117、247はSK-1、248・258はSK-30、250はSD-24、251はSK-147、252はSK-131、254はSD-44、255はSD-7、256はSD-23、259はSK-87である。

(5) 江戸時代の土器 (第45図260~264、図版30)

260・261は肥前系陶器である。260はなぶり口縁に仕上げた鉢で、高台は高く内底面が饅頭心状になる形状のものである。内外面とも白化粧土をヨコ方向にハケ塗りし、さらに内面に波状文をハケ塗りした後、高台部を除き透明釉を掛けている。そして、高台端部は泥漿に漬け掛けし、焼成後砥石を使って平滑にしている。また内底面は、いわゆる蛇ノ目釉剥ぎが行われている。261は口縁端部を外側に肥厚させ、丸くおさめた片口鉢である。外面体部下半から高台部にかけてヘラケズリが行われ、削り出された高台部の外端面を斜めに切り落としている。この土器の施釉方法は、まず内外面に白化粧土をヨコ方向にハケ塗りし、さらに外面に波状文をハケ塗りした後、外面下半に鉄釉の泥漿を塗り、反転させて乾燥させている。そして、外面上位から内面にかけて灰釉を掛け、高台畳付部など部分的に灰釉を塗った後焼成を行い、焼成後は高台畳付部に砥石をかけて平滑に仕上げている。この2点は、SE-5の内部下位層にあたる第3層から出土したもので、前者は内野山北窯系の所産とみられ、ともに肥前系陶器の第IV期に分類できる。

262は肥前系磁器染付丸碗である。外面には草花文を、高台内部には圏線内に裏銘を描いている。また高台畳付部には砂の付着が確認できる。263は備前焼の蓋である。形状は直径12.1cmの円板状のもので、底面には削り出しによる受け部が付く。外端面は焼成の後、砥石を用いて平滑に仕上げている。また上端面には重ね焼の痕跡が明瞭に観察できる。この2点はSK-15から出土したもので、江戸時代中期に位置づけられる。

264は備前焼の徳利である。体部下半にはヨコ方向のヘラケズリを行った後、タテ方向にナデ消した痕跡が確認できる。外底面はヘラケズリによって周囲を高台状に仕上げ、中央部分にヘラ先を用いて「キ」の字状の記号を施している。この土器は、第1区南半部の土葬墓(SK-61)から出土した副葬品とみられるもので、口縁部を故意に打ち欠いた可能性も考えられる。形状からみて、江戸時代前期に位置づけられる。



第45図 遺物実測図25

(6) 瓦

[軒丸瓦] (第46図265~270、図版31)

265~267は、八葉複弁蓮華文の軒丸瓦である。265・266の中房には5個の蓮子が配される。265は瓦当と丸瓦の接合が差し込み式である。瓦当面には離れ砂、丸瓦部の凹面には布目が一部にみられる。267の中房には7個の蓮子が配される。これらは、平安時代後期のものと考えられる。

268~270は巴文軒丸瓦である。巴の尾部が接し、圏線状を呈するタイプである。268・269は左巻き、270は右巻きである。これらは、鎌倉時代から室町時代までのものと考えられる。

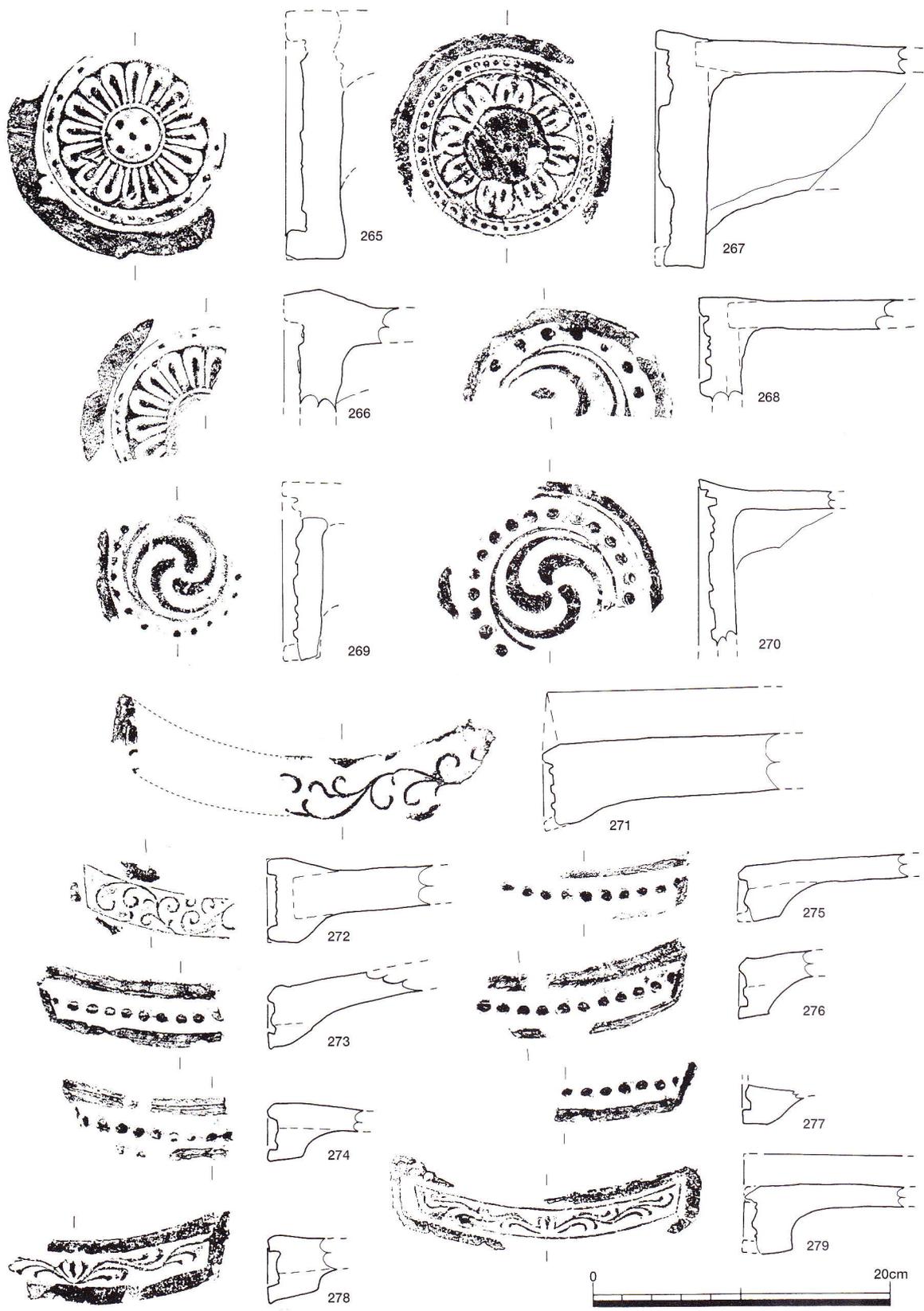
出土位置は265がSK-118、266・268・270はSD-12、267・269はSK-23である。

[軒平瓦] (第46図271~279、図版31)

271は偏行唐草文軒平瓦である。平瓦部の凹面は布目が顕著に残り、凸面は板状工具によるタテ方向のナデ調整である。272は宝相華唐草文軒平瓦である。文様は圏線で囲まれ、中心飾りは四葉、その左右に唐草文を配し、瓦当面には木目がみられる。これらは平安時代後期のものとみられる。

273~277は連珠文軒平瓦で、両端の連珠は脇区に珠文が接するものである。277は接合面で剥離しており、接合部に櫛目がみられる。278・279は均整唐草文軒平瓦で、瓦当面に離れ砂がみられる。279の文様区は圏線で囲まれている。これらは、鎌倉時代から室町時代までのものと考えられる。

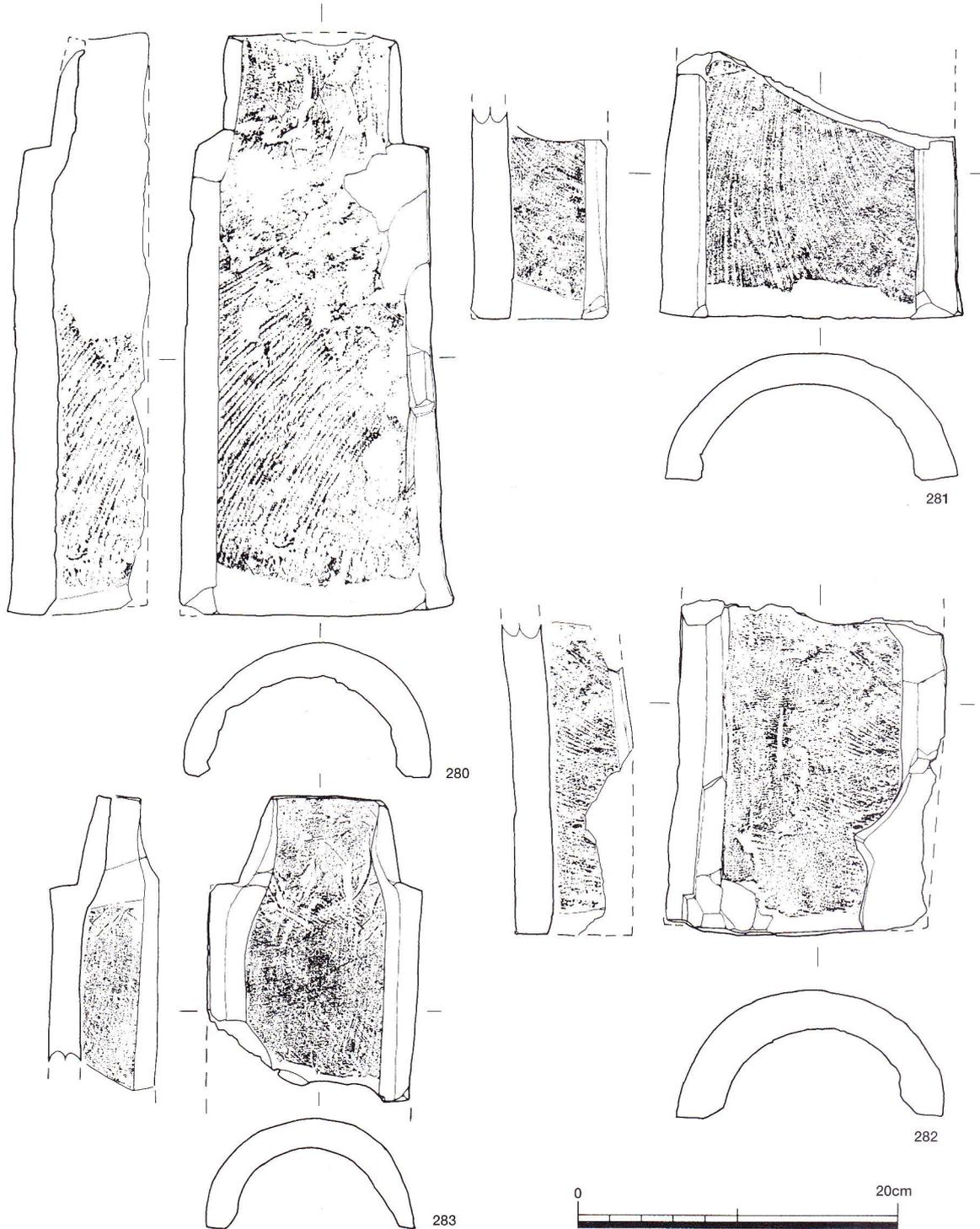
出土位置は271がSD-14、272・274はSE-1、273・275・279はSD-12、276~278はSK-23である。



第46図 遺物実測図26

[丸瓦] (第47図280~283、図版32)

280・281の凸面はヨコ方向のナデ調整であるが、丸瓦部狭端の一部に縄叩き調整を残すものである。280は2次焼成で赤色に変色している。282の凸面は玉縁部側に縄叩きがみられ、木口側はナデ調整である。283は凸面にタテ方向のナデが施され、丸瓦部狭端の一部に縄目を残すものである。280~283の凹面は斜めコビキと布目が明瞭に残るものである。

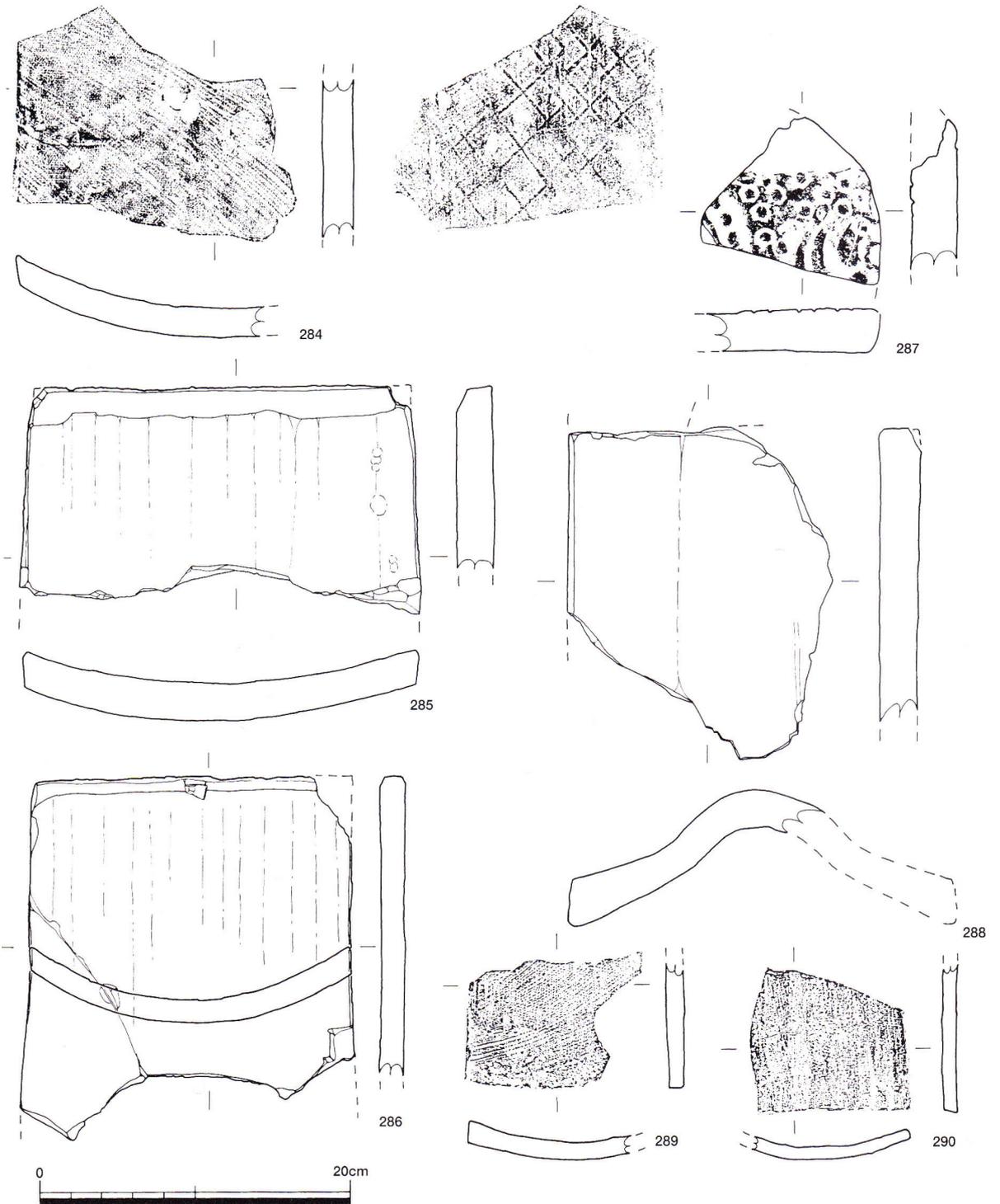


第47図 遺物実測図27

出土位置は280が第4b層、281はSK-143、282はSD-14、283はSK-87である。

[平瓦] (第48図284~286、図版32)

284は凹凸面共に斜めコビキがみられ、凹面に布目、凸面に格子目叩きの他、離れ砂がみられる。285は凹凸面に斜めコビキと離れ砂、凹面の一部に布目とタテ方向のナデが施されている。また狭端部は面取り調整である。286の凹面はタテ方向のナデ調整であり、凹凸面共に斜めコビキと離れ砂がみられる。



第48図 遺物実測図28

出土位置は284がSK-118、285はSD-14、286はSK-23である。

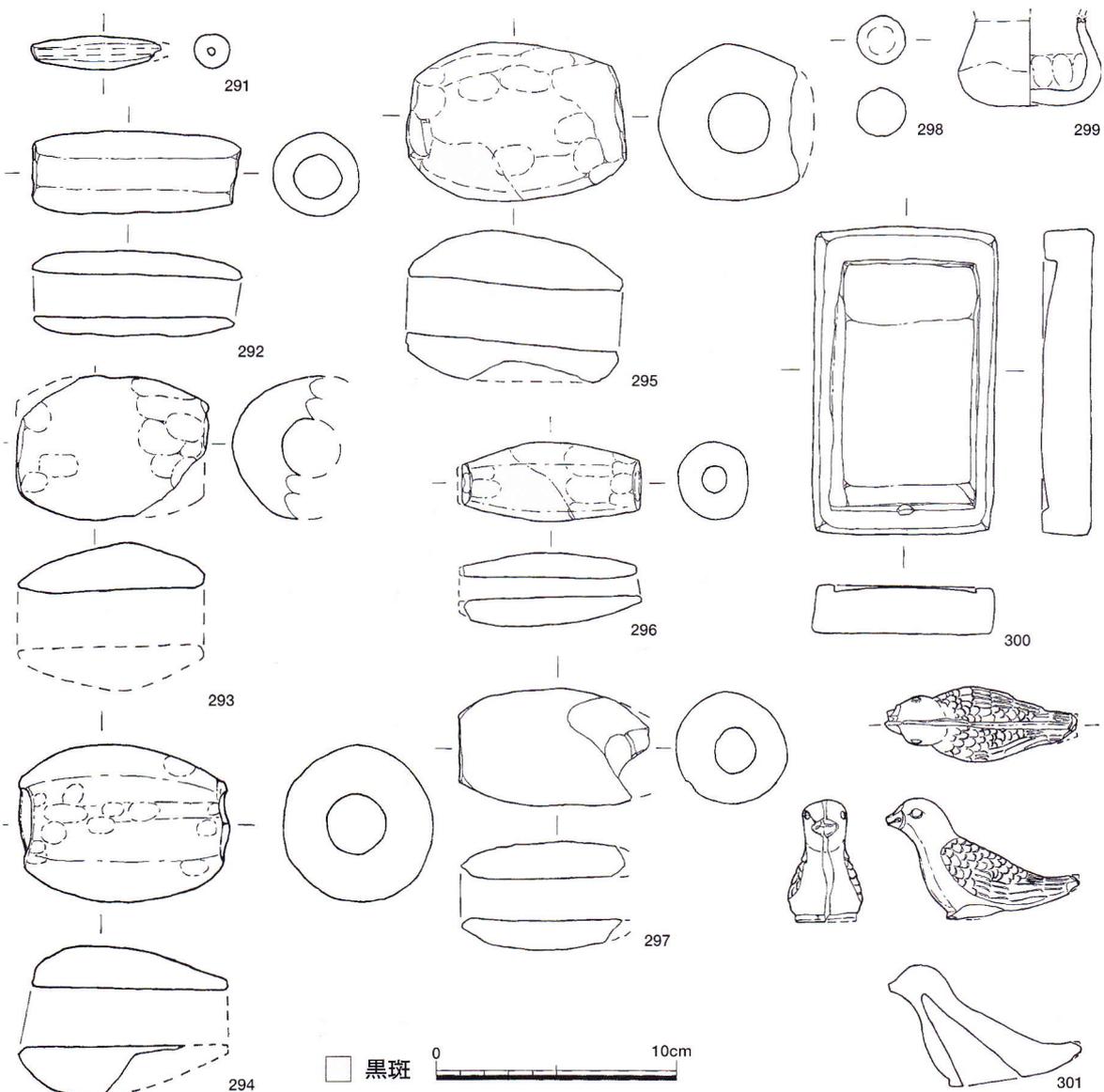
[道具瓦] (第48図287~290、図版32)

287は鬼瓦の一部とみられる。厚さは3.0cmで、表面には型押しされた巴文とその周囲に六角形の型に珠文を表したスタンプで文様構成されるものである。288は雁振瓦である。凹凸面共に離れ砂がみられ、凸面について、丸瓦部はヨコナデ、鱗部はタテ方向のナデ調整が施されている。289・290は棟込瓦とみられる。厚さは1.0cm前後である。289は凹面に斜めコビキと布目、凸面には斜めコビキとナデ調整がみられる。290は凹面に1.5cm単位のタテ方向のナデと一部に布目、凸面には斜めコビキとナデ、木口はヨコ方向のナデ調整がみられる。

出土位置は287・288がSD-12、289・290はSD-30である。

(7) 土製品・瓦製品 (第49図291~301、図版33)

291~297は管状土錘である。291~295は土師質、296・297は瓦質のものである。291は残存長5.4cm、



第49図 遺物実測図29

最大径1.5cm、孔径3.5mm、重量9.9gで、共伴遺物から、古墳時代のものとみられる。292は長さ8.7cm、最大径3.4cm、孔径1.8cm、重量90.4gである。293は長さ8.0cm、復元最大径6.0cm、復元孔径2.3cm、残存重量126.8gである。294は長さ8.7cm、最大径6.5cm、孔径2.5cm、残存重量250gである。295は一部に黒斑がみられ、長さ9.1cm、最大径6.5cm、孔径2.5cm、残存重量300gである。296は残存長7.5cm、最大径3.0cm、孔径1.0cm、残存重量62.4gである。297は残存長6.8cm、最大径4.7cm、孔径1.8cm、重量129.3gである。全体は指オサエ調整である。これらは共伴遺物からみて、鎌倉時代から室町時代までのものとみられる。

298は直径2.0cm、重量8.2gの土師質の土玉で、全体に丁寧なミガキ調整が施されている。共伴遺物から、古墳時代のものとみられる。

299は土師器壺のミニチュアである。手づくね成形で、残存高3.7cmを測る。古墳時代のものと考えられる。

300は瓦製の硯である。内面の角部分は、ヘラ切り及びヘラケズリにより成形され、仕上げはナデ調整である。陸部から海部は平滑である。底面の一部には離れ砂がみられ、重量は320gである。共伴遺物からみて、鎌倉時代から室町時代までのものとみられる。

301は鳥形の土人形である。2つの型を合わせて成形したもので、内部は中空である。表面にはキラコの付着がみられる。嘴に黒色、また全体に施されていたと考えられる赤色の彩色が部分的にみられ、江戸時代のものと考えられる。

出土位置は291がSK-69、292はSK-27、293はSE-3、294はSE-2、295・296・300はSD-12、297はSD-8、298はSB-1、299はSK-7、301はSE-5である。

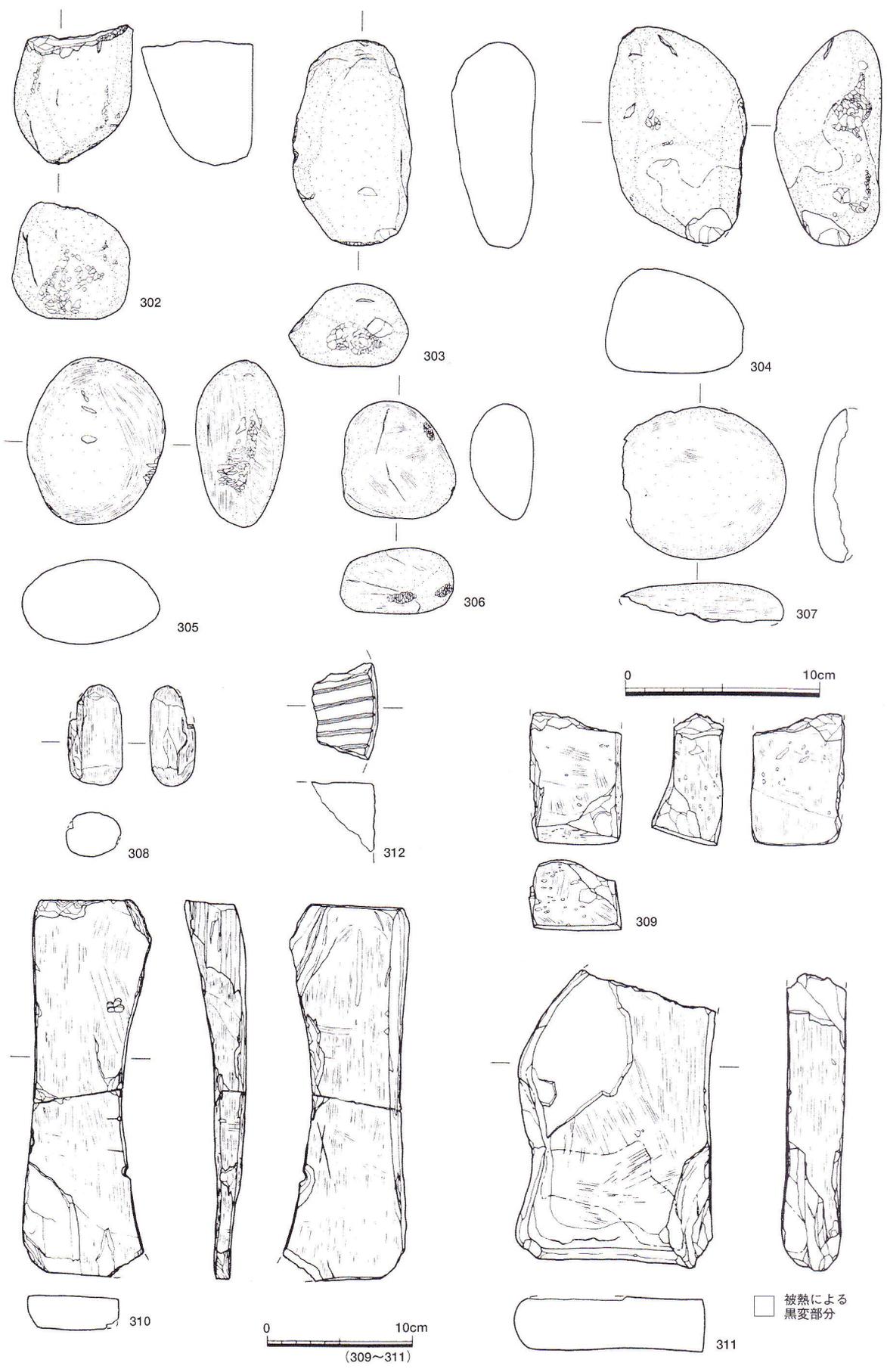
(8) 石器・石製品・石造物

[石器] (第50図302~308、図版33)

302~304は叩石である。302・304は砂岩の川原石を、303は花崗岩系の川原石を石材として使用している。302は全長6.5cm、幅6.0cm、厚さ6.0cmのもので、重量は340gであり、先端部に明瞭な敲打痕を残す。また自然面に光沢があり、平滑になっていることから磨石にも使用された可能性が考えられる。303は全長10.7cm、幅6.1cm、厚さ4.3cmのもので、重量は410gである。両端部と左側面に敲打痕が観察できる。304は全長11.7cm、幅7.2cm、厚さ5.5cmのもので、重量は590gであり、下端部の一部が欠失している。右側面に幅広の明瞭な敲打痕を残し、他に上端部や上端面にも敲打痕が観察できる。また下端部を中心に被熱によるとみられる黒変部分がみられる。

305・306は砂岩の川原石を用いた叩石と磨石の複合石器である。305は全長8.7cm、幅7.0cm、厚さ4.5cmのもので、重量は370gである。右側面に敲打痕が、周囲に磨痕が確認できる。306は全長6.0cm、幅5.9cm、厚さ3.5cmのもので、重量は170gの比較的小型のものである。周囲の側縁部には部分的に敲打痕がみられ、その一部が暗赤褐色になっていることから顔料の付着とも考えられる。また、ほぼ全面に磨痕がみられ、やや光沢がある。

307は濃紫色の不明石材を使用した磨石である。法量は残存長8.5cm、幅8.0cm、厚さ2.0cm、重量155gで円盤状を呈し、1/2程度が欠失している。残存部の全面に磨痕があり、光沢をもっている。308は結晶片岩を用いた棒状の磨石である。法量は全長5.2cm、幅2.8cm、厚さ2.3cmで、重量は47gである。



第50図 遺物実測図30

両端部は使用のため丸くなっている。

これらの出土位置は、302がSK-54、303がSK-141、304がSK-87、305がSD-29、306・308がSK-69、307がSD-12である。

[石製品] (第50図309~312、図版33・34)

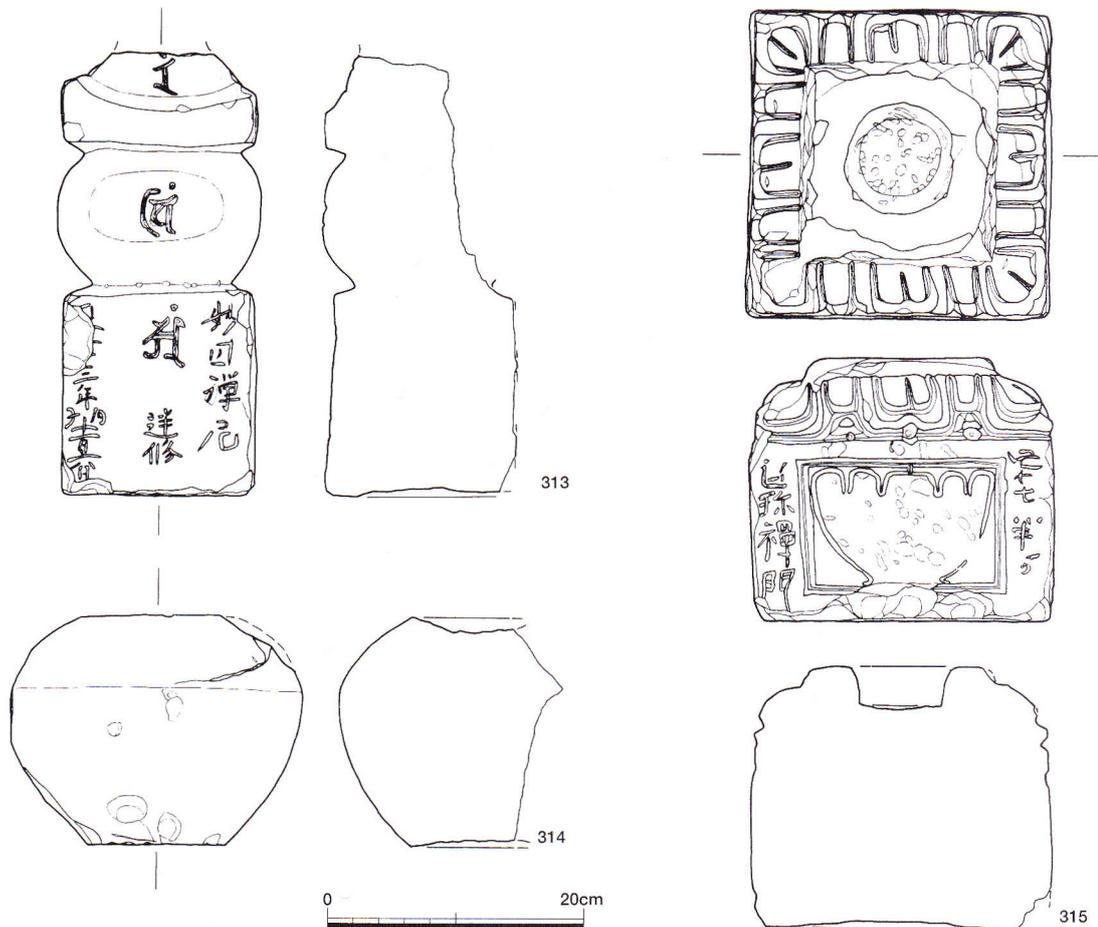
309~311は砥石である。309は流紋岩系の石材とみられるもので、残存長9.2cm、幅6.3cm、厚さ3.2~4.8cmを測り、重量は380gである。破損部を除いて残存部5面とも研磨痕が明瞭で、使用のため上面が凹んでいる。310は滑石製のもので、全長26.3cm、幅6.1~8.2cm、厚さ0.8~3.5cmを測り、重量は850gである。両端面は鋸を使用して切断したとみられる筋状の痕跡が残り、他の4面はタテ方向を基本とした使用痕が観察できる。311は扁平な砂岩の自然石を用いたもので、全長20.2cm、幅13.6cm、厚さ4.1cmを測り、重量は1.89kgである。表裏面と右側面を研磨面として使用している。

312は砂岩を石材として使用した茶臼白部の破片で、下臼と考えられる。磨面にあたる上面には使用による光沢が顕著にみられる。

これらの出土位置は、309・310がSE-5内部の第3層、311がSK-87、312がSD-14である。

[石造物] (第51図313~315、図版34)

313は砂岩を石材として使用した一石五輪塔で、残存高34.5cm、地輪幅15.0cm、地輪高15.6cm、地輪厚14.5cm、重量11.7kgの法量をもつ。この五輪塔は空・風輪と火・水輪の裏面約1/2が欠損している



第51図 遺物実測図31

る。残存部は全体的に丁寧なノミ加工が確認できるが、底面の中央部は粗加工のままの状態で窪んでいる。この底面の状況からみて、この五輪塔は地上に設置させていたものと考えられる。梵字は正面にあたる一面にのみ施されており、比較的彫りが深い。また地輪部には梵字の右側から戒名とみられる「妙圓禪尼 逆修」の文字が、左側には没年とみられる「□□□三年丙子十一月六日」の文字が刻まれている。この干支と残存する年号の一部から考えて、この五輪塔の年号は永正十三(1516)年の可能性が高いものと思われる。

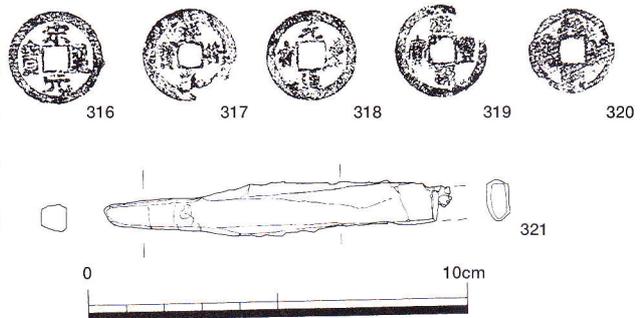
314は砂岩を石材として使用した五輪塔の水輪である。全体の約1/2が破損しており、残存部では梵字が確認できない。法量は、高さ17.8cm、最大径22.7cm、重量9.3kgで、中位よりやや上部に最大径をもつ。側面にあたる周囲は丁寧なノミ加工が行われているが、上面と下面は粗加工のまま窪んでいる。

315も砂岩を石材として使用した宝篋印塔の基礎である。法量は、高さ20.5cm、幅23.5cm、厚さ24.0cm、重量25.1kgである。上部には反花が表現され、その下部には4面とも格狭間が刻まれている。その1面には格狭間の右側に年号とみられる「□□七年□」の文字が、左側には戒名とみられる「□弥禅門」の文字が刻まれている。また上面中央には直径8.5cm、深さ3.3cmの柄孔が彫り込まれ、ノミの加工痕が明瞭に観察できる。柄孔の周囲は磨滅によるとみられる平滑面が形成されている。

これらの出土位置は、313がSE-5の石組内、314がSE-5内部の第3b層、315がSK-45である。

(9) 金属製品 (第52図316~321、図版34)

金属製品には銭貨や刀子などがある。316~319の銭貨は中国の北宋銭である。316は初鑄960年の宗通元寶、317は初鑄1009年の祥符元寶で、銭文は真書である。318・319は初鑄1078年の元豐通寶である。318の銭文は行書、319は篆書である。法量は直径2.4cm、厚さ1mmであるが、319の厚さは1.5mmとやや厚みをもつものである。また重量は316が2.9g、317は2.4g、318・319は3.4gである。なお、320は銭文の判読はできなかったが、裏面が平らで、輪や内郭の痕跡がないなどの特徴から模鑄銭の可能性が



第52図 遺物実測図32

ある。法量は直径2.3cm、厚さ0.8mm、重量1.2gである。

321は鉄製の刀子とみられる。法量は長さ9.1cm、厚さ7mm、重量14.1gである。

出土位置は316・317・319・320がSD-12、318はSE-1、321はSK-51である。

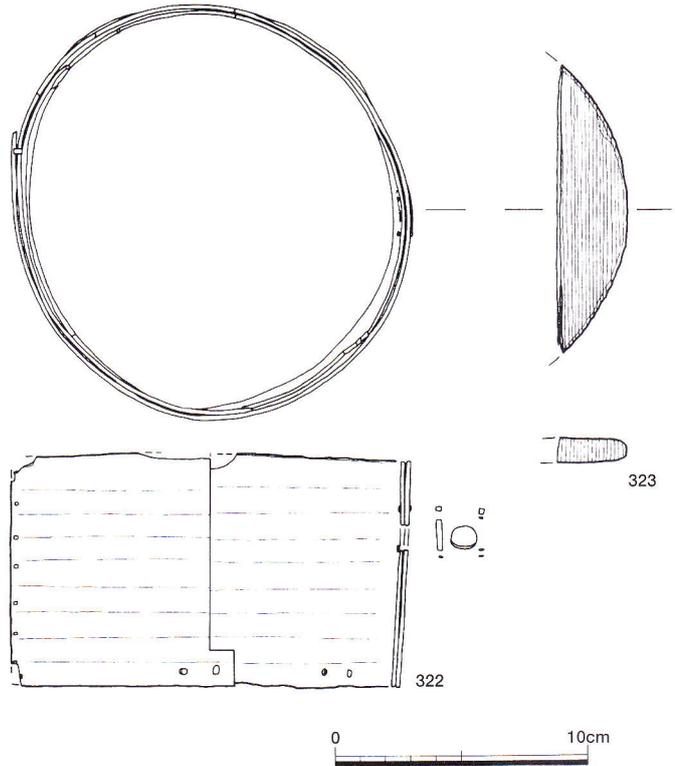
(10) 木製品 (第53図322・323、図版34)

322は柾目材の薄板を桜皮の紐で綴じ合わせて作った曲物である。法量は、高さ9.3cm、口径15.7~16.5cmで、上部がやや破損しているものとみられる。底部周辺には底板を接合した釘孔が2ヶ所を一对として、5ヶ所確認できる。また体部上位には、柄を装着したとみられる径1.0cmの孔が開けられていることから、柄杓の筒部とも考えられる。323は厚さ1.0cmの底板の残片である。この底板の復元径は15.4cmで、曲物(322)の底板の可能性が高い。この2点はSE-1aの内部から出土したも

ので、他には網代の残片がある。

(11) 自然遺物

今回の調査で出土した自然遺物には、桃核や骨(馬歯等)などがある。桃核はSD-12から一定量出土した他、SE-1aの内部からも少量出土した。馬歯は粉砕した頭骨片とともにSK-61から一定量出土した他、SK-80から保存状況の良い白歯が出土した(図版34)。



7. まとめ

(1) 遺構の変遷について

今回の調査における重要な成果として挙げられることは、南側に近接する第8次調査との関係から当調査

地周辺の微高地部の南北幅が確定できたことにある。第8次調査では、座標軸X=-196650mライン付近において江戸時代中期に埋没した幅3.2m、深さ1.2m、総延長38.0mの東西方向の溝を検出し、この溝を境として最大90cm程度の比高差があり、特に南東部に向かって緩やかに下降する地形を成していることを確認していた。この調査区の南東部には弥生時代前期に埋没した幅9.0m以上、深さ1.8mを測る自然流路と埋没後に掘削された古墳時代を中心とする溝群があり、当遺跡における集落の縁辺部に位置することが考えられた。調査区の北半部にあたる微高地部では、弥生時代前期から江戸時代にかけての多数の遺構を検出し、集落の中心部であったことを裏付ける成果を得ている。今回の調査では、座標軸X=-196608mライン付近において幅4~5m、深さ1.3mを測る鎌倉時代の東西方向の溝(SD-12)を検出し、この溝を境として50cm程度の比高差をもって南側が微高地部となることを確認した。この2条の溝は、約40mの幅をもってほぼ平行にのびるもので、微高地の南北を画する位置に掘削されたものと考えられる。また今回の調査では、北半部の微低地部において平安時代後期以前の遺構がほとんど検出されなかったことと、南半部の微高地部における竪穴住居等の遺存状態が極めて悪かったことなどを考え合わせると、微高地部も含めて平安時代後期頃に土地の改変が行われたことを示すものといえよう。

次に遺構の変遷をたどると、まず弥生時代の遺構では、第1区の北端部で検出したSK-19や第2区の南端部で検出したSK-109・P-526などがある。SK-19やP-526からは、完形の広口壺などが出土しており、これらは壺棺の可能性が考えられる。第8次調査では、石器製作に関わるとみられる土坑などを検出しており、ともに弥生時代前期(紀伊第I様式)に限られる集落の一端を示す成果といえる。

弥生時代から古墳時代の過渡期にあたる庄内式併行期の遺構は、調査区南半部の微高地部を中心

第53図 遺物実測図33

として竪穴住居3棟(SB-1~3)、井戸1基(SE-4)などを検出した。中でもSB-1は、東西7.8m、南北5.2m以上の大型竪穴住居であり、方形住居としては紀ノ川北岸の丘陵上に所在する府中IV遺跡検出の大型住居(東西7.7m、南北8.6m)に類似する規模を有し、和歌山平野域では最大規模のものとして重要である。古墳時代の遺構は、前期の布留式併行期に比定できるものとして井戸1基(SE-6)、土坑1基(SK-89)などを、中期のものとして溝1条(SD-16)や土坑1基(SK-91)などを、後期のものとして土坑1基(SK-69)などを検出した。これらの覆土内からは多量の土器が出土し、特にSE-6やSK-89・69は土器を用いた祭祀が行われていたことを示すものである。同様に、第8次調査においても土器祭祀と考えられる前期の井戸2基があり、祭祀行為の事例として重要視すべきものといえる。この時期の竪穴住居は、西側100mに位置する第4次調査において2棟検出しており、当調査地から西方一帯にその分布が推定できる。また日前・国懸神宮の西側で検出された前期の前方後円墳1基や後期にかけての方墳7基、甕棺墓1基などから古墳時代の墓域は、同神宮の西側に位置することが明確であり、遺跡内の東側に居住域が、西側に墓域が展開していたものといえよう。

奈良時代から平安時代にかけての遺構は、奈良時代のものとして第1区南端において検出した土坑2基(SK-54・75)、第2区南半部において検出した溝1条(SD-32)や土坑(SK-100)などがあり、また平安時代のものとして第1区北半部で検出した井戸(SE-2)や、第2区南半部で検出した土坑(SK-102・106)などがある。しかし、他の時期と比較すると全体量は希薄であり、第8次調査成果をみても同様のことがいえる。ただし、大量に出土した瓦類が平安時代後期に比定できるものが多く、平安時代後期に日前・国懸神宮の東側に建立されたと伝えられる「神宮寺」に係する遺物群として注目できるものである。また神宮の西側には「貞福寺」が存在したとされ、この西側の調査では、平安時代後期の溝で区画された屋敷地や同時期に比定できる膨大な量の土器類が検出されている。

鎌倉時代の遺構は、他の時期に比べ最も多く検出し、この様相は第8次調査時にも同様の成果を得ている。特筆すべき遺構には、調査区中央部を東西に貫く大溝(SD-12)やSD-12に直交して取り付く溝(SD-8)がある。これらの溝からは土師器・瓦器など膨大な量の土器が出土し、時期的に後期に比定できるものが大半をしめる。特に、土師器には大・中・小の皿の他、脚台付皿や盤などの特殊な器形が一定量含まれ、土器以外では、瓦製の硯が1点出土していることなど、日前・国懸神宮に近接する地域の一様相を示すものといえよう。またSD-12の南側において検出した溝7条(SD-13・14・28~31・45)はSD-12に平行して掘削されたもので、関連性のあるものとして捉えられる。この中で、SD-14は大量の瓦で埋没しているもので、重なり合って出土した瓦には平安時代のもので鎌倉時代のもので混在する状況であった。これらのことから、第8次調査でも指摘したように、少なくとも鎌倉時代後期まで「神宮寺」が存在していた可能性が考えられる。この他、井戸では石組で2度の造り替えがみられたSE-1や素掘り状に掘削されたSE-3がある。また土坑では、瓦溜状のもの(SK-58・118)の他、調査区北半部の微低地部を中心として比較的大規模に掘削された土坑(SK-27・28・39・130)などを多数検出し、平安時代後期以降連綿とした遺物の出土が認められる。

室町時代の遺構は、第1区の北半部において検出した土坑2基(SK-4・23)やタメマス状の遺

構（SK-30）、第2区北半部において検出した石組井戸（SE-5）などがある。SE-5は後期に構築されたもので、石組内には一石五輪塔が石材として転用されていた。この井戸は、内部から出土した陶磁器等によって江戸時代中期まで使用されていたことが明らかである。また、先述の鎌倉時代のSD-12の最上層である第1a層には室町時代の遺物が含まれており、SD-8やSE-1などとともにこの時代まで使用されていたものと考えられる。

江戸時代の遺構は、調査区ほぼ全域に土坑を中心として多数検出した。中でも調査区南半部の微高地部において、土葬墓と考えられる土坑（SK-61）を1基検出し、江戸時代前期における墓の存在を確認した。冒頭でもふれた通り第8次調査では、東西方向の大溝を検出し、この溝に排水するとみられる直交する方向の溝なども確認している。遺物では、今回の調査を含め後期に比定できる多数の瓦が出土し、当地周辺に瓦葺きの建物が存在していたものと考えられる。

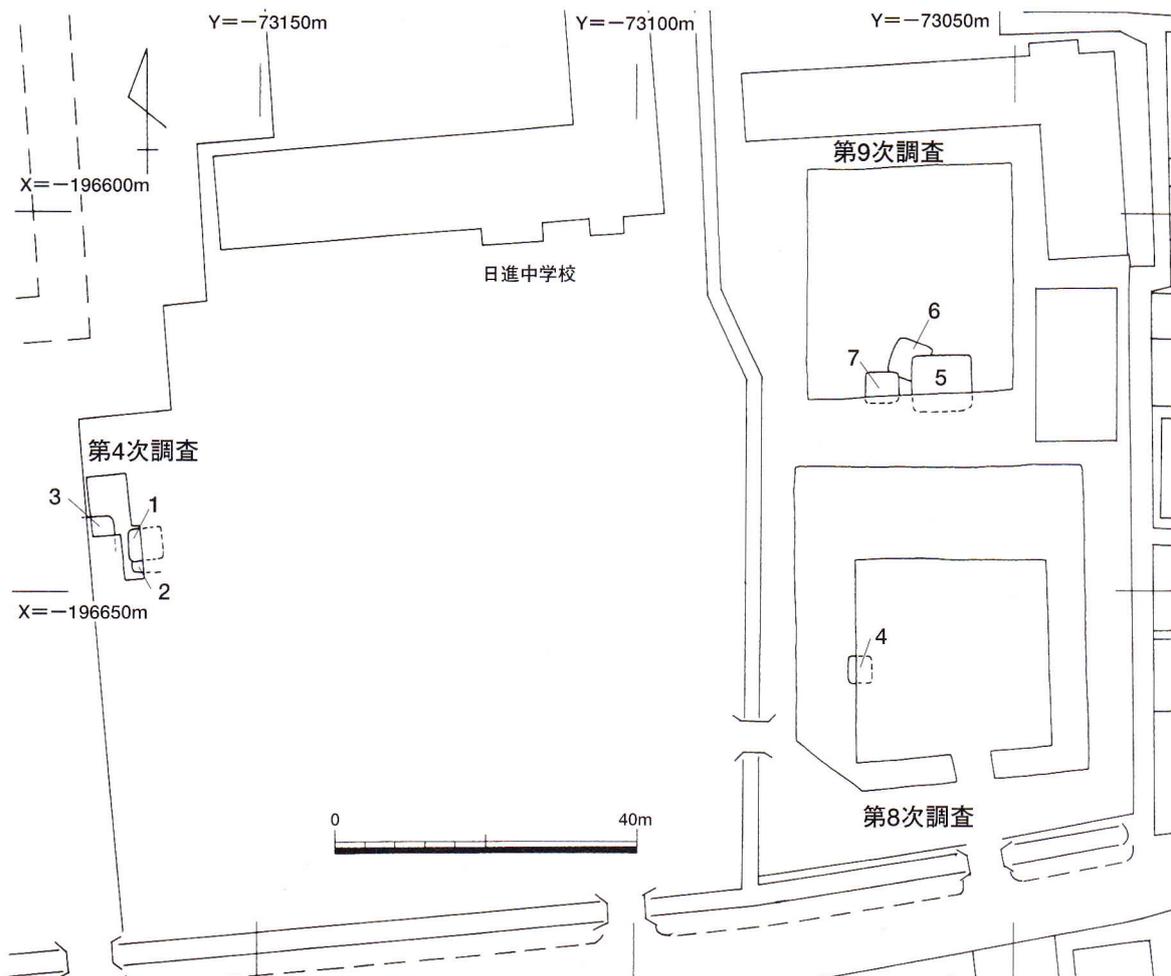
以上のことから、第8次調査を含め秋月遺跡における東縁辺部の様相がさらに明確になり、当地が特に遺構の密集する地域であることが判明した。これらの成果から、弥生時代では前期に限られる集落が存在し、次いで古墳時代初頭から古墳時代を通して本格的に集落が形成される。この時期の集落は、遺跡の東西によって居住域と墓域が分けられる。また平安時代から鎌倉時代にかけては、遺跡西部では平安時代後期に、遺跡東部では鎌倉時代後期にそれぞれ盛期がみられるものといえよう。

（2）秋月遺跡検出の竪穴住居について

秋月遺跡では、これまで4棟の竪穴住居が確認されていた。今次の調査において新たに3棟の竪穴住居を検出し、古墳時代初頭から古墳時代を通じた集落の様相が明確になりつつある。ここでは、当遺跡でこれまで検出された竪穴住居について整理を行う（第54図）。

当遺跡では、西側100mに位置する第4次調査において古墳時代前期のものが2棟、中期から後期にかけてのものが1棟検出されていた。前期段階のものは、ともに方形プランのもので、この内の1棟が南北約4.3mと判明している。中期から後期にかけてのものは、北東コーナー部を検出したに過ぎないが、隅円方形のプランで、壁溝をもたない特徴がある。また南側近接地の第8次調査では、古墳時代中期から後期にかけての方形竪穴住居1棟を検出しており、南北3.4mの規模であったことを確認している。この住居は拡張による建て替えがみられるもので、古段階のものは南北2.3mと規模が小さく壁溝をもたないものである。今回の調査において検出した竪穴住居は、古墳時代初頭のもの3棟あり、最も古い時期のSB-2は、東西5.2m、南北5.1mのやや隅円方形プランのものである。次いで、SB-1は東西7.8m、南北5.2m以上の大型住居、SB-3が東西4.2m、南北3.0m以上のもので、ともに方形プランである。

以上の住居からみて、その構造が判明しているものは、古墳時代前期段階のものではすべて主柱が4本で、床面中央に炉をもち、壁溝が周囲に巡る形態のものといえる。また古墳時代中期以降のものについては、壁溝をもたないものが存在するという特徴がある。規模的にみれば、大型住居を除いても古い時期のものの方が比較的大きく、時期が下るにつれて小さくなっていく傾向がみられるものといえる。



第54図 秋月遺跡検出の竪穴住居位置図

竪穴住居一覧表

番号	調査回数	時期	平面形	規模 (東西×南北m)	主柱の 復元数	壁溝	炉	貯蔵穴	備考
1	第4次調査	古墳時代前期	方形	1.7以上×4.3	4	○			
2	第4次調査	古墳時代前期	方形	1.6以上×1.5以上	4	○			
3	第4次調査	古墳時代中～後期	隅円方形	2.8以上×2.7以上	4				
4a	第8次調査	古墳時代中～後期	方形	1.0以上×3.4		○			拡張後の住居
4b	第8次調査	古墳時代中期	方形	0.5以上×2.3	4				古段階の住居
5	第9次調査	古墳時代前期	方形	7.8×5.2以上	4	○	○	○	ベッド状遺構
6	第9次調査	古墳時代前期	隅円方形	5.2×5.1	4		○		
7	第9次調査	古墳時代前期	方形	4.2×3.0以上	4		○	○	

【参考文献】

- 『秋月遺跡現地説明会資料—日進中学校体育倉庫建築に伴う発掘調査について—』 和歌山市教育委員会 1987年
- 『秋月遺跡第6次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1998年
- 『秋月遺跡第8次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 2000年
- 『府中IV遺跡第2次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1996年
- 『秋月遺跡』(財)和歌山県文化財センター 1994年

報 告 書 抄 録

ふりがな	あきづきいせきだいりじほくつちようさがいほう							
書名	秋月遺跡第9次発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書							
シリーズ番号	第34集							
編著者名	井馬好英・奥村 薫							
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団							
所在地	〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 073-435-1195							
発行年月日	西暦 2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市 町 村	遺 跡 番 号					
あきづきいせき 秋月遺跡	わかみやまけん 和歌山県 わかみやまし 和歌山市 あきづき 秋月	3020150	331	34°	135°	20010925	800	校舎 建設
				13′	12′	20020329		
29″	24″							
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
秋月遺跡	集落跡	弥生時代 ） 江戸時代	弥生時代前期 の土器棺墓 古墳時代前期 の竪穴住居 古墳時代の祭 祀関連土杭 鎌倉時代の 大溝・井戸	弥生土器・土師 器・須恵器・黒色 土器・中世土師 器・中世須恵器・ 輸入磁器・国産陶 磁器・瓦・土製品・ 石器・石製品・石 造物・金属製品・ 自然遺物	古墳時代前期の 大型住居を確認。 鎌倉時代の地割 に関する大溝を 検出。			

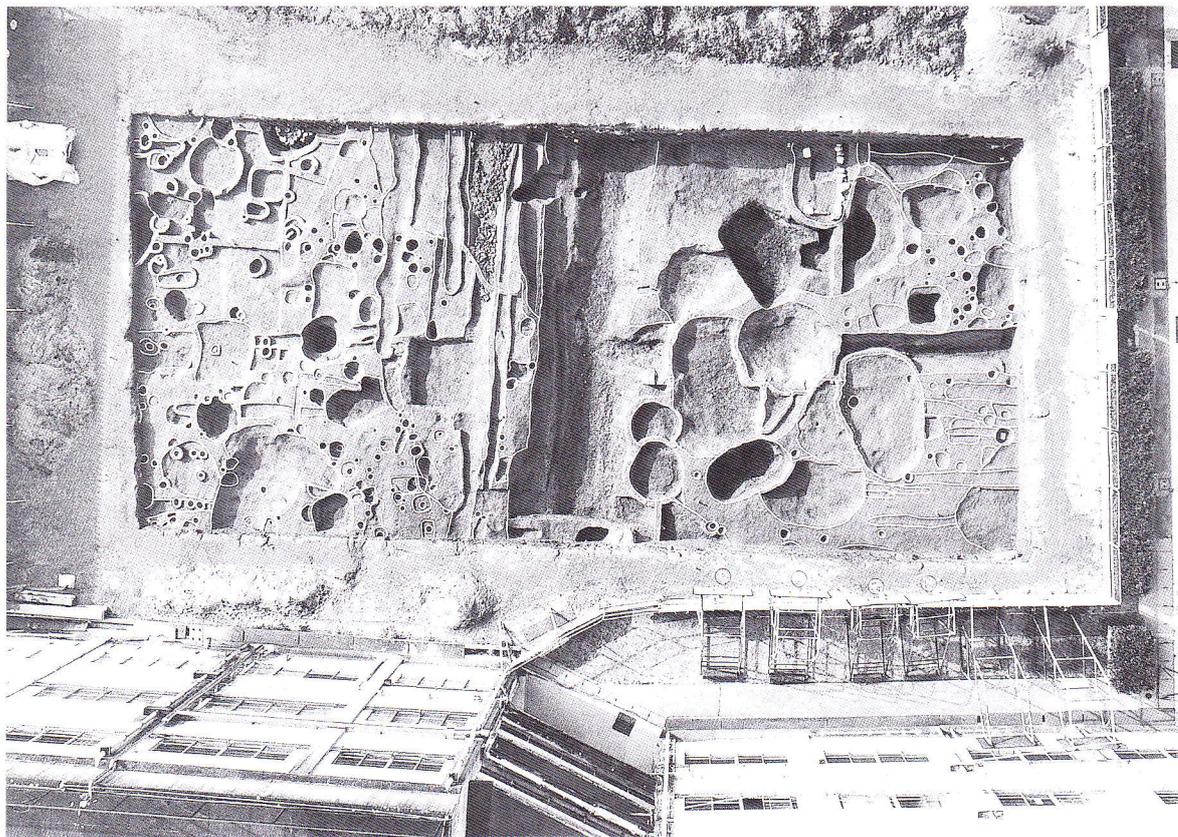
版 圖



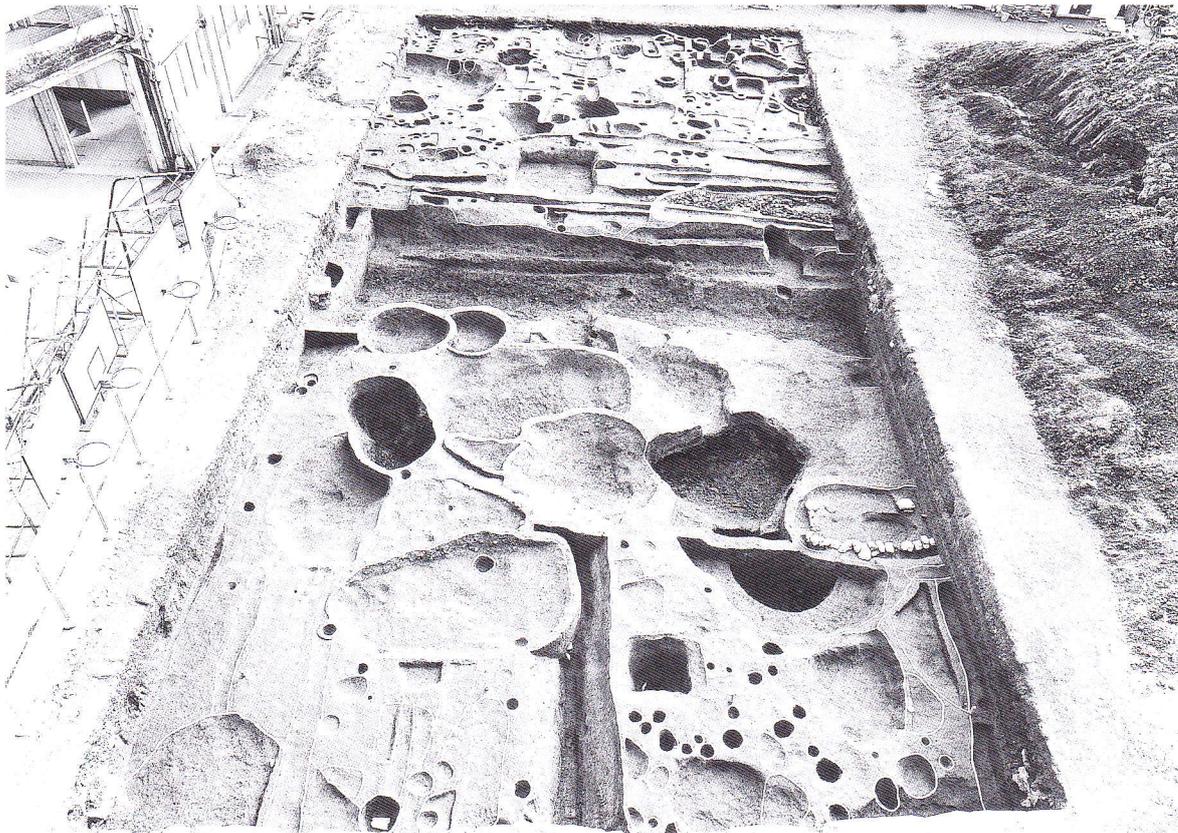
調査前の状況（北西から）



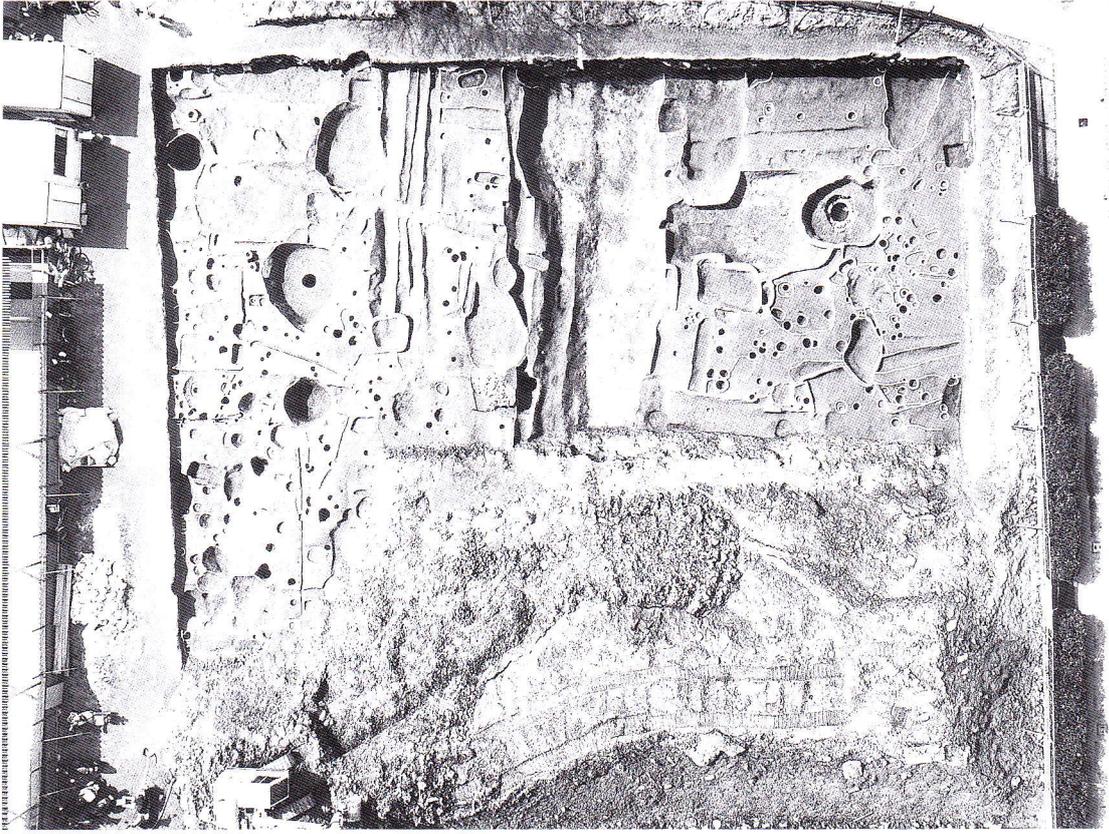
調査地近景（西から）



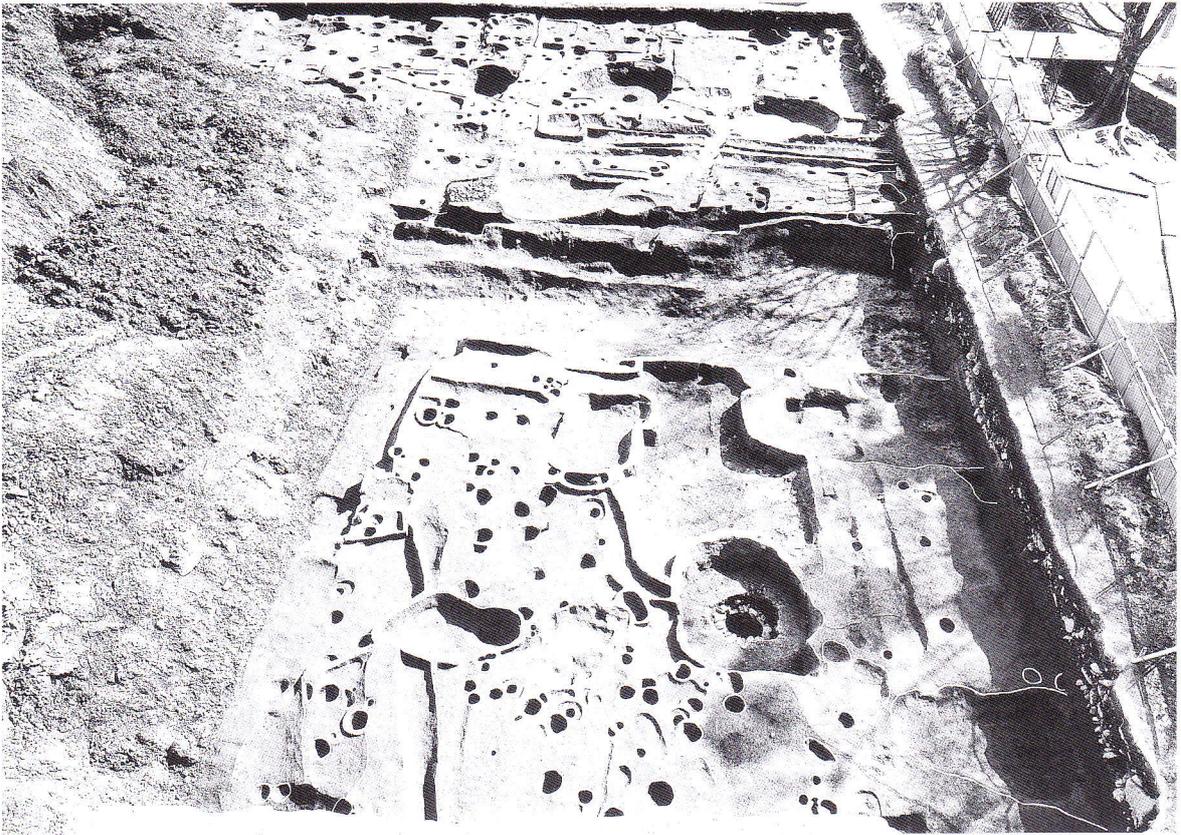
第1区 全景 (右が北)



第1区 全景 (北から)



第2区 全景 (右が北)



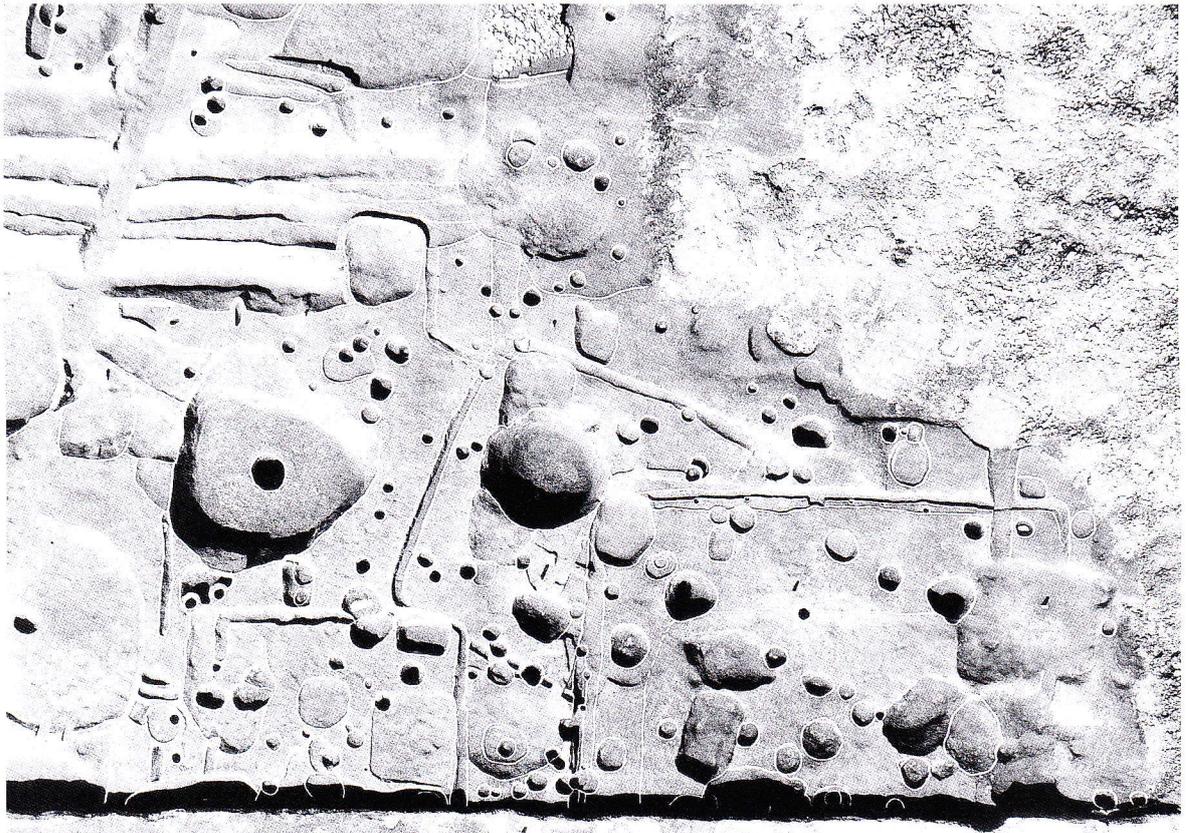
第2区 全景 (北から)



第2区 P-526遺物出土状況（北西から）



第1区 SE-4（西から）



第1・2区 SB-1~3 (上が北)



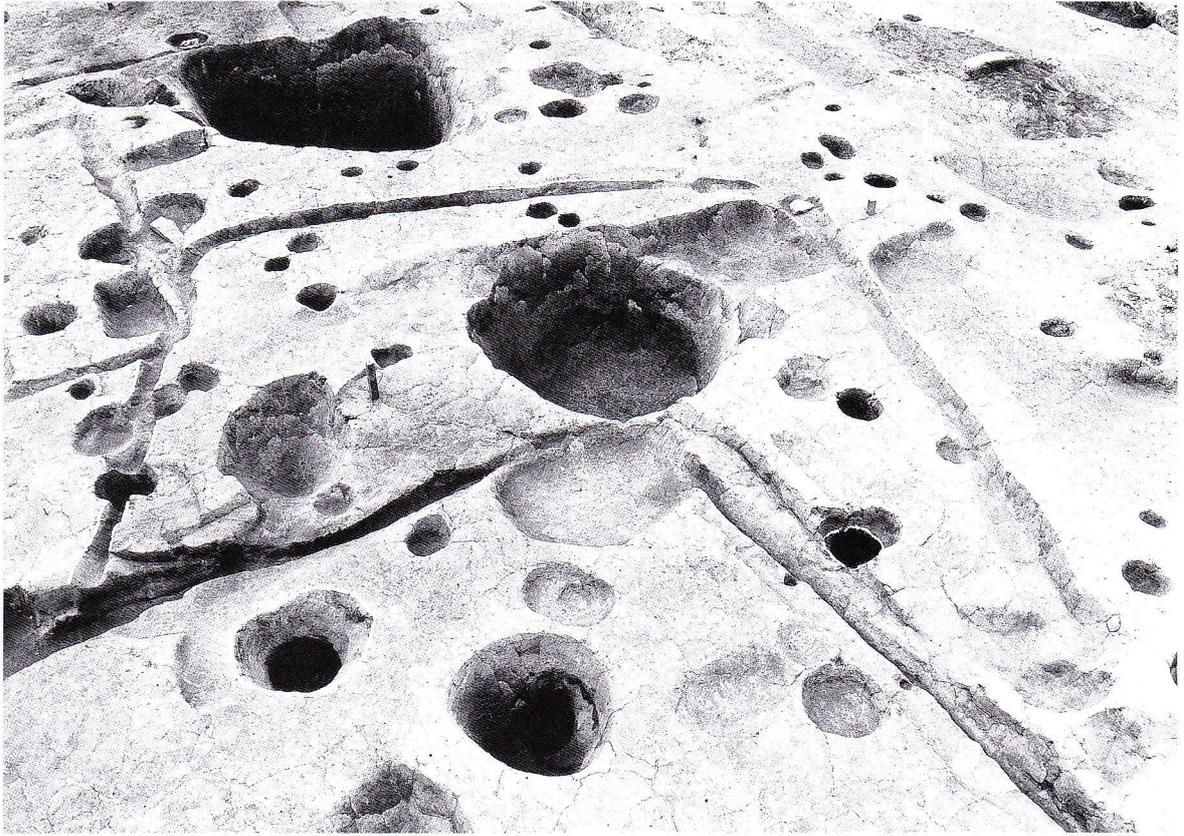
第1区 SB-1 (北から)



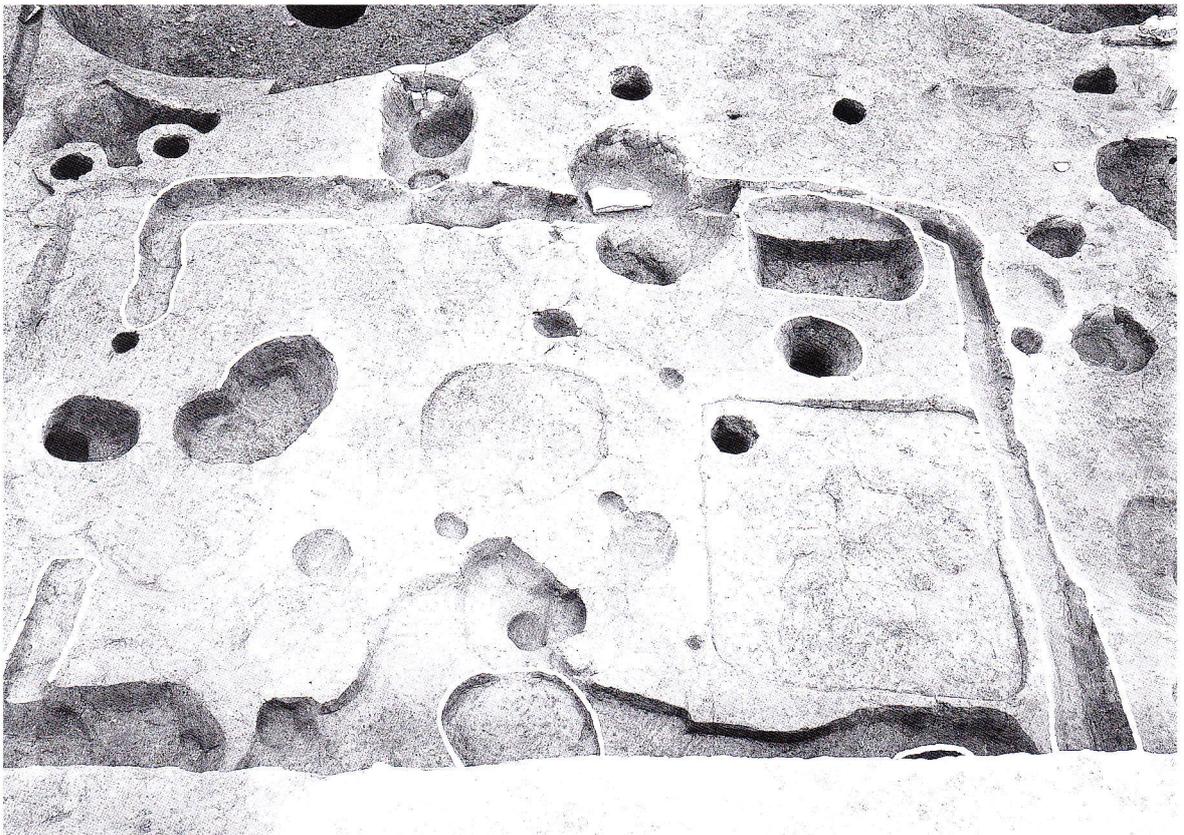
第1区 SB-1 土層堆積状況（東から）



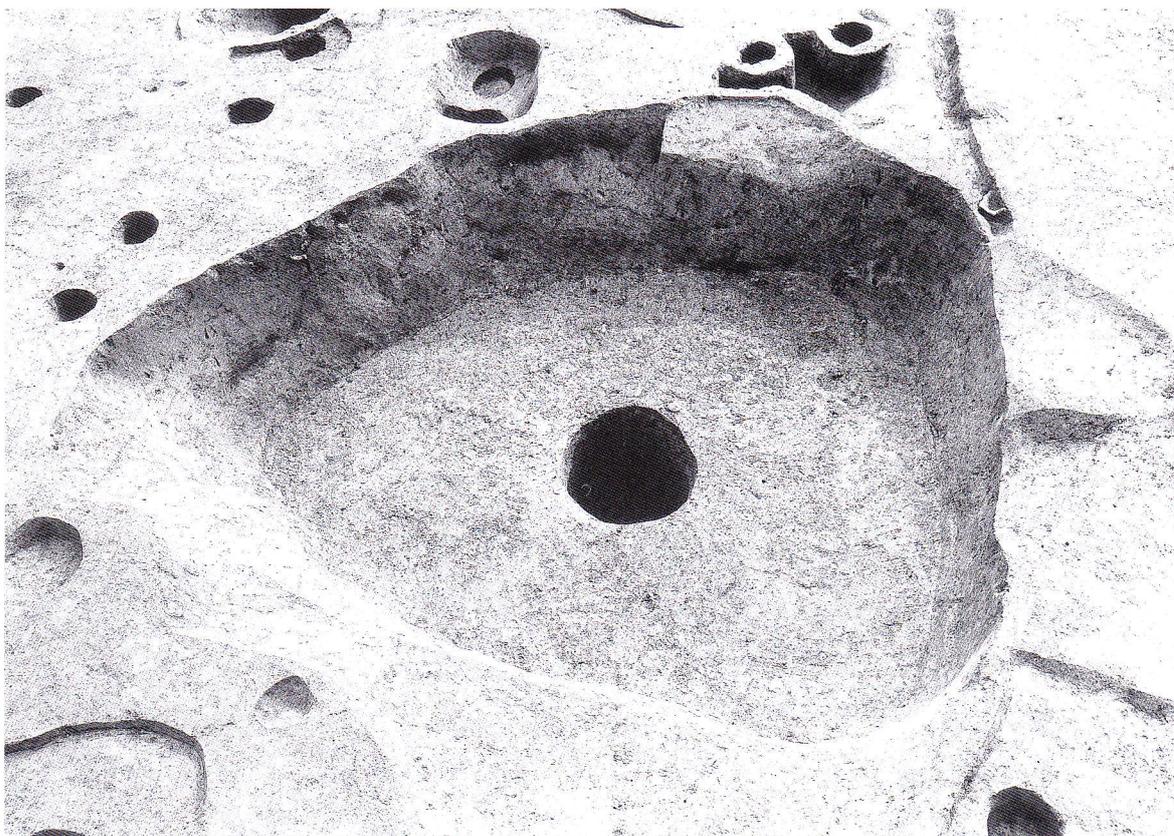
第1区 SB-1 炉土層堆積状況（東から）



第1・2区 SB-2 (南東から)



第2区 SB-3 (南から)



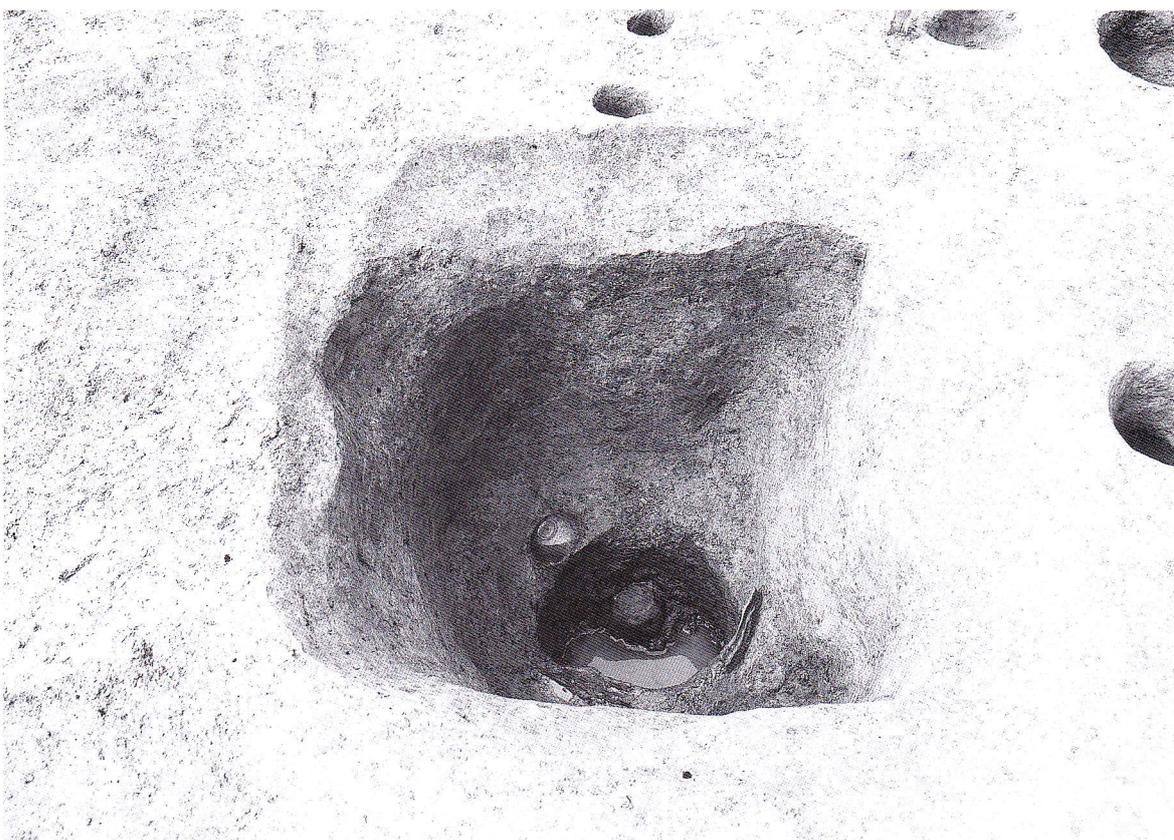
第2区 SE-6 (東から)



第1区 SK-69 (北東から)



第1区 SK-75 (北から)



第1区 SE-2 (東から)



第1区 SE-3 (東から)



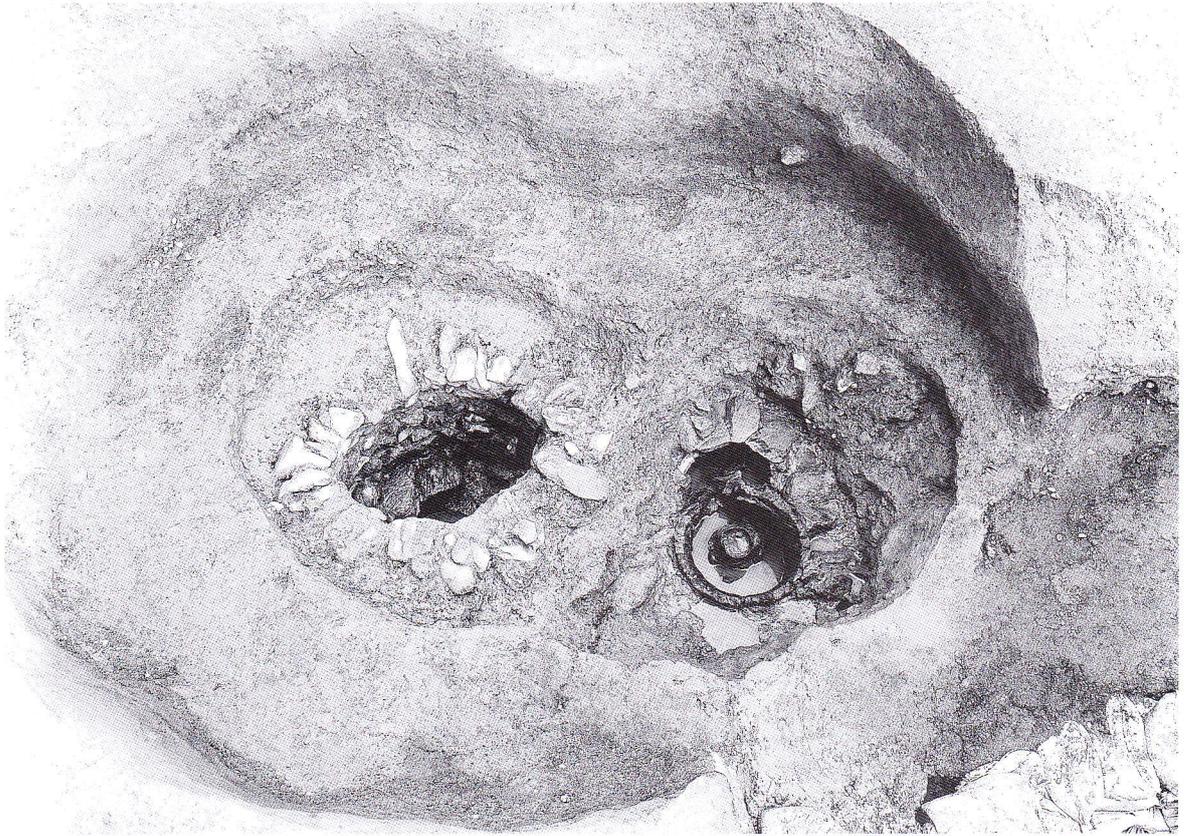
第1区 SD-8・12 (南から)



第1区 SD-7・8土層堆積状況（北から）



第1区 SD-12土層堆積状況（西から）



第1区 SE-1 (南西から)



第1区 SE-1c (南から)



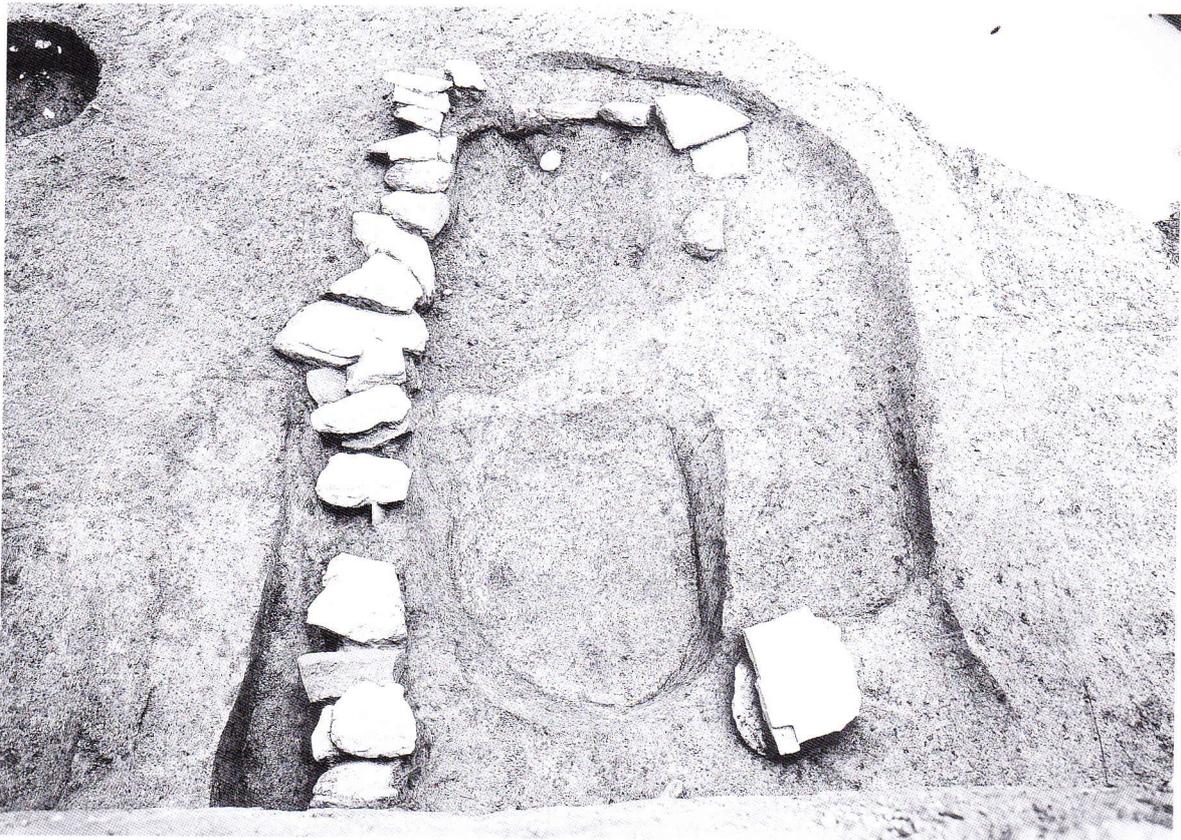
第1区 SD-14遺物出土状況（西から）



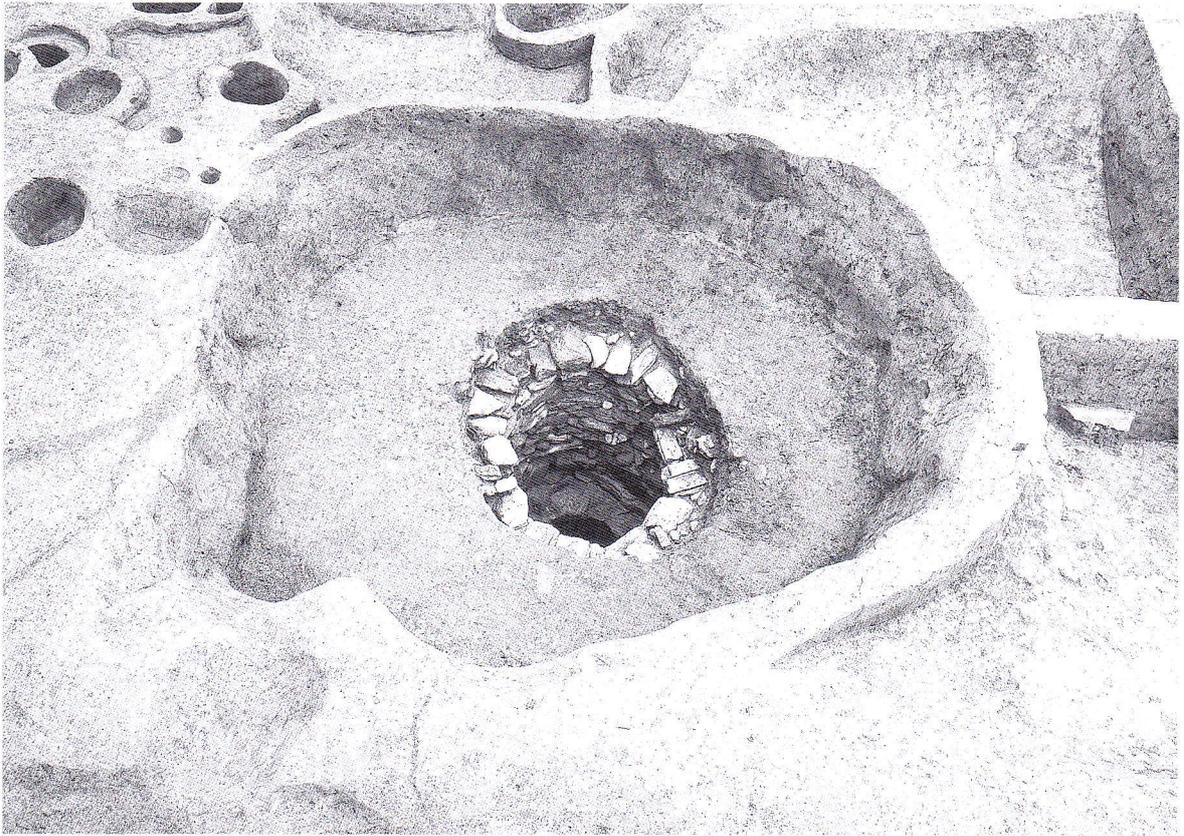
第2区 SK-118遺物出土状況（北から）



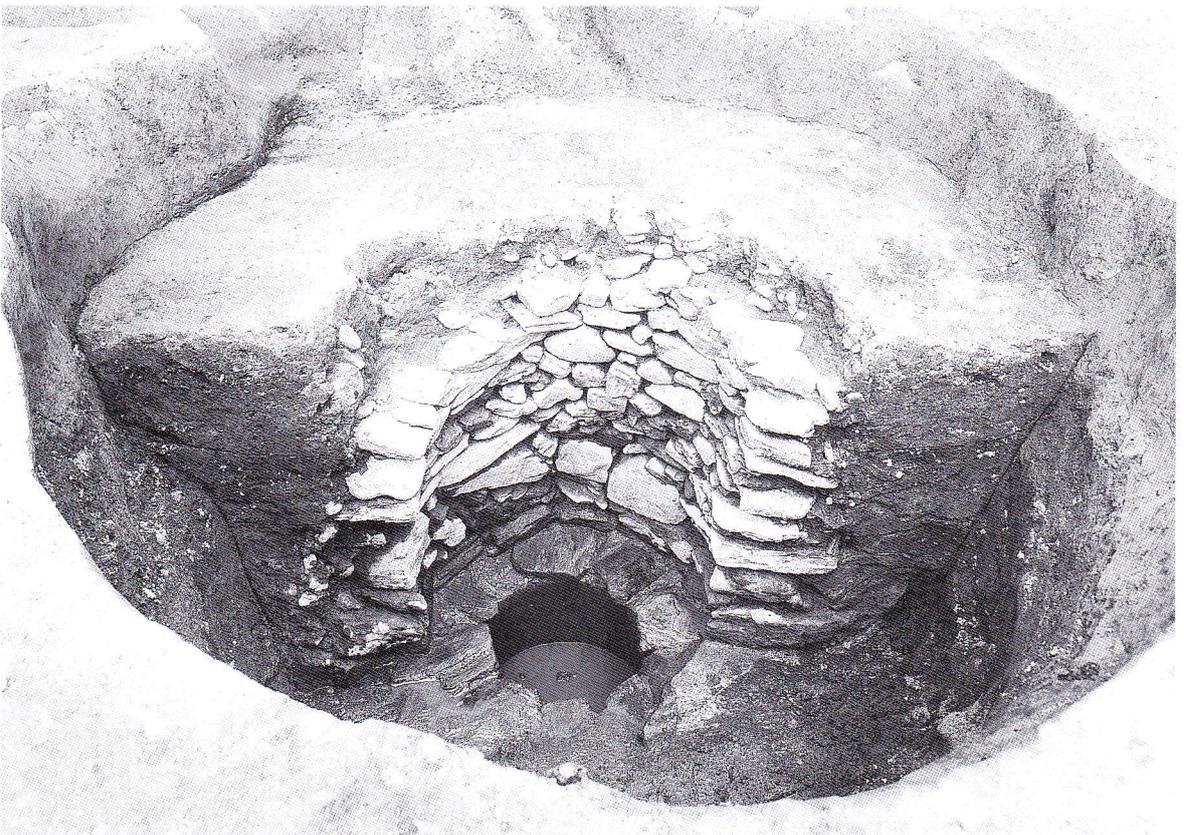
第1・2区 SK-58遺物出土状況（北東から）



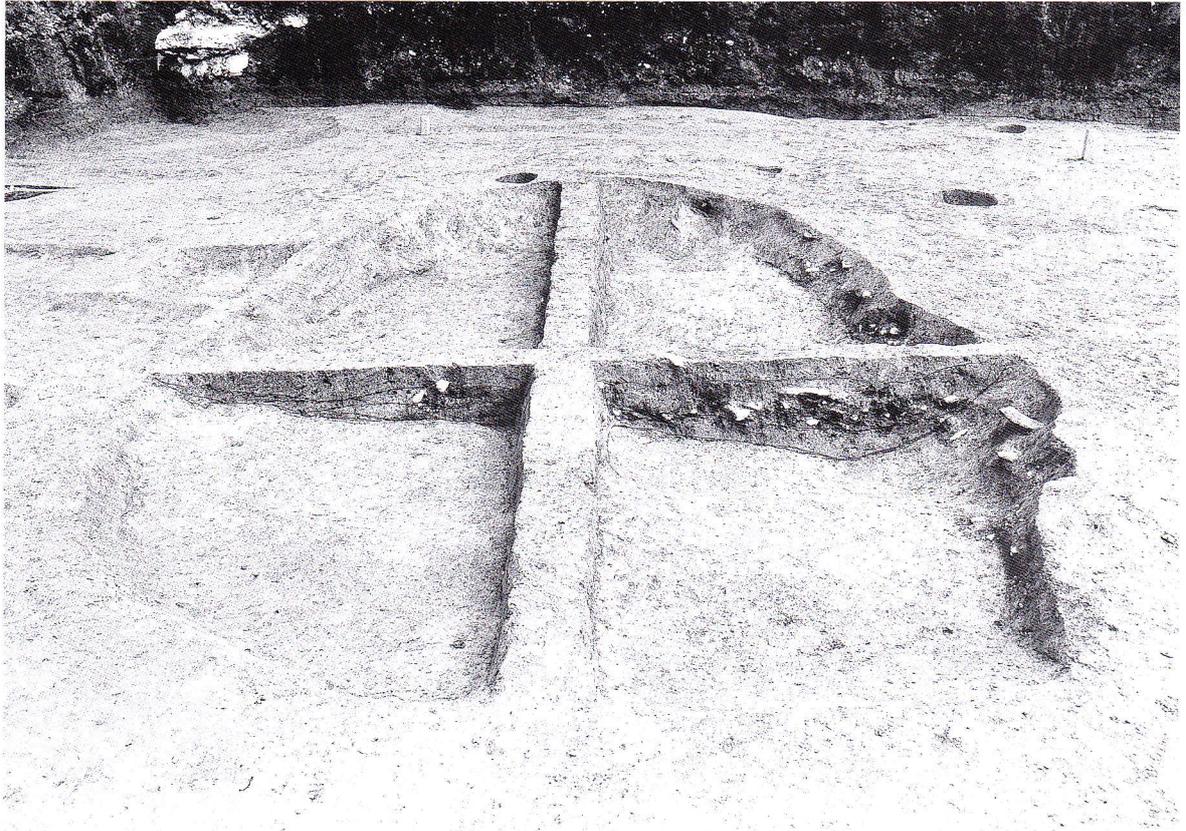
第1区 SK-30（西から）



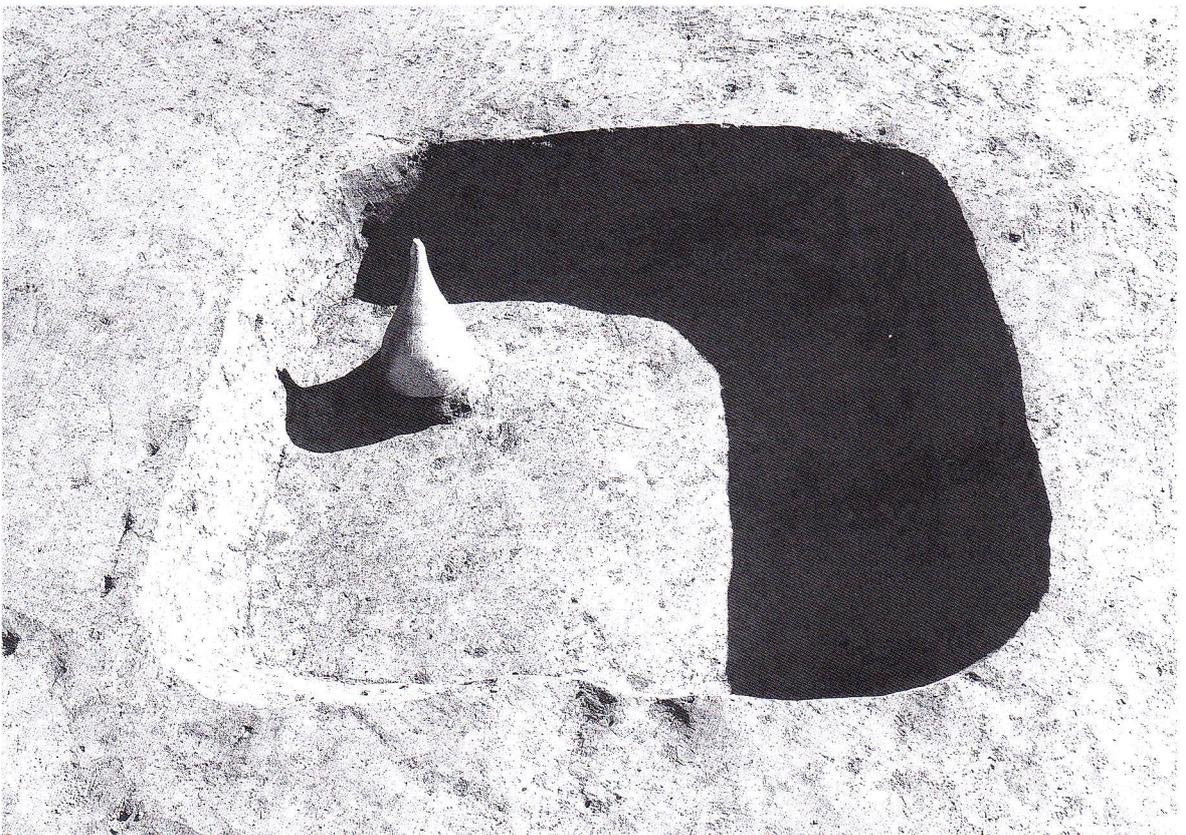
第2区 SE-5 (西から)



第2区 SE-5 断割状況 (南から)



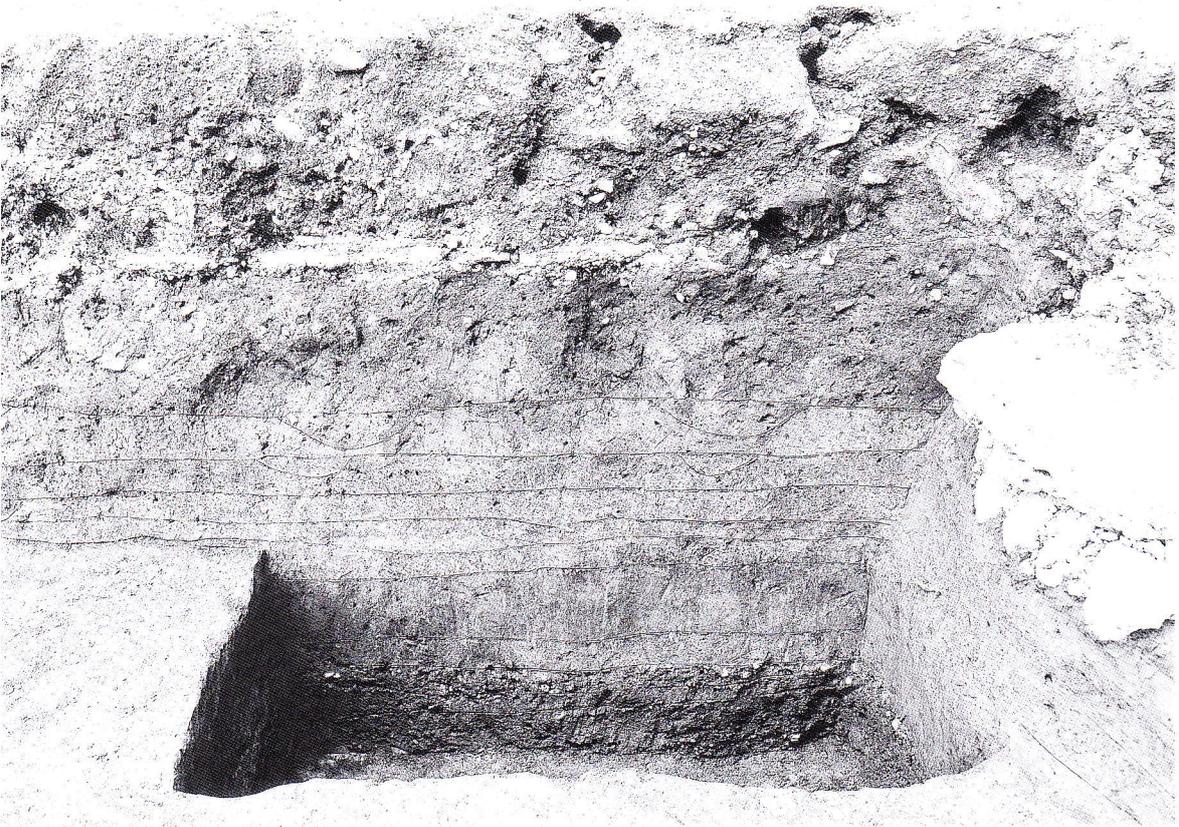
第1区 SK-4 (西から)



第1区 SK-61 (西から)



第2区 噴砂検出状況（西から）



第1区 北壁土層堆積状況（南から）



1

SK-19出土遺物 弥生土器1壺



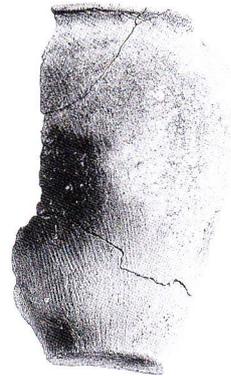
2

SK-19出土遺物 弥生土器2壺



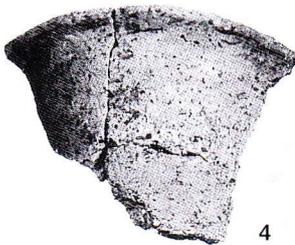
3

P-526出土遺物 弥生土器3壺

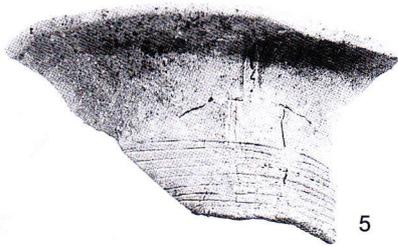


9

P-526出土遺物 弥生土器9甕



4



5



6



7



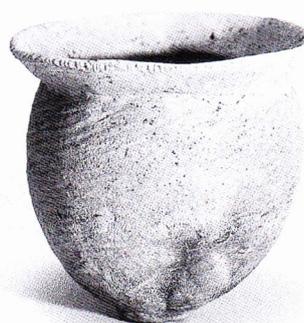
8

SK-103他出土遺物 弥生土器4~8壺



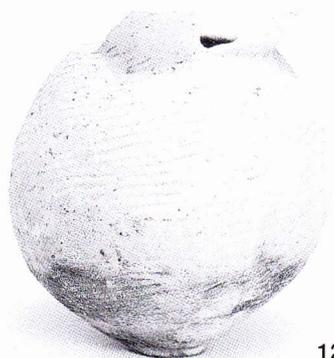
10

SE-4 出土遺物 土師器10壺



11

SE-4 出土遺物 土師器11甕



12

SE-4 出土遺物 土師器12甕



14



15

SE-4 出土遺物 土師器14・15鉢



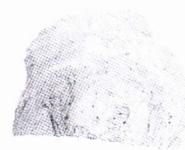
13



16



17



18



19



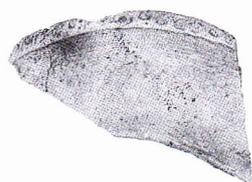
21



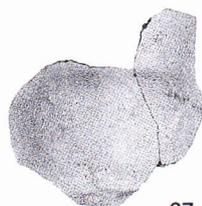
23



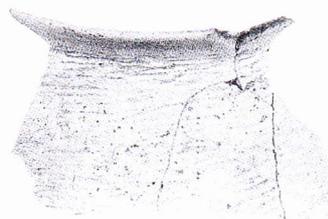
25



26



27

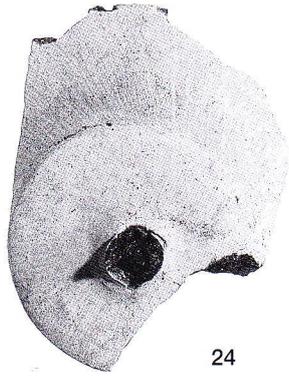


28



34

SE-4 出土遺物 土師器13甕、16・17高杯、18・19・21・23底部
SB-2 出土遺物 土師器25鉢、SB-1 出土遺物 土師器26・27壺、28甕、34底部



24

SB-2 出土遺物 土師器24高杯



30

SB-1 出土遺物 土師器30鉢

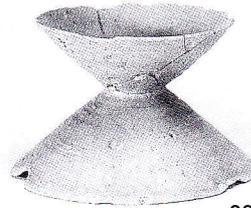


36



37

SE-6 出土遺物 土師器36・37鉢



38



39

SE-6 出土遺物 土師器38器台、39壺



40

SE-6 出土遺物 土師器40甕



42



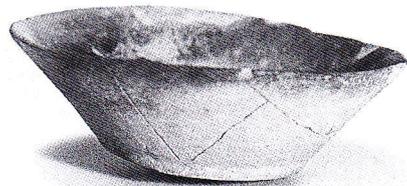
43

SK-89 出土遺物 土師器42・43壺



44

SK-89 出土遺物 土師器44壺



45

SK-91 出土遺物 土師器45高杯

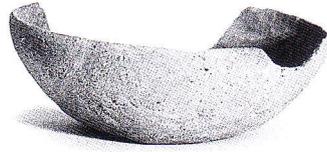


51



52

SK-69出土遺物 土師器51・52杯



53

SK-69出土遺物 土師器53杯



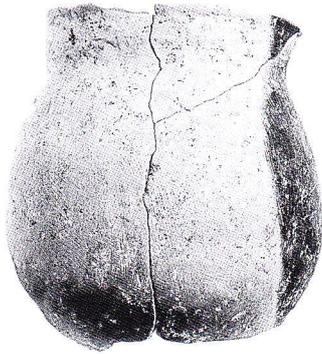
54

SK-69出土遺物 土師器54高杯



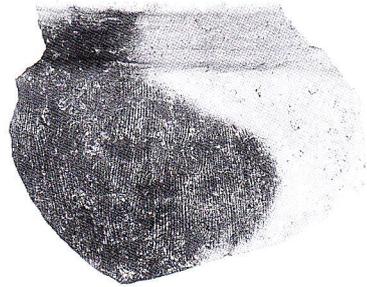
56

SK-69出土遺物 土師器56壺



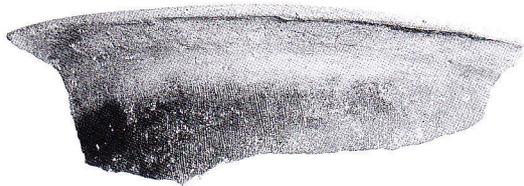
57

SK-69出土遺物 土師器57甕



58

SK-69出土遺物 土師器58甕



60

SK-69出土遺物 土師器60鉢



61

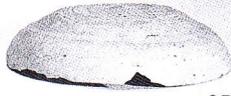


62

SK-69出土遺物 土師器61・62製塩土器



64



65

SK-69出土遺物 須惠器64・65杯蓋



67



68

SK-69出土遺物 須惠器67・68杯身



69



70

SK-69出土遺物 須惠器69・70杯身

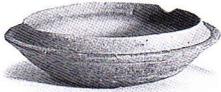


71



72

SK-69出土遺物 須惠器71・72杯身



73



75

SK-69出土遺物 須惠器73・75杯身



76



77

SK-69出土遺物 須惠器76・77杯身



79

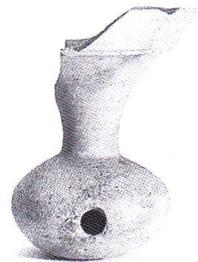


80

SK-69出土遺物 須惠器79高杯、80壺

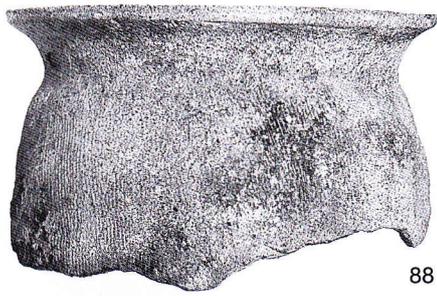


81



82

SK-69出土遺物 須惠器81・82甕



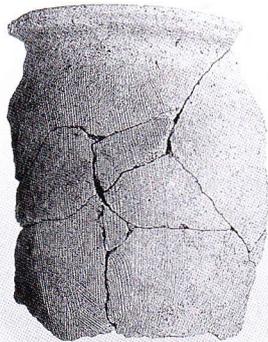
88

SK-54出土遺物 土師器88甕



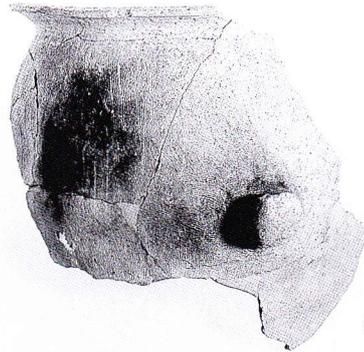
90

SK-75出土遺物 土師器90甕



91

SK-75出土遺物 土師器91甕



92

SK-75出土遺物 土師器92塼



85



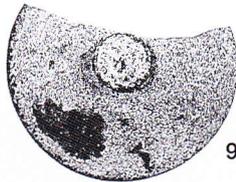
86



89



93



94



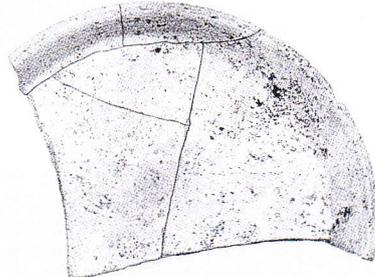
95



96



98

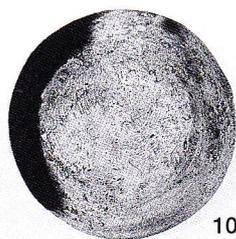


99



101

SK-54出土遺物 土師器85高杯、86壺、須恵器89台付壺、SK-75出土遺物 土師器93カマド、須恵器94蓋
SK-51他出土遺物 須恵器95杯蓋、土師器96杯蓋、98・99皿、黑色土器101杯



103



104

SE-2 出土遺物 土師器103・104皿



106

SE-2 出土遺物 瓦器106碗



108



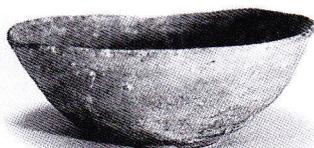
109

SK-102出土遺物 土師器108(外面)・109(内面)皿



111

SK-102出土遺物 瓦器111碗



112

SK-102出土遺物 瓦器112碗



114

SK-102出土遺物 瓦器114碗



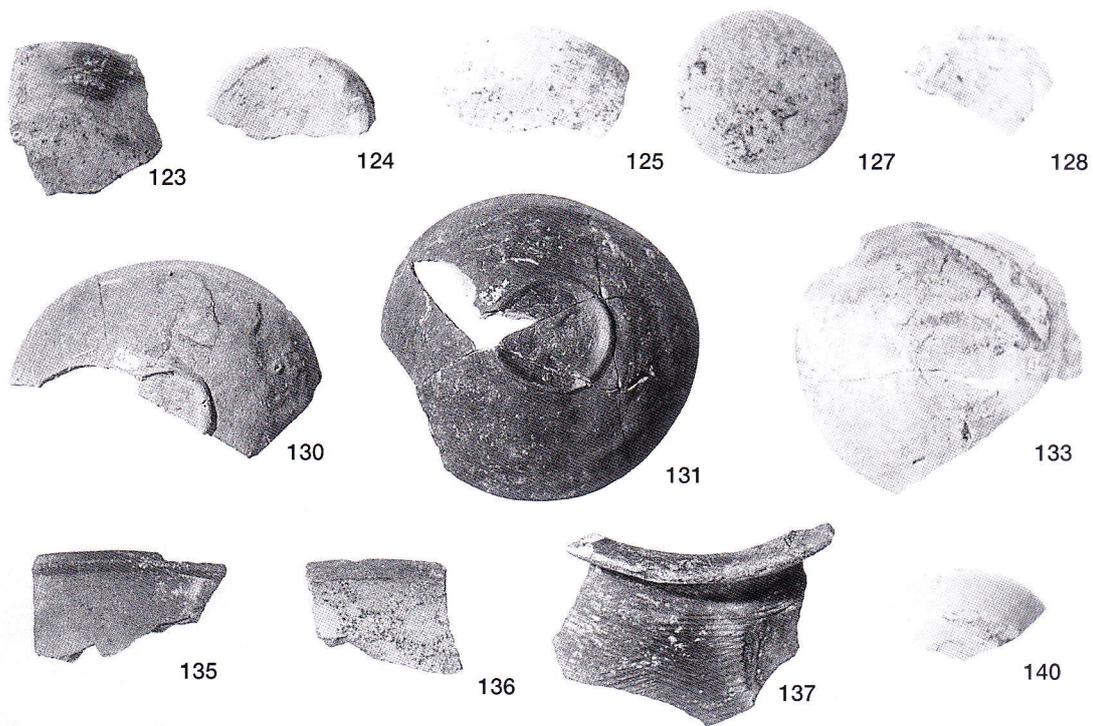
115

SD-30出土遺物 土師器115皿

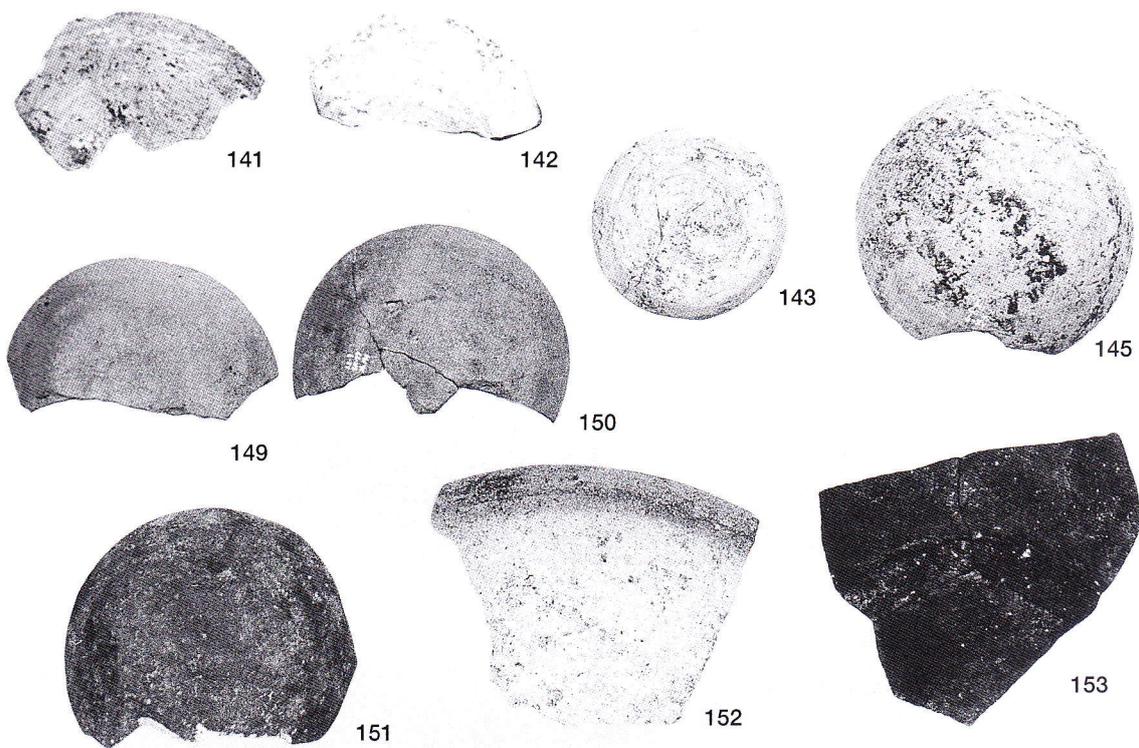


121

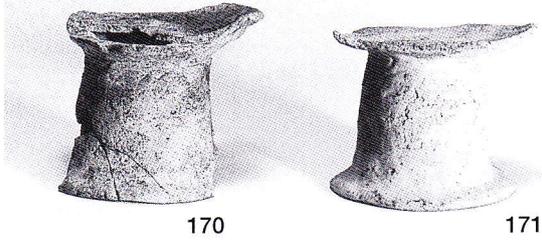
SD-30出土遺物 瓦器121碗



SE - 3 出土遺物 土師器123~125・127・128皿、瓦器130・131・133碗
東播系須恵器135・136こね鉢、137甕、中国製白磁140皿



SK - 27 出土遺物 土師器141~143・145皿、瓦器149~151碗、東播系須恵器152こね鉢
常滑焼153甕



170

171

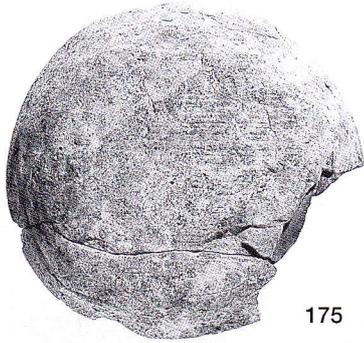
SD-12出土遺物 土師器170・171脚台付皿



172

174

SD-12出土遺物 土師器172・174脚台付皿



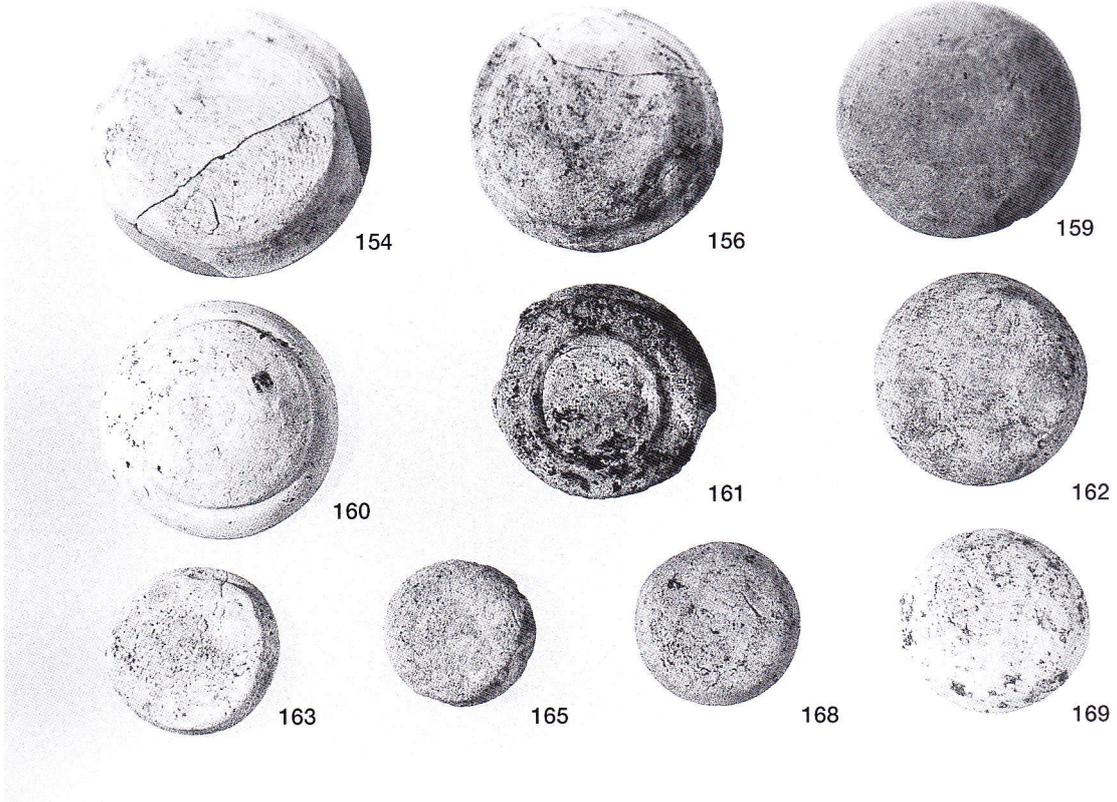
175

SD-12出土遺物 土師器175盤



178

SD-12出土遺物 土師器178盤



154

156

159

160

161

162

163

165

168

169

SD-12出土遺物 土師器154・156・159~163・165・168・169皿



181



182



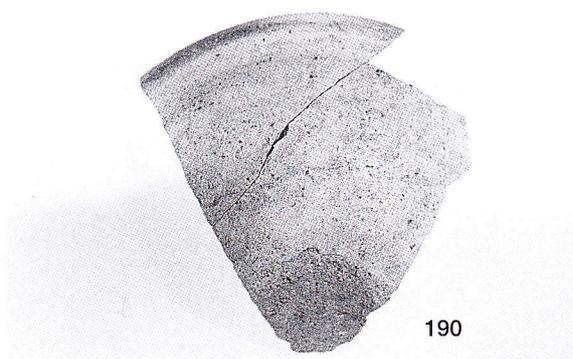
184



185

SD-12出土遺物 瓦器181・182碗

SD-12出土遺物 瓦器184・185碗



190

SD-12出土遺物 東播系須恵器190こね鉢



196



197

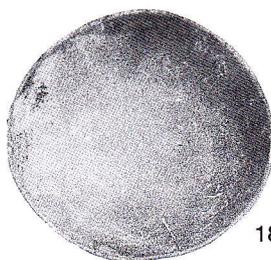


198

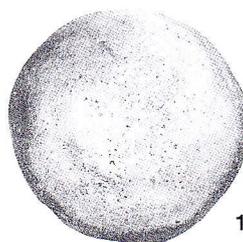
SD-12出土遺物 中国製白磁196皿
中国製青磁197・198碗



183



186



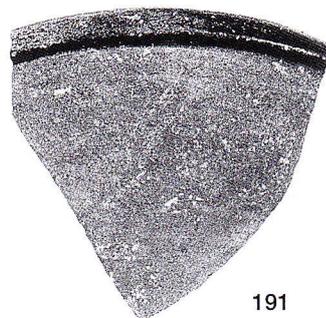
187



188



189



191

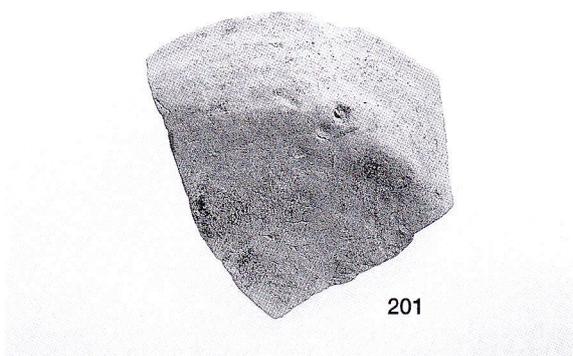


193

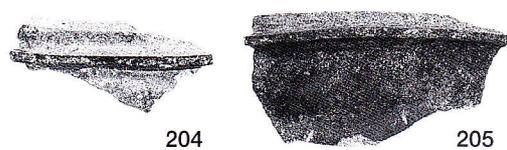


194

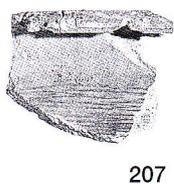
SD-12出土遺物 瓦器183・186・187碗、東播系須恵器188鉢、189・191こね鉢
常滑焼193甕、瀬戸・美濃系陶器194皿



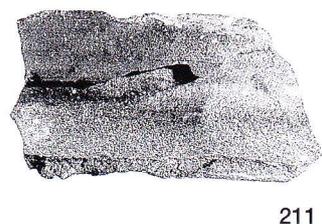
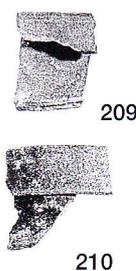
SD-8 出土遺物 土師器201盤



SD-8 出土遺物 土師器204・205釜



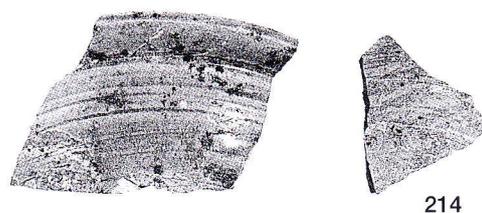
SD-8 出土遺物 瓦質土器207甕、208火鉢



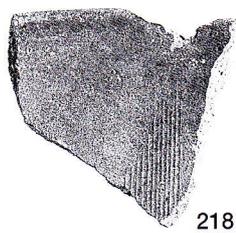
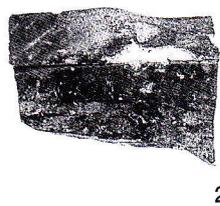
SD-8 出土遺物 常滑焼209・210壺、211甕



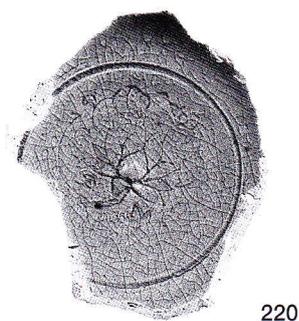
SD-8 出土遺物 備前焼212・213播鉢



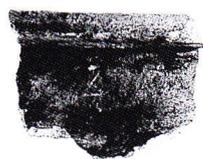
SD-8 出土遺物 瀬戸・美濃系陶器214皿



SK-23 出土遺物 瓦質土器217・218播鉢



SK-23 出土遺物 中国製青磁220碗



224



225



226

SE-1 出土遺物 土師器224釜、225播鉢

SE-1 出土遺物 瓦質土器226羽釜



230



231



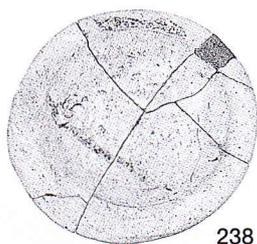
232



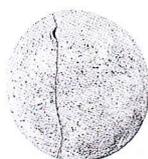
235

SK-106 出土遺物 土師器230皿
SK-97 出土遺物 土師器231皿

SK-106 出土遺物 土師器232皿
SK-28 出土遺物 土師器235皿

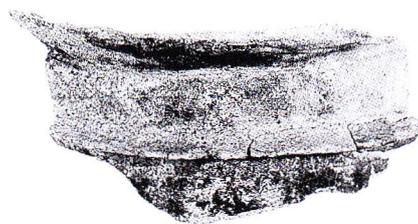


238



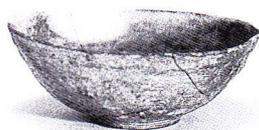
240

SK-39 出土遺物 土師器238・240皿



242

SK-97 出土遺物 土師器242釜

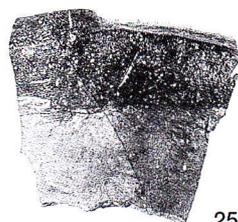


243



247

SK-103 出土遺物 瓦器243椀
SK-1 出土遺物 瓦器247皿

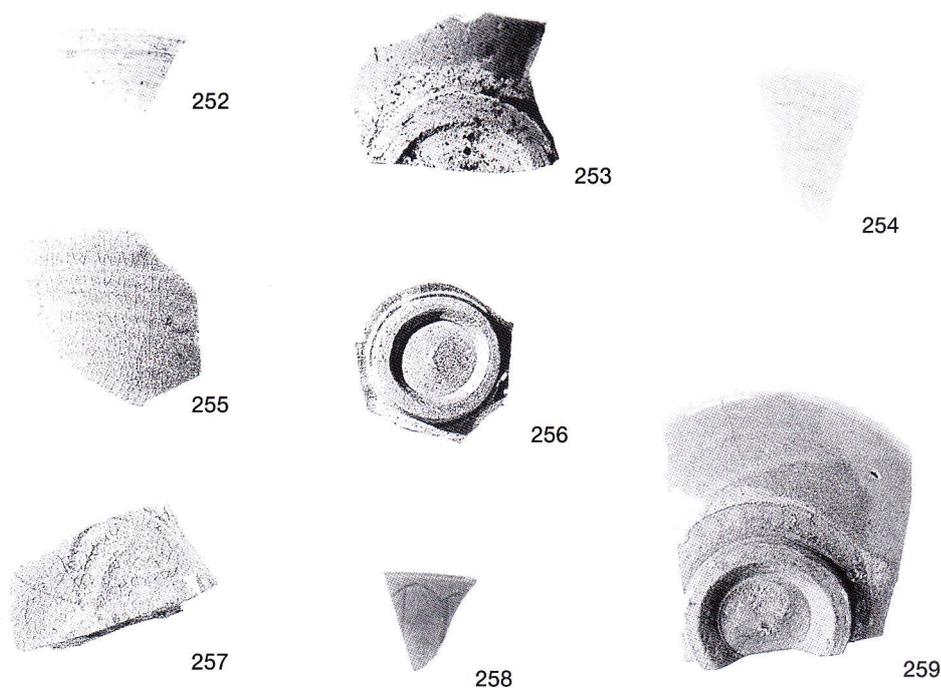


250

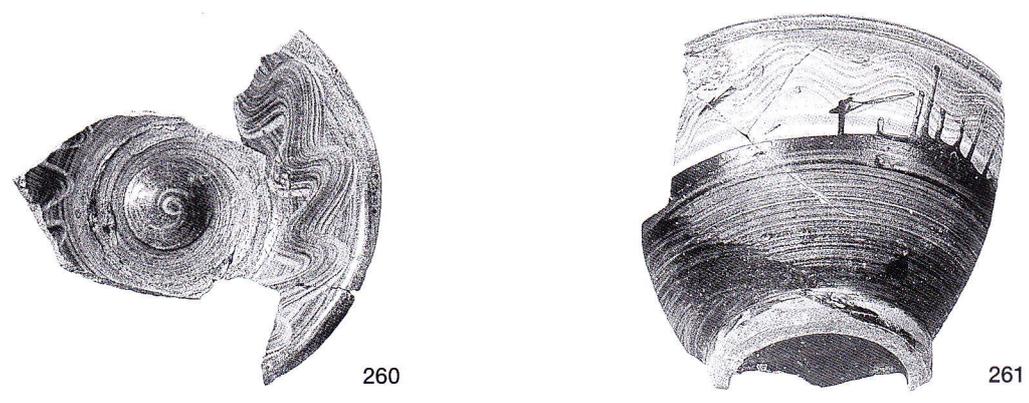


251

SD-24 出土遺物 備前焼250播鉢
SK-147 出土遺物 瀬戸・美濃系陶器251椀



SK-131他出土遺物 中国製白磁252・253碗、中国製青磁254~259碗



SE-5 出土遺物 肥前系陶器260鉢

SE-5 出土遺物 肥前系陶器261鉢



SK-15 出土遺物 肥前系磁器262碗
備前焼263蓋



SK-61 出土遺物 備前焼264德利



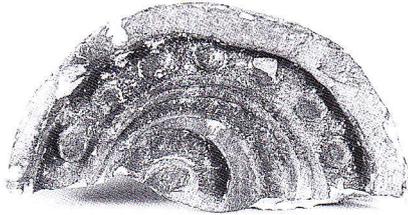
265

265 軒丸瓦



267

267 軒丸瓦



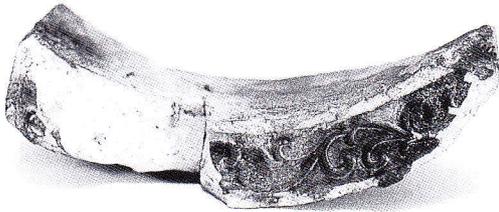
268

268 軒丸瓦



270

270 軒丸瓦



271

271 軒平瓦



272

272 軒平瓦



276



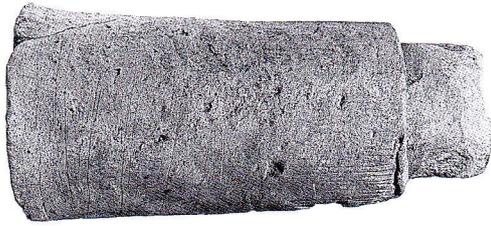
277

276 · 277 軒平瓦



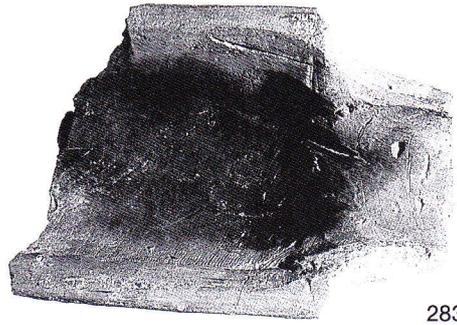
279

279 軒平瓦



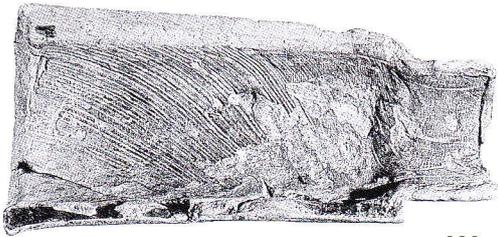
280

280 丸瓦 (凸面)



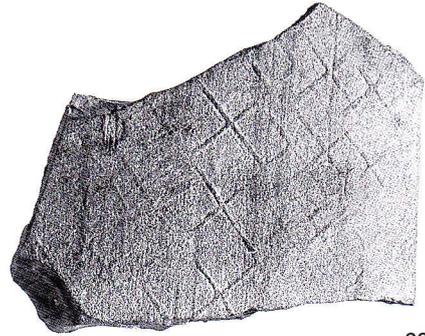
283

283 丸瓦



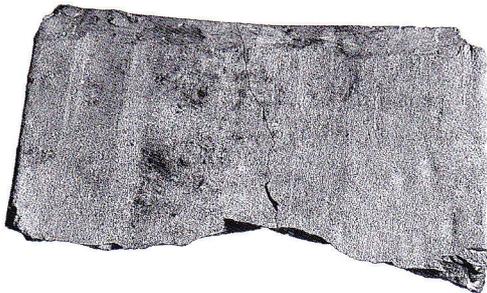
280

280 丸瓦 (凹面)



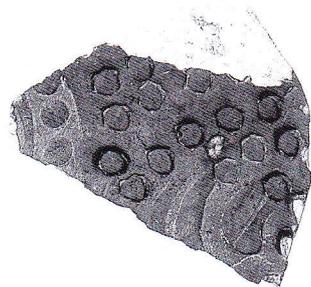
284

284 平瓦



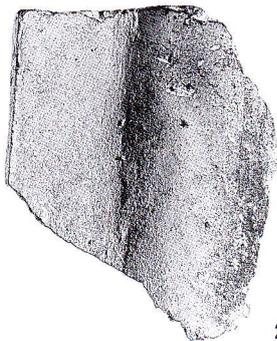
285

285 平瓦



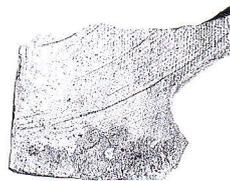
287

287 鬼瓦

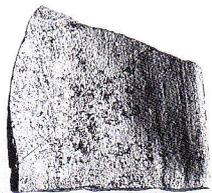


288

288 雁振瓦



289



290

289 · 290 棟込瓦



292



295



296



297

土製品 292・295土錘

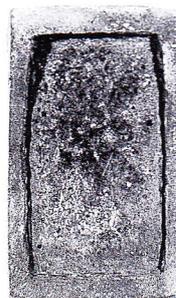
土製品 296・297土錘



298



299



300

土製品 298土玉、299ミニチュア土器

瓦製品 300硯



302



303



304



305



306



307



308

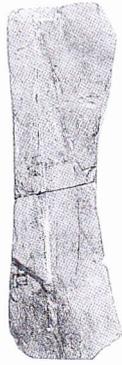


309



312

石器 302~306叩石、307・308磨石
石製品 309砥石、312茶臼



310



311

石製品 310・311砥石



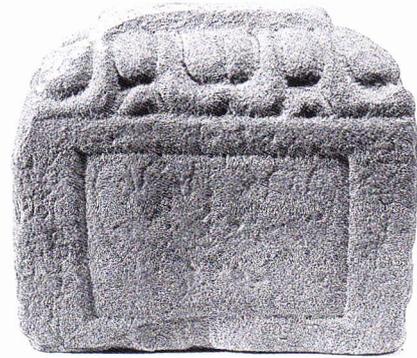
313

石造物 313一石五輪塔



314

石造物 314五輪塔（水輪）



315

石造物 315宝篋印塔（基礎）



316



317



318



319



320

金属製品 316～320銭貨、321刀子

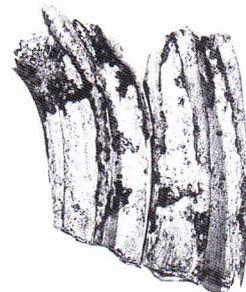


321



322

木製品 322曲物



324

自然遺物 324馬齒

平成14年3月31日発行

秋月遺跡 第9次発掘調査概報

編集・発行 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 株式会社和歌山印刷所

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 2002